
Heaven's road of the KABUTO

ハルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H e a v e n ' s r o a d o f t h e K A B U T O

【Nコード】

N 0 6 2 1 Q

【作者名】

ハルル

【あらすじ】

…事の発端は、友との何気ない会話だった――。
一人の男は“カブト”という存在が敵とされている世界で、様々な誤解と混乱を生みつつも、約束の物を探す。
その世界では、孤独の世界の中を生きる“カブト”がいると知らずに……

天の道を往き総てを司る男。天の堂を座し総てを司る男。
二人が出会う時、“世界”は急速に変化していく…

First speed

その男は、常に堂々としていた。

作務衣に身を包み、街を歩く。

容姿も端麗であるため、道行く女性達は彼の方をつい振り返ってしまうほど。

そして彼は…

一件の八百屋に立ち寄り、じつと野菜を見ていた。

「…」

品定めをしているのだろうか。

八百屋のおじさんも、少々戸惑いながら男を見ている。

よく値段などで悩む30代後半の女性などはいるのだが、…どう見繕っても20代前半の男が（作務衣姿で）野菜を一本一本確かめるなど滅多にない光景。

しかも彼が野菜を見ていた時間は、……30分以上。

野菜ひとつに時間を掛けすぎではないのか。八百屋のおじさんは、つくづくそう思っていた。

そして…

男は一本のニンジンを取り、千円札を出す。

「——これを一本貰おうか」

「あ、はい、毎度…」

あれだけ時間を掛けておいて、買うのはニンジン一本。

つくづくおかしい男だ。

そう思っではいたが、そんな反論を許さないような雰囲気が出ている。

八百屋のおじさんはビニール袋をつけようとしたが、男はそれを断る。

そして彼は袋に入れない状態で、ニンジンを持ち帰っていった…

「な、何だっただなあ？あの兄ちゃんは…」

独特な雰囲気漂わせる、その男…

彼こそは、天の道を往き総てを司る男。

——天道総司に、他ならない。

（ （ （

洋食店【Bistro la Salle】：

天道総司は店の扉を開け、やって来た。

そんな彼を出迎えたのは…

クールな印象を受ける天道総司とは真逆の、熱そうな男だった。

「——天道！お前…ニンジン一本買いに行くのに、どこまで時間が掛かっているんだよ！？」

「加賀美か。問題ない、この俺が選定に選定を重ね見つけ出した…最高の一本だ」

「そうじゃないっての！？」

加賀美新。

彼はBistro la Salleのバイトであり…“この世界”にある、秘密組織ZECTのメンバーでもある。

父親は警視總監であるそうだが、正直、この男からはエリートが放つような独特の雰囲気はない。

あるのは、少々暑苦しいこともあるが…それでも親しみやすい、好青年だった。

天道総司はそんな彼の文句をヒラリとかわしながら、もう一人のバイト…日下部ひよりに声をかけていた。

「ひより、買ってきたぞ。……最高の一本だ」

「コラ！人の話を聞けつてば！？」

「……分かったから、そこに置いててくれないかな」

日下部ひよりは、天道総司の妹だ。

兄妹といっても…相当、複雑な事情ではあるようだが…

それでも兄にとっては“大事な妹”であることに、違いはない。

天道総司はニンジンを置き、ひよりはそれを手にとって調理する。

——加賀美は困ったように頭を掻きつつも、「それにしても」とぼやく。

「最近、すっかり冷え込んできたなあ…天道やひよりも、そう思わないか？」

「冬が近いからな。——しかし加賀美、お前はいつも無駄に熱い…てつきり寒さを感じないと思ったんだが」

「おいっ！？」

「……でも確かに、ちょっと寒いかな」

天道総司の言い草に加賀美は叫ぶが、ひよりの一言に遮られる。

そして…

所謂シスコン…否、妹想いの天道総司は、「そうか」と再び店の扉を開ける。

それを見た加賀美は、慌てて彼を呼び止めようとした。

「天道！おまつ、どこに行く気だよ！？」

「決まっているだろう。……寒い日は、おでんに限る…最高の大根

を見つけてこよう」

「ま・た・か・よ！——つか、そんなに拘るなら…どうせなら、こっ…“この世界”では絶対無いような…とにかく凄い大根なんて見つけて来たらどうなんだ!？」

「加賀美…ッ」

加賀美の発言に、ひよりは珍しく慌てる。

だが…

時既に遅し。

天の道を行く男は、加賀美の【案】に乗ってしまった。

「フッ、いいだろう…お前も思わず唸るような…至高の一本を、異世界から持ってきてやるっ」

「へ？」

「はあ…」

それだけ言つと、天道総司はBistro la Salleを後にする。

そして…

残された加賀美はポカンと口を開き、ひよりは黙々と二ンジンを切っていた…

〃
〃
〃

その男は、孤独の世界にいた。

誰にも姿を見つけられず。

誰の声も聞こえず。

ただ見えるのは、周りが自分よりもゆっくりと動いていく光景…

だが、男はもうその光景に慣…れていた

この高速の次元に閉じ込められた当初は、突然の事に戸惑ったりもした。

しかし…

適応力はそれなりに高いほうなのか、今の自分の状況をすんなりと受け入れた。

——そうすることができた理由は…彼自身の、家族にあった。

守りたい場所がある。

自分の帰りを待っている場所がある。

だからこそ、その男は【孤独】な世界の中でも耐えられる。

…守りたいという気持ちに、嘘や偽りは存在しない…

自分がどのような状況に置かれていようと、守りたい場所を守れるなら……

例えばそれがどのような状況下にあったとしても、変わりはない。

「……」

最後に今の自分の状態——クロックアップの暴走が止まってから、どのくらい経ったのだろうか？

たまに、そんな事を思う。

周りがゆっくり動いているせいでもあるが、男には今一、時間の経過がどのくらいなのか…

……そんな感覚が無い。

一年のように長く感じる時間であつたとしても。

【外】は、そんなに時間が経っていないのだ。

一分一秒が長い、この空間…

声も音も何もかも聞こえない“虚無”に近い空間は、常人なら絶対に狂うだろう。

しかしこの男は狂わない。

精神的高みに到達している彼にとって、この状況は苦行ではない。

天の堂に座し、総てを司る男…

—— 天堂ソウジにとっては。

そして。

2人の男が会合時……

—— 舞台となる【世界】は、大きな渦中に飲み込まれることになる。

First speed (後書き)

遂にやつちまったカブト話。

というわけで、【Lost memory of the RYU K I】に続くオリジナル×リマジクロスオーバーは想定外のカブトから。いや、最近、ソウジさんがツボで↑

世界観的には、カブトはひよりがワームだと判明した辺り・ディケイドは17話が終わって数週間〜1ヶ月近くという、大変アバウト。Lostはオリジナルは49話後・DCDは冬映画後と若干やりやすかったのですが、……まあ所謂パラレルとして見てください。

そもそもこれを書くと思った発端が、DCD本編内で唯一ハッピーエンド…とは行かなかった男が1名いたからで。

(ネガの世界もある意味そんなものですが、まあそれは置いておいて)

リイマジもスマブラも混ぜてオリジナルを爆発させたディケブラに關しても、……なんかこの人だけやっぱり回収されなくて。

…じゃあいつその事、Lostみたいな感じの【番外編】で救済すればいいんだ！

という考えに至りました。

しかし、現段階で考えている妄想設定(ただし若干天道と被り気味ノまあ名前も被ってるんだしいいよもう)でも、不幸といえますか…

まあ、教祖（！？）だったら【不幸】ではなく【悪運】で片付けてくれそうな気がする。

だって何だかんだで、自分だけ生き残っているわけですので。妄想設定で。

後、あの人一度物凄い闇落ちしてないと今のようないんな達観しまくりな男に育つわけねえと思ひまして。

以前何気なく質問した所、多かったのが

「天道さんが叩き落す」

「フリーズを使う」

…だったんですね。

個人的には未来からやって来たゼクターがクロックアップの暴走を何とか調整してー、でもいいのですが、その前に誰が作るんだよとまあ、これからどうなっていくのかは作者の匙加減ということ。

Lost・分岐でもお分かりでしょうが、作者は大変あったま悪いです。

足りない頭フルスロットルで書いています。

特に今回は、カブト本編をまともに見ていない絶賛wikipediakオリティのため、設定などでボロの出る場面はあるでしょうが…

というか、天道総司の性格が間違っている可能性大ですが…

まあ、そこは華麗に流していただけるとありがたいです。

一速目

【カブトの世界】

この世界も、天道総司のいる世界同様…ワームが存在する。
ただ…

彼の世界と違うのは、この世界ではワームよりも恐れられている存在がいるということ。

——仮面ライダー・カブト。

クロックアップシステムの暴走のせいで、クロックアップの世界から戻れなくなった仮面ライダー…

当時、ザビー隊の隊長格に就いていた弟切ソウの触れ込みもあり、姿の視認されないカブトがこの世界の敵となっていた。

そんな事など露知らず。

町から少し離れた場所で…銀の装甲を纏ったライダーが、タキオン粒子の羽を煌かせ、まるで天使のように降り立っていた。

…カブト・ハイパーフォーム…
ハイパーゼクターを使うことで可能となる、ハイパークロックアツプ。

本来は過去や未来に渡れるほどの力を持っているが、それを利用すれば…多少の反動はあるだろうが、別の世界に渡ることも可能。

変身者…天道総司はそのまま変身を解除し、「ふむ」と周囲を見る。

そこは崩れた廃墟だった。

自分達の世界で言えば、【AREA X】に分類される…
しかし、あそこと大きく違うのは…

——東京タワーほどではないが、天を刺すかのように建てられた白い慰霊碑。

その近くに並べられた、墓標のような石。

まるでそこが、何かの記念公園であるかのような雰囲気であった。

「……異世界に着いたのか。しかし、…ここは」

「お兄さん。見かけない顔だけど…遺族の方かね？」

天道総司に声をかけてきたのは、年老いた老婆だった。

…某TV番組風に言うのなら、“第一町人”に分類されるだろうが…
そんな事はさておき、天道総司は首を横に振った。

「——いや、ここには今日初めて来た」

「そうかい…」

「ここは一体、どのような場所だ？見たところ、何かの慰霊碑のようだ」

「……ここはねえ…20年ほど前に起きた、“渋谷隕石事件”の…
平和記念公園さね」

「……！」

“渋谷隕石”

その名前には天道総司も聞き覚えがあり、老婆の話に黙って耳を傾けていた。

「……そりゃあ、酷いもんだったよ……隕石一つで、渋谷の街は壊滅しちゃったんだ。人もたくさん死んだ」

「……」

「被害者達の事を、事件の事を忘れないように……この国のお偉いさんが、この【渋谷平和記念公園】を作ったんだよ」

老婆の話聞きながら、天道総司は記念碑の近くにあった墓標の一つに目を通す。

……【日下部ソウイチ】

……【日下部マユミ】

その名前を見た天道総司は、眉を上げる。

（日下部……総一……？）

天道総司自身にも……日下部総一という、父がいた。

母親の名前は、さとみであつたが……

それはともかく、両親は彼が3歳の頃に他界しており、それがきっかけで祖母に引き取られ……“天道”姓になった経緯がある。

渋谷隕石にしろ、“日下部”の存在にしろ……

異世界とはいえ、ここまで似るものなのだろうか。天道総司は、そう思っていた。

「その隕石にでも張り付いていたのか、その日からワームが街で見かけるようになってねえ……」

「ワーム……?」

「そうさ、人に擬態する……恐ろしい化け物だよ。けれど、ワーム以上の化け物だって存在している……」

老婆がそう言った、その時だった。

——突然、黒いワゴン車のようなものが記念公園にやってくる。
天道総司はそれを見慣れており、軽く眉を上げる。

「あれは……」

「……ゼクトルーパー、全員配置につけ!」

黒いスーツを身に纏った男が、叫ぶ。

ワゴン車の中から、武装したワーム対策用の戦闘班……通称ゼクトルーパーが現れる。

ゼクトルーパーは全員武器を構えるが、対象が見つからずにいるのか戸惑っている……

そうしていると、一人の男がスーツの男に意見する。

「——やかげ夜陰さんツ!……何をしているんですか!?!」

「……かがみ鑑か。何を……とは?」

「恍けないでくださいッ!……何度言ってくれたら、分かってくれるんですか……奴を捕まえるのはやめて、今すぐゼクトルーパーを退いてください!……」

「それはできん。……奴はこの世界にとって、害虫だ……害虫を駆除

することは、いつもしていることだろう?」

「それは…それはっ! ワーム相手だからやっていることです!」

夜陰という男と、鑑という男。

…天道総司は、鑑と呼ばれた男に…自分の友を重ねていた。

アレのような荒々しさはなく、落ち着いていたが…それでも内の中に秘める熱さは、何ら変わらない。

(…加賀美を思い出す。面白い男だ)

「ワームだから?…では貴様は、このまま奴を見過ごすというのか…目に見えない脅威となった、アレを!」

「ですから…それは誤解です! 前任…弟切ソウの、狂言だったんですっ!」

「我々からすれば、奴を庇う貴様こそ…狂っているように思えるがな」

「な…!」

夜陰という男に言われ、鑑という男は反論できずにいる。

何処の加賀美も加賀美か…

そう思いつつも、天道総司は無視してその場を立ち去ろうとしていた。

だが…

「——大変です! この周辺に、ワームが出現したとの報告が!」

一人のゼクトルーパーが、叫ぶ。

それを聞いた夜陰という男は、一旦車内に戻りパソコンで様子を見る。

…すると、画面には20数体の点が点いていた。

「――状況は」

「成虫ワームはいないようですが、数が多すぎます」

「…一旦、奴の搜索はやめるか…ワームが出れば自然と現れる。…」

…全員、エリアA-20に向かえ！ワームを掃討する」

「「「はっ！」「」」

「……くそっ」

夜陰に続き、車内に入るゼクトルーパー。

…一方で鑑という男は、『街の人を守る』ためではなく、『狙いの相手がいるかもしれない』という理由で動く夜陰に不満を感じつつも、専用のバイクに乗る。

それは……加賀美新、ガタツクの乗る…ガタツクエクステンダーに酷似していた。

むしろ、そのものだ。

後に残された天道総司は、暫く彼らを見ていた後…

「…異世界のマスクライダー、か」

くすり、と余裕の笑みを浮かべつつ、歩き出していた。

彼らが去った後、…【渋谷平和記念公園】は静寂に包まれていた。

（ （ （

エリアA-20に到着した、ゼクトルーパー達。

彼らは射撃などで応戦するが、既に成虫に成長してしまったワームもあり…彼らだけでは手がつけられない。

それを見た夜陰は、ライダーベルトを装着する。

…遅れてきた、鑑もだ。

彼らの手にはそれぞれ、ザビーゼクターとガタックゼクターが飛来する。

「——総てにおいて、パーフェクトに行くぞ。変身」

「…変身！」

『『Henshin!』』

彼らはゼクターをベルトに装填し、マスクドフォームに変身。

そして…

そのまま、ホーンを倒してキャストオフを行っていた。

「キャストオフ！」

『Cast off——Change Wasp』

『Cast off——Change Stag Beetle』

『e』

ヒビイロノカネと呼ばれる未知の金属で作られたマスクドアーマー

を解除し、それぞれの基本形態が姿を表す。

蜂を模したライダー、仮面ライダーザビー。

クワガタを模したライダー、仮面ライダーガタック。

彼らはそれぞれ、成虫のワームと戦闘を始め出していた。

その戦いの様子を、天道総司は三階建てビルの非常階段から見ていた。

ガタックはやはり危なっかしい戦い方をしていたが、それでも、加賀美よりは無謀ではなく、落ち着いて状況に合わせた攻撃をしている。

対するザビーは、ゼクトルーパーと連携しワームを倒す。

…“この世界”なりのパーフェクトハーモニーか、天道総司はそう思うが…

「……これは…」

彼は、ふと気付く。

ザビーとゼクトルーパーは、サナギ態のワームしか攻撃していない。一方で、ガタックはサナギと成虫のどちらも相手にしていたが…基本的にはクロックアップを使える、成虫と戦闘している。

天道総司にはこれが、『何かを狙っている』かのように見えていた。

そんな戦闘の現場から少し離れた場所では、一人の少女が歩いていた。

——天堂マユ。

老舗おでん屋である【天堂屋】の孫娘であり、看板娘でもある。

彼女はおでんの材料である大根と卵をマイバッグに入れ、小さな芽を付けている桜の木を見上げていた…

「春はまだまだ、かぁ」

マユは桜の花が好きだ。

生まれた時期が春だったこともあるのだろうが、兄の好きな花…というのも理由の一つに挙げられる。

マユが4つぐらいの時に、彼の兄はこう話していた。

『桜の花は、一輪一輪が小さいが…慎ましく、優しく、自分を必要以上に飾らない…可憐な花だ』

『マユ。—— お前も桜の花のように、綺麗な女になるんだぞ』

兄の言葉に、マユは「うん」と頷いて答えたことを…今でもよく覚えている。

ショートボブの髪を風に揺らしながら、彼女はまだ花の咲く気配のない桜並木を歩いていた。

しかし…

「…ギギ」

…その木の陰から、エリアA-20から逃れ…やって来たワームがいた。

ワームはサナギ態ではあったが、歩いているマユを狙おうとする…だが。

——ワームはマユをその手にかかる前に、見えない何かに斬られていた。

そのワームが倒されてから、すぐのことだった。

サナギ・成虫問わず…ワームが次々と倒されてく。

——天道総司はその光景の原因を、よく知っている。

「……クロックアップか」

しかし、ザビーもガタツクもクロックアップをしてはいない。

そうになると…彼ら以外のマスクライダーが、クロックアップをしていることになる。

車内に待機していたゼクトルーパーが、ザビーに報告する。

「夜陰さん！…奴の反応です」

「そうか…ならば、早速奴を捕獲する」

『Clock Up』

「あつ、ちよつと…！」

ガタツクが叫ぶが、その前にザビーはクロックアップを行う。

——クロックアップ…

タキオン粒子の流れる目でしか視認ができず、ライダー及びワームから見れば自分達以外の時はほぼ止まっているに等しい。

簡単に言うなら、“止まっている時を移動するイメージ”である。

突然、ワームの連続撃破が止まる。

かと思いきや…いきなり建物の壁に大きくぼみができたり、ワゴン車の車体に傷が付いたりという奇怪な光景が展開される。

…ワームがクロックアップをした形跡はない…
…ということは、【別の何か】と戦っているのか…
天道総司はそう思いつつ、残ったワームに苦戦するガタックとゼクトルーパーを見…非常階段を下りていた。

突如、戦闘区域に出現した謎の男…

それを見たガタックは、「おい」と声を掛けていた。
しかし男は動じず、どんどん前に進む。

「ちょっと待て！…今は見ての通り、ワームとの戦闘中なんだ。早く…」

「——おばあちゃんは言っていた」

「は？」

「正義とは俺自身。……俺が正義だ」

そう言うと、男…天道総司はライダーベルトを装着。
すると、空からカブトゼクターが飛来した。
それを見たガタックは驚き、ゼクトルーパーも動揺している…

「え、ちょ…それって」

「…変身」

『Henshin』

「キャストオフ」

『Cast off —— Change Beetle』

相手がまともに問う隙も与えず、天道総司は変身・更にキャストオフを行う。

アーマーの下から現れたのは…

赤い装甲に、水色の複眼。

カブトムシを模した仮面ライダー…カブトであった。

それを見たゼクトルーパー達は、ざわめく。

「カブトだ…」「カブトだと?」「何故…」

そのような事を言っていたようだが、生憎とカブトは雑音に耳を傾ける趣味など無い。

カブトクナイガン・ガンモードを構え、次々とサナギワーム達を撃破していく。

「『ギイツ!』」

突然、残っていた成虫ワームがクロックアップを開始する。

対するカブトも、バツクル中心部の両脇にあるプッシュ式のスラックスイッチを叩く。

「クロックアップ」

『Clock Up』

くくく

カブトもまたクロックアップを開始し、ワーム達と戦闘を始める。
襲い掛かる成虫ワームに対し、カブトクナイガン・クナイモードで華麗に切り裂く。

…その動きはまるで、舞を見ているかのようなものだった…

残ったワームは、無謀と知りつつも背後からカブトに襲い掛かるが——
対するカブトは、カブトゼクターの上部にあるスイッチ・フルスロットルを順番に押し、ゼクターホーンを反対側に倒す。

『1、2、3』

「ライダーキック」

『Rider Kick』

『ライダーキック』

そう告げたと同時に、カブトはゼクターホーンを正位置に戻す。

すると、脚部に波動化されたタキオン粒子が迸り…

向かってくるワーム達に対して、カウンターの上段回し蹴りを決めていた。

「『ギギヤアアアッ！』」

それをまともに食らい、残ったワームは爆散…

カブトは天を指すようなポーズを取り、そして、背後を振り返る。

「——ぐあああッ！？」

ザビーが倒され、クロックアップの世界から強制解除される。
ゆっくり流れていく時の中で、変身者である夜陰がこれまたゆっくりと変身自体を解除されていた…
そして。

ザビーを倒した相手を見て、カブトは驚いていた。

「…!?!」

「…な…?」

それは相手も同じのようで、カブトをじっと見つめている。
それはそうだ…

…目の前に居たのは、自分と同じ…

——カブトなのだから。

それを見たカブト（天道）は、擬態した自分の可能性を疑う。
しかし、この世界で擬態した自分に会った覚えも…された覚えもない。

となれば…

“この世界”のカブトと判断するのが、正しいだろう。

目の前のカブトも、相手が自分に擬態したワームだと思っていた。
一度擬態され、更にその相手が大事な妹を狙い、自分を罠にかけようとしていたこともあり…

警戒心はそれなりに強かった。

だが、その考えは目の前のカブトの言葉によって否定された。

「——お前は…ガツクら同様、“この世界”のカブトか」
「……その口振りからすると、君も…違う世界から来たのか？」
「そう。…俺は天の道を往き、総てを司る男…天道総司だ」
「……天道総司？」

ポーズを決めながら言うカブト（天道）に、カブトは首を傾げていた。

…どう反応しているのか、分からなかったのだ。
というよりも、この後…どう名乗っていいのが、カブトにとっては困り者だったわけだが。

「……本当に、擬態したワームじゃないんだな？弟切ソウの分身じゃないんだな？」

「くどいぞ。…お前の名は何だ？」

「えっと、……ちよつとそこが問題だ」

「何？…まさか、名前が無いのか？」

軽いボケを決めるカブト（天道）に、カブトは軽く体を右に傾ける。
「参ったなあ…」と言つかのように、頭を掻く彼。

「いやいや、ある。名前はちゃんとあるんだ」

「ならば、早く名乗ったらどうだ。…おばあちゃんは言っていた、名もない雛鳥は巣立てないと」

「——親から貰った名前を大事にできない者は自分だけでなく、親も大事にできない親不孝者…」ということだろう？分かっているさ」
「…ほう」

「ただ、ちょっとややこしいというか…まさか……なあ」

「……」

「分かった、分かったから睨まないでくれ」

鋭く睨みつける視線を感じ取ったか、カブトは「待て」と言うかの
ように両手を広げる。

そして…

左手で天を指すポーズをしながら、カブトは自己紹介をしていた。

「君のように言うなら、…天の堂に座し総てを司る男……天堂ソウ
ジだ」

その瞬間、

カブト（天道）はカブトクナイガン・クナイモードを相手に向けな
がら、構えている。

「何だと？……名まで同じ、…ワームか」

「いやいやいやいや、君のは“道”^{みち}で俺のは“堂”^{どう}。ちなみに『総
てを司る』とか言っただけ、実際俺の『そうじ』は漢字で書いてい
ない。片仮名だ」

「…そうか」

「ああ、そうだ」

カブト（天道）はカブトクナイガンを収め、それを見たカブト（天
堂）はほっと一息つく。

しかし、とカブト（天堂）はカブト（天道）を見ながら、訊ねる。

「……随分と戦い慣れているようだな。ザビーとの戦いの合間で、見させてもらった」

「フツ、当然だ。俺は7年間……“使命”の為に、己の鍛錬に費やしていたからな」

「使命？」

「ワームを殲滅させるという使命だ」

その言葉を聞いたカプト（天堂）は、複雑そうな顔をする。というか、それは自信満々に言っている事なのだろうか……

そう思う彼であったが、ふと何かを思い出したかのように、カプト（天道）に訊ねる。

「それはいいんだが、——普通感覚で言えば……もうそろそろ、強制的にゼクターがクロックアップを解除する時間だろう？大丈夫なのか」

「……もうそんな時間が、思ったより長く話したな」

「はは、確かに。外だとザビーが倒されて30秒にも満たない時間だろうが……」

「だが……俺は後から変身したが、……お前こそ……そろそろクロックアップが解除されるはずだ」

相手が年上とは知らないのか、それとも年上でもこの態度なのか。それはさておき、カプト（天堂）は困った様子で、話していた。

「——俺のは解除されることはない。恐らく半永久的に」

「……何……？」

「俺のクロックアップシステムは故障している。……もうずっと、このままだ」

一速目（後書き）

∴ 天道 自重 w w

もうこの人に尽きます。ハイ。

何なんだこの動かしにくい男はッ！（9割褒めてます）

とりあえず、名前の由来としましては

・鑑アラタ

↓加賀美のリイマジの彼です。名字は安直に「あらた」読み。ただし「各務」は避けて。

・夜陰シユン

↓ソウという名前は弟切が使ったので、パンチホッパーの彼の名前。尚、名字は「【や】ぐるま」+「【かげ】やま」。

名前と言うよりは、名字に力を入れていますね。

なお、アラタは本当は「鋏形」とする予定でもありましたが

…あまりにもダサかったなので、ここは本当に安直に「かがみ」。

「各務」だと某作品と被ってしまいますので、「鑑」に。

加々美でも加賀見でも何でもよかったのですが、……加賀美と混じってもうややこしくなるので。

ラスト付近のソウジさんとの会話に関して。

実は、本来なら「止められない。止まらないんだ」的なことを言うお
うとしていたのですが…

ある方の作品と会話内容が被りそうだったので、その表現を廃止し
ました。

でも、天道のポケとか書いていて楽しかった。

ギャグパターンは楽しいんだよな、天道…天堂もですがww

尚、今作に関しては午前8：00縛りとなります。

だって…

仮面ライダーが始まる時間は、8：00じゃないかつ！

（それでも日曜にしないのは、ちょっととした事情があるからです）

二速目

『Clock Over』

電子音と共に、クロックアップの世界から切り離されたカブト。
しかし彼は、クロックアップの中で出会ったもう一人のカブトの事を考えていた。

（———どうということだ。クロックアップの世界から戻れない、というのは）

クロックアップの故障によって、現実世界に帰れなくなるなど…カブトは経験したことがない。

それどころか、自分の世界にいる時…そのような事例を聞いたことは一度としてなかったのだ。

——興味深い

そう思いつつ、カブトは背後を振り返る…

……そこにはカブトに対し、銃を向けるゼクトルーパー達の姿があった。

更に、夜陰も再びザビーズクターで変身しようとしている…

ガタツクの変身を解除した鑑という男は、目を丸くしながらカブトを見ていたようであったが、カブトは気にせずゼクトルーパーに訊ねる。

「ワームは殲滅した筈だ。何故、俺に武器を向ける」

「——何故か？それは…お前がカブト、人類の敵だからだッ！」

「……何だと？」

カブトが人類の敵。

それこそ一体どういうことだ、とカブトは思っていた。
しかし、カブトと夜陰の間に…突然、鑑が割って入る。

「……待つてください！カブトはクロックアップシステムの故障で、本来なら今も尚クロックアップの世界に閉じ込められている筈です…それなのに、カブトがこうやってクロックダウンシステムもなしに現実世界に戻ってこられる筈がない！！」

——少々、加賀美のように喋りやすい男だな。

カブトはそう思いながらも、夜陰とこちらの鑑のやり取りを傍観する。

「貴様の意見は聞いていない！……カブト…これから、ZECT本部に連行する」

「夜陰さん！例え…例え本人であったとしても、カブトはこれまでにワームしか襲っていない！ZECTに関しても、必要以上に攻撃を仕掛けてこなければ戦闘することはなかったはずだ！！」

「上層部の命令だ。…鑑、いくらお前でも…これ以上主人に吼える馬鹿犬のように上官おれの命に逆らうなら、降格を食らうぞ」

「……上司に『間違っている』と思ったことを伝えるのが馬鹿のすることなら、俺は馬鹿でも構いません！」

…加賀美は世界を越えても加賀美か…

そう思い、カブトは失笑する。

その笑いが自分に向けられたものだったと思った夜陰は、眉間に皺を寄せる。

「フツ、」

「…何がおかしい！」

「いや。——しかし…この世界のZECTは少々頭の足りない者が多いようだな」

「何だと…！？」

「おばあちゃんは言っていた。出汁は見ただけでは分からない…目の前にあるものだけが真実だと思うのは、馬鹿の証拠だ」

カブトの言葉に、夜陰は怒りが頂点に来たのかザビーに変身しようとする。

だが…

「……やめろっ！」

鑑が、夜陰を取り押さえる。

夜影は彼の手を振り解こうとしていたが、相手は自分を押し倒し、全体重をかけて押さえ込んでいる。

これには近くに居たゼクトルーパーも、何名か鑑を引っ張るために借り出されていた。

「鑑ッ、貴様!？」

「あのカブトの言う通りだ、……もしかしたら偶然クロックアップから解放、されたっ、本物の可能性もあるし……ZECTの追っているカブトとは違うカブトかもしれない!」

「お、おい!」

「お前らも手伝え!」

「……どっちであるにしろ、同じワームを倒す使命を持ったライダーとっ、どうして戦う必要がっ!」

「くっ、……離せッ!？」

わあわあと群がるゼクトルーパー達。

彼らに押し込まれながらも、鑑はカブトに叫んだ。

「離すかッ!——あんた、……早くにげっ……!……このままだと良くて刑務所、悪くて……殺される!」

「……ふむ、流石にそこまで“この世界”に長居する気はない。遠慮なく行かせて貰うぞ」

「……って偉そうだなあんたッ!？」

「そう、——俺は【偉い】んだ。……この世の何よりもな」

何処までも尊大な男の態度に……

——鑑は、絶叫に近い悲鳴を上げていた——

「たっ、——助けるんじゃないかったーッッッ!?!」

くくく

カブトの変身を解いた天道総司は、街を歩いていた。

子供の手を繋ぎ、歩く母親。

活気のある店。

今時の服を着た男女。

…見たところ、彼の視点からして『カブトが敵』であること以外は
…至って普通だ。

「……しかし、普通だな。異世界だから、鏡の中から怪物が出たり
…魑魅魍魎が蔓延っているのかと思っていたが」

人々も普通に過ごし。

ワームも存在し。

Z E C Tも存在する。

…しかし取り分け妙なのは、クロックアップ中に会ったあの力
ブト。

カブトだから、というだけではない…

少し字が違うぐらいで、自分と同じ『てんどうそうじ』。

クロックアップシステムの暴走で、現実世界に戻れなくなった。

本当に興味深い！

そう思いながら、天道総司はあのカブトが告げていた名を思い出し
ていた。

「——そういえば、『天の堂に座し、総てを司る』…天堂だったか」

ぶつぶつと呟きながら歩いていると、目の前に大根と卵の入った買い物袋（桜の花の刺繍が散りばめられた手製のもので、所謂“エコバッグ”というのが見て分かる）を持った、ショートボブの少女を見かける。

——？

天道総司は一瞬、彼女に、自分の妹…ひよりに近い何かを感じていた。

見たところ目の前の少女は社交的で明るく、人見知りの強いひよりとはいまひとつ正反対なのだ。

そう思いながらも、彼女のエコバッグに入っていた大根を見…天道総司はここに來た目的をようやく思い出していた。

「……俺としたことが、この世界にある“最高の一本”を探すという使命を忘れていたとは。不覚だ」

…そう。

彼はそもそも、この世界に大根を買いに來ただけなのだ。

それが妹との約束でもあり、友との約束だからだ（半ば強引に彼が決めてしまったことだが）。

しかし、彼が折角使命を思い出しても…

目の前の少女が入って行った店の名前に、自然と視線が移る。

『天堂屋』

【天堂】

その名前に、天道総司はもう一人のカブトを思い出す。

——どうやら、あのカブトに関する疑問を解消しない限り【使命】は果たせないようだ——

そんな事を思いながらも、天道総司は店の中に入ってしまった。

「いらつしやい」

店に入って早々、目に付いたのは頑固そうな老婆だった。

先程の少女は、カウンターを挟んだ場所にある厨房側に回って、大根と卵をエコバッグから出していた。

天道総司はチラリと店にいる客の皿を、いくつか見る。

——入っているのはどれも、卵とがんもどき、そして大根……
三つの具しかないおでんとは、どういうことか。

気になった天道総司はカウンターに座り、老婆に尋ねた。

「……この店では、三つの具しか扱っていないのか？」

「ああ、そうだよ。嫌なら他へ行きな」

「いや……三つの具しか置かないということは、それだけ味に自信があるということだ。……頂こう」

「マユ、今入ったお客さんに皿出しな」
「はい」

マユと呼ばれた少女は、明るい声で返事をする。
そして、あつあつのおでんを天道総司の眼前に差し出す…

常連客の顔は覚えているのか、目の前の男は初めてここにやって来た客だと思い、説明をしようとする。

しかしその声を、天道総司自身が遮った。

「どうぞ。うちでは熱いうちに…」

「——おばあちゃんは言っていた。如何なる料理も、出てきた瞬間が一番美味しいと……」

「あ、はい、…そうです」

新規の客にしては珍しい反応だったのだろう。

大抵ここに来る新規の客は、おでんを食べながら話したりする客が多く…

その度に祖母が大声で教えを説くものだから、せめて客をビックリさせないようにと、マユが直前に説明する。

しかし今日の新規客…天道総司は何も言わずとも、黙っておでんを食べていた。

それが珍しく、マユは、目を丸くして彼を見ていた。

箸を手に取り、最初に食べたのは…大根。
小さく切り、それを口に運ぶ。

——すると、大根の隅から隅まで染み込んだおでんの汁が…口の中に、広がっていく。

その味わいはとても温かく、例えるなら……深い愛情。

(……!……これは)

続けて食べたのは、がんもどき。

これも箸で分け、食べる。

卵も同様に食べるが……

——どれもが、料理に厳しい天道総司の舌に敵うほどの上手さだったのだ。

(ひよりや、じいやに匹敵するほどの味わい……成程、異世界にも料理の心を知る場所があったか)

天道総司は汁まで綺麗に飲み、皿を置く。

そして一万円札を出し、それをカウンター席に出していた。

「……とても満足だった。釣りは要らない」

「え?で、でも……」

「——しかし……少し気になったことがある。何故、大根とがんもどきと卵……この三つを選んだ?」

天道総司が気になって居たのは、具材の選択だった。

「この汁の味は、『この三つでなければならぬ』ように感じられた……」

恐らくここにおでんとしてはメジャーな竹輪に蒟蒻、はんぺん、餅巾着、牛筋肉などを入れてしまえば……途端に味が壊れてしまう。

……以前の矢車想のように言うのなら、——この三つの具でしか成しえない完全調和だ。
ハーフェクトハーモニー

すると老婆が、おでんの仕込みをしながら答えていた。

「これは、あたしら【家族】が…いつも一緒である証なんだ。それ以外に、理由はないよ」

「家族の証…か」

天道総司は、それが馬鹿らしいとは決して思わない。

むしろ彼自身が、大事な家族や妹を愛している…

そんな家族を象徴したというこのおでんは、味の善し悪しを抜きにしても…とても素晴らしく感じられた。

そうしていると、店に置かれているテレビのニュース速報が入る。

『——先程入った情報によりますと、高鳥町付近でワームとの戦闘が勃発。その際、カブトラしきライダーが姿を表したとの……』

テレビに映っていたカブトは、…視認されている辺り…恐らく天道総司のカブトであろう。

その報道が入った瞬間、店に居た客の殆どが「カブトか…」「やあねえ…」と噂する。

…一方で、報道を聞いたマユは浮かない顔をし…老婆はテレビの言うことを信用しないのか何食わぬ顔で仕込みを続けていた。

——その際、天道総司はカウンターの隅にぽつんと置かれたおでんの皿を見つける。

中は既に何も入っていないようだが、客の食べた後…のようにはとても思えなかったのだ。

何故ならそこには、客の座るような椅子はない。

そう思っていると、老婆がいつまでもカウンターにいる天道総司に告げた。

「食べ終わったなら、店を出な」

「…それもそうか。邪魔をした」

「え、あ、——あの！お釣り…！！」

店を出る天道総司に、マユは慌てて声をかける。

だが、既に彼は店を出た後…

マユは小首を傾げながら、老婆……もとい祖母に声をかけていた。

「……さっきの人って、ちょっと、土さんを思い出すかも」

「そうかねえ。少なくともあの男、それなりに料理には精通しているみたいだったかね。……」

「どうしたの？」

「——いや、何でもないよ」

祖母はそう言いながら、おでんの仕込みに戻る。
そして…

天道総司が去った後のカウンター席をちらりと見ながら、彼女は孫の顔を思い出していた。

（……うちのソウジに、どこか似ていたねえ）

~~~~~

Z E C T。

以前、ザビーの資格者を務めていた弟切ソウが内部にワームを連れ込んだことによって、組織は反壊滅状態

—— になったと、鑑アラタは思っていた。

しかし、Z E C Tは“クロックダウンシステム事件”後…指導者である三岸マサトの指示と警察関係者の協力によって急速的に持ち直していった。

三岸の手腕は、実際の所かなりのものだ。  
壊滅的打撃を受けたというのに、一般から新たにZ E C T隊員を募集し、更にドレイク・サードセクターの開発も進めている。

……最も、その方法は『カブトを敵にし続ける』ことで成し得たことだが。

三岸は“クロックダウンシステム事件”を、こう発表するようテレビ局に持ちかけていた。

『今回の作戦は、内容を知ったカブト自身の手によって潰された』  
『もはやクロックアップの世界にいるカブトを引きずり出すには、新たなるマスクドライバーシステムと…カブトの驚異を知る諸君らの協力が必要だ』

更に、“カブトを捕まえた者は賞金を出す”ということも提示し、  
こうしてZECTは戦力を以前より拡大させることに成功した。  
後は…

そのカブトを捕まえるだけなのだ。

三岸の部屋に、夜陰シユンがやってくる。

パソコンをカタカタと軽快に打ちながら、三岸は夜陰に訊ねていた。

「——カブトを取り逃がした？」

「はい。……あそこで、鑑が邪魔をしなければ…」

「奴はこのZECT内で唯一のカブト派、…いずれ潰れる。それよりも……次こそ必ずカブトを捕獲するんだ。いいな」

「分かりました」

それだけ言うと、夜陰は部屋から去っていく。

一人、残され…

三岸はパソコンの画面の資料に集中していた。

その頃。

医務室では、鑑アラタが顔を陰しくさせていた。  
その理由は…

「——つづううつ!？」

「我慢しなさい。男でしょう?」

「で、でも、… 甲さあん… あいだだだだ!？」

目の前の女性… 甲ユヅキによって、傷口を抉るように消毒液を塗られているからだ。

ピンセットで摘んだガーゼを、容赦なくぐりぐりと押し付け…

アラタは再び、絶叫していた。

「~~~~ツ!？」

「泣かない! …… まったく、あんたは本当に体の丈夫さと馬鹿さ加減しか持つていないんだから」

「そ、そんな事言わなくてもおっ…」

「褒めてるのよ」

口ではアラタを評価しているようだが、—— ガーゼを押し付けるような治し方からは想像できない。

アラタはその後もギヤアギヤア喚いていたが、それで彼女の荒っぽい治療が改善されるはずもなく…

やっと治療が終わる頃には、ワームとの戦いよりも疲労していた。

「… ぜえ、ぜえ、ぜえ」

「だらしないわね、このぐらいで」

「…… 甲さんも一回! 受けてみたらっ… いいですよっ! …… 死ぬほど痛いんですからね!？」

「はいはい。—— ところで、本当なの? カブトがクロックアップの世界から出てきたって」

ユヅキの言葉に、アラタは頷く。

—— ついでに、あの偉そうな態度の男を思い出してしまったが…  
頭を左右に激しく振ることで忘れようとしている彼に、ユヅキは遠

慮なく訊ねていた。

「それって、クロックアップが正常作動に戻ったって事？」

「どうでしょうか…俺にもよく、分からないんですよね」

「……仮にそうだとしても、念のためにゼクターを見ておかないことには分からないわね。ねえ、カブトの顔を見たんでしょう？探してきなさいよ」

「——嫌です！いくら、上司であり研究班の班長でもある甲さんの頼みだからって…」

アラタはそっぽを向くが、  
……ユヅキは腕の傷（アラタを夜陰から引き離そうとした隊員のせいでできたもの）をバチイン！と叩き、アラタは再び痛みに悶えていた。

「……ッ！？」

「探してきなさい、鑑アラタ隊員」

「お、鬼だ…悪魔だ……」

「——さ・が・し・な・さい！」

「は、はいッ！？」

鬼のようなユヅキの剣幕に、アラタは脱兎の如く医務室から逃げ出していた。

ふう、と溜め息をついた後…  
アラタと入れ替わりにやって来た夜陰を見て、不機嫌そうな顔を見せる。

「…ここに居たのか、甲ユヅキ」

「私に何か？」

「頼んでいたサソードゼクターと、ドレイクゼクター。完成したのか？」

「一応。…でも、テストして性能を確かめないことにはどうにも」

ユヅキは、夜陰が苦手…というよりも、嫌いだった。

尊大な態度で、他人を見下す男。

それがユヅキの中の【夜陰シユン】の印象であり…見ているだけで彼の前任を思い出していた。

夜陰は尚も偉そうに、「そうか」と告げる。

「出来ているのなら問題ない。今すぐ資格者を探し出し…カプト捕獲に打って出る」

「カプト捕獲、ねえ。——あなたの前任の弟切ソウもそう言ったけど、結局失敗。その上、二階級特進らしいじゃない」

「俺は前の奴とは違う。…必ずカプトを捕獲し、正当な場で裁く！」

言うだけ言うと、夜陰は医務室から出て行く。

ユヅキしか残っていない、医務室で…

はああ、と盛大な溜め息をつきながら、ユヅキは項垂れていた。

——どうしてこうも、ZECTには碌な奴がいないのかしら——  
そんな事を思いながら。

〃〃〃

カブトはクロックアップの世界の中で、歩いていた。

——カブトの立場からすれば『歩いている』のだろうが、常人からすればそれは『目に見えないほどのスピードで走っている』に過ぎない。

彼は基本、自分の【帰るべき場所】を…家族のいる場所を守っている。

そして、カブトはその【帰るべき場所】から出てきた天道総司を見つけた…

「…彼は…確か、」

高速の世界の中、ザビーとの戦闘中に…彼の顔を見ていた。

——そうだ。俺とは違う、もう一人のカブト。

カブトとしても、異世界のカブトには多少の興味があつた。

「——士ならともかく、彼はどうやってこの世界に来たのだろうか？」

世界を旅する、破壊者…ディケイド。

様々な世界を廻る彼は、“この世界”だけでなくいくつもの世界を旅している。

——自分と同じカブトであるのに、どこか違うのだろうか？

——ついでに、名前だとかカブトであるとかを差し置いて……どこか自分と同じように感じられる。

カブトはそれが気になって、仕方がなかった。

……しかし、自分の“興味本位”で大事な家族を放っておくのは、少し別問題だ。

フィロキセラワームを倒した後とはいえ、マユは元から狙われやすいのか……直接襲われかけるといことはめっきり減ったものの、それでも彼女の近くにはワームが発生したりする。

更にZECTも自分を誘っているつもりなのか、わざとクロックアップのできる個体を残す。

もしかすればワームはその場から逃げ出し、偶然マユに襲い掛かるかもしれない。

——二度と彼女がワームとの戦いに巻き込まれないためにも、カブトは、彼女にワームの接近を認知させないよう戦い続けていた。

それにあのカブトは実力が高いことも分かっている上に、また会うことになるだろう……

カブトはそう結論付け、天道総司の後を追うことをやめた。

「……やめておくか。……しかし、うちのおでんを食べに行くとはなあ……」

おばあちゃんと、口論をしていなければいいのだが。  
カブトはそんな事を心配していた。

——彼の祖母は、見た目どりの頑固者だ。

口数は多くないほうで、彼女の話す【格言】も最初の部分しか話さず、意味や答えを自分で見つけさせる。

カブトも小さい頃は祖母の言いたいことが分からず、困惑したこともあったが…

今は、彼女の言葉一つ一つの意味を理解している。

「…名前も同じ、変身するライダーも同じということは、家族構成も似ているのだろうか？……なんて、そんなおかしい話はあるはずないか」

はは、と笑いながら呑気に構えるカブト。

…とりあえず、自分の状況に関してはすっかり慣れっこのようで…しかし、家族の事以外でここまで興味を持つのはディケイド以来かと、思っていた。

## 二速目（後書き）

天道総司おま。

相変わらずのマイペースで、アラタはもはや加賀美です。

アラタってクールな印象なのになあ…

なんでこうなっただろう。

まあ、あの天道相手にするんですから、加賀美レベルにしないと釣り合わないし動かしにくいですね。

今回出てきたキャラ

・三岸マサト↓三島+根岸

・甲ユヅキ↓岬から「山」を引いた名字

夜陰よりは難産ではありません。

むしろミサキー又は既に引き算方式しか頭の中になく、「山」と「甲」なら「甲」だよなあ……と。

カブトはなんかもう、ほぼ料理番組だったと聞いていますが。

…料理の味の描写って難しいなあww

バイト先はキッチンなんですけど、既にある程度作られてあるので、パク過熱するだけとかなんですよね。

おばあちゃんは偉大です。

がんもどきはいつも苦手だったり…

るうちに、ホウレンソウ共々平気になりましたね。

いや、弟切ソウはオトギリソウって分かってるんですけど。

あ、それはそれで擬態元のソウジが嫌か……

### 三速目

天道総司は、悩んでいた。

目の前にあるのは、野菜。

その中の一種類…大根を二つほど手に取りながら、比べている。

——選んでいるのだ。

自分の目に適う食材であるかどうか、を。

「ふむ…色艶も右よりはいい。…次は…」

右手に持っていた大根を戻し、別の大根を手取る。

そして両者を見比べ、暫くした後…

左の方を戻し、また別の大根を持っていた。

「…あ、あのー…兄ちゃん」

その八百屋を経営している壮年の男は、正直、困り果てていた。

——どうして大根一本でここまで悩めるのか…

頭を抱えながらも、かれこれ30分も居座っている天道総司を見ている。

そんな時だった。

「——見つけたぞ！」

怒号に近い叫びが、聞こえてくる。

…そして至る所から現れるゼクトルーパー達…

なんだなんだと騒ぐ人混みを掻き分けながら、やって来たのは……  
夜陰シユン。

その顔を見た天道総司は、軽く溜め息をついていた。

「…またお前達か」

「観念しろ。大人しく、ZECTに来てもらおう」

「断る」

すぐに返事を返す天道総司に、夜陰は眉間に皺を寄せる。

だが、それを聞き入れるほど温和な人間ではない。

夜陰はゼクトルーパーに指示を出し、銃を構えさせながら…天道総司に尋ねていた。

「もう一度言う。ZECTに来い！」

「……おばあちゃんは言っていた…焦る魚は飯を得られぬと。目の前の獲物に躍起になって功を焦る者は、何も手に入れることはできない」

「——何処までも減らず口を…。四肢を奪ってでも、捕まえろっ！」

夜陰の言葉に、ゼクトルーパー達は銃の照準を天道総司に合わせるが…

放たれた銃弾は総て、彼に届く前に打ち落とされてしまった。

それを見た夜陰達ZECTは驚き、天道総司は手に持っていた大根を置き、立ち去っていった。

「…邪魔をしたな」

「え、ちよつ、…冷やかしなら来るな―ッ!?」

30分以上も悩んだ拳句、何も買わなかった男に…

八百屋の店主である壮年の男は、叫んでいた。

ZECTの隊員達も、ようやく状況が飲み込め…天道総司を追いかける。

しかし、夜陰達は天道総司を追うあまり…大事な事を見落としていた。

何故、撃つたはずの銃弾が潰されたのか。

そして…

「――嫌な予感がしてきてみれば、早速か…」

その原因は、今も尚クロックアップシステムが暴走しているカブトであることを、彼らは知らなかった。

カブトは、本来ならここまで家族以外の人間に固執したりはしない。だが、同じカブトである上に顔も見られている天道総司…

追わ………れている本人としては彼を放っておくことはできなかったのか、様子を見に来たのだ。そしたら、…この有様だ。

「……逃げ切ってくれと、いいのだが」

〃〃〃

人混みを掻き分け、路地裏を進む天道総司。しかし、地の利はどう考えてもあちらにある…このままではそれを利用され、挟み撃ちになるだろうと予測していた。

「しつこい奴らだ」

そんな時だった。

見慣れた顔が、建物の狭い隙間から手招きしている…その顔とは、——鑑アラタの顔だ。

「…こつちだ、早く！」

「お前は…“この世界”の、加賀美か。ZECTの一員じゃなかったのか」

「確かに俺もZECT隊員だけど、……いいから早くしてくれ！捕まりたいのか！！」

正直、天道総司にとっては、アラタもあまり信用は出来なかった。だが…

夜陰ら他のZECTよりは理解・信頼できるのか、彼の言うことに従った。

そもそも、どの道彼にはこうする他なかったのだが。

「——いたか！？」

「いや、いなかった」

「くそっ…探せ！」

自分達のすぐ近くに隠れているとも知らず、通り過ぎるゼクトルーパー達。

何とか撒いたか。

天道総司は隙間から様子を伺いながら、アラタに訊ねる。

「…何故、俺を助けようとした？」

「……甲さんに無理強いされたって事もあるけど、…やっぱり俺…どうしても今のZECTは間違っていると思うんだよ。ワームと戦うカブトを、捕まえるなんて」

「ほう…」

「とりあえず、今のZECTで信用できる人間が…一人だけ。その人なら力になってくれる。相談しに行こう」

「断る」

「そつか、ことわ……えええええっ！？」

想定外の答えに、アラタは叫ぶ。

…が、今のこの状況を思い出し…慌てて口を塞ぐ。  
そしてある程度落ち着いた後、天道総司に尋ねていた。

「な、なんでだ？」

「別に相談せずとも、俺は一人でどうにかできる」

「…おいおい」

「だが、…貸しを作ったままでは、俺の道理に反する。何処にその人間がいる？」

天道総司のその言葉に、…アラタは「へっ？」と言うような間抜け面をしていた。

実際、口をポカンと開けて目の前の男を見ていたが…  
発想の飛び具合に戸惑いながらも、訊ねていた。

「えっと、——来てくれるのか？」

「“この世界”に関する、話を聞くだけだ。助けてくれと頼みに行くわけではない」

「あ、とりあえず、……自分自身も状況が上手く飲み込めないから…詳しく話してくれてやつか？」

「そうだ」

…それって、『相談』って言うんじゃ…

そんな事を思いつつも、相手の気が変わらないうちにとアラタはその人物と連絡を取る。

そして…

話し合いの末、待ち合わせ場所は最初に天道総司が降り立った【渋谷平和記念公園】となった。

〃  
〃  
〃

【渋谷平和記念公園】にある、慰霊碑前。

——そこに、甲ユヅキは待っていた。

周囲にZECTの関係者がいないかどうか念入りに確かめた後、アラタは天道総司を連れてやってくる。

「甲さん、連れて来ました」

「連れてきた……って、誰を？」

「誰って、言われたとおりカブトの装着員を連れてきたんです」

「……カブト？彼が？」

ユヅキは驚いたように、天道総司を見ていた。

……しかし……

彼女は天道総司に疑いの目を向けながら、アラタに話していた。

「——違うんじゃないの？」

「いえ、彼がカブトです。……ただ、今ZECTの追っているカブトとは別人の可能性もありませんのです……」

「別人ね」

はつきりと断言するユヅキ。

どうしてここまで、はつきりと言えるのか…

アラタはそれが気になって、ユヅキに訊ねる。

「…どうして、そこまではつきりと？」

「若すぎるもの。……カブトに関するデータは、弟切ソウが来た時から綺麗さっぱり消去されちゃったみたいだけど…私の記憶では、カブトが世に出て来たのは13年前…」

「じゅ、13年前!？」

「そう。…見たところ彼は二十代前半、仮に20歳として…13年前は7歳。年端も行かない子供が、カブトとして戦えるはずないじゃない」

ユヅキの見解に、天道総司本人が頷いた。

「ああ。…俺がベルトを託されたのは14の時、そこから7年間の鍛錬を費やした後に…カブトとなった」

「つてことは今、21?…そうね、そのぐらいが戦士として妥当な年齢だわ」

「ええーっと…駄目だ、ワケが分からなくなってきた」

「あえて簡単に説明するなら、彼はZECTが今追っているカブトとは別人。……どうしてカブトが2人いるのかという疑問はさておき、それだけは確かなことだわ」

その言葉に、アラタもようやく納得いった。

だが…

問題は、今も尚ZECTは彼を【対象のカブト】と勘違いしてしまっていること。

これでは天道総司も元々の目的を果たせなくなるところか、いつ自

分の世界に帰れるか分かったものではない。

アラタもすっかり困りきっているようで、ユヅキに訊ねる。

「……ってことは、もう一人のカブトは今もクロックアップの世界……どうするんですか、甲さん？」

「クロックダウンシステムは大掛かりな上に、今はもう作ること自体が禁止されているから……ゼクターをベルトごと一回ぶっ壊して、現実世界に引きずり出すしかないんじゃないかしら？」

「ぶ、ぶっ壊すって……」

物騒だなあ……

そんな事を思ったアラタであったが、言ったら自分が殺される気がする。

そう思い、自粛していた。

一方でユヅキは天道総司を指差しながら、言い放つ。

「そういうわけで、もう一人のカブト君？……手伝って頂戴」  
「何故そうなる」

「だって、鑑じゃ人柄は問題ないけど実力的に信用できないし……ザビーを含めたZECT隊員はカブトをとっ捕まえることしか考えていないもの。そこで、あなたに手伝ってもらいたい」

「断る。俺は、“この世界”の事を聞きに来ただけだ……カブトを助けるのは別問題だ」

「あなたは興味ないの？——自分と同じカブトが、本来の使用限界を超過し、クロックアップの世界に取り残されている」

ユヅキの言葉に、天道総司は反応を返す。

……確かに、あのカブトのことは気になっている……

クロックアップの暴走など自分の世界では考えられない上に、本来なら人体に大きなダメージを与えるはずのそれを平然と、しかも当たり前のように受け入れる“この世界”のカブト…  
助けるかどうかは別にして、興味は存在していた。

「……確かに」

「交渉成立。…あなたはあのカブトのゼクターを破壊してくれたら、後はこっちが何とかするわ」

「…『断る』とは言ったはずだが」

「でも『興味はある』と言った。違わない？」

「違わない。……これ以上そっちのペースに付き合うつもりはない、失礼させてもらっ」

そう言つて、天道総司は静かに立ち去つていった。

その背中を眺めた後、アラタはユヅキに訊ねる…

だがユヅキは、余裕の表情。

「ど、どうするんですか？ 甲さん」

「…どうするも何も、彼がカブトを現実世界に引きずり出せばそれでいいわ。どんな方法であつてもね」

「どう考えても、してくれる雰囲気じゃないですよ…あれ」

「そうかしら？——興味があるのなら、自分から接触してくれると思っわ」

尚も自信に溢れるユヅキ。

そんな彼女に、アラタは頭を抱えていた…

くくく

マユは、お釣りを持って天道総司を探していた。

どことなく、土に似ている…そう、マユは感じていた。

偉そうな態度以前に、二人は…どこか優しい兄の面影があったのだ。

「どこに行つたんだろう…」

周囲を見渡すが、それらしき顔は見つからない。

どうしたものか…

そう思っていると、彼女の前にサナギ態のワームが現れる。

「！」

「「「キュルル…」」」

「——きゃああっ！？」

マユの危機は、カブトも感じていた。

…だが…

マユを助けに行こうとしていたカブトに、襲いかかってくるライダーがいた。

「…！」

「国賊、カブト。私の剣の前に、ひれ伏すがいい…！！」

仮面ライダー、サソード…

サソリを模した、ライダーだった。

——こんな妨害を仕掛けるのは、ZECTしかない。

カブトはつくづくしつこい奴らだ、と思いながらも…相手をしなければならぬ状況を歯がゆく思っていた。

「…悪いが、お前に構っている時間はない！」

「そちらにはなくとも、私にはある！」

マユはワーム達から、必死で逃げていた。

やろうと思えば、できるのだ。

…しかし、人間<sup>ひと</sup>として暮らしたいマユに…【その力】を使う気は一切無かった。

「はあっ…お兄ちゃん…ッ！」

ガッ、と石に躓き、マユは倒れる。

ワーム達は、好機と見たか襲いかかろうとする…

——先頭のワームが、何者かの蹴りで軽く宙に浮いていた。

「え…」

「また会ったな。偶然とは、怖いものだ」

マユの前に立っていたのは、天道総司だった。

彼はアラタと別れた後、偶然ワームに襲われていたマユを見かけ

た…

どこか、妹<sup>ひより</sup>を思い出す存在。

…そうでなくとも、天道総司は人を襲うワームを野放しにする気は毛頭無かった。

「あ、さっきの…!」

「下がっている。……来い、カブトゼクター」

天道総司の呼びかけに応えるように、カブトゼクターが飛来する。  
それを右手で受け取ると、天道総司はライダーベルトにそれを装着。  
……そのまま、流れるように変身していた。

『Henshin』

「キャストオフ」

『Cast Off : Change Beetle』

目の前に現れた、仮面ライダーカブト…  
それは、マユを混乱させるには充分だった。

「お、…お兄ちゃん…?」

「……何?…お前の兄、だと?」

「「ギョルルアッ!」」

「…まあいい、話は後だ。まずはこいつらを…倒す」

そう言いながら、カブトクナイガンを構えるカブト。  
マユも、カブトの登場に内心戸惑いながらも、近くの建物の陰に隠れる。

カブトクナイガン・ガンモードで相手ワームとの距離を保ちながら、攻撃するカブト。

「ギイッ！」

「…止めだ」

そして、電子エネルギーを小型サイクロトン粒子加速器で高エネルギービームに変換・そのまま“アバランチシュート”を放つ…その攻撃でサナギの状態だったワーム達は、一掃された。

カブトが全てのワームを倒したのを見届けた後、マユは恐る恐る顔を出す…

しかし。

「——ぐうつ!？」

カブトが、突然背後から攻撃を受け…倒れる。

一体何が起こったのか…

マユがそう思っていると、その相手は突然現れた。

『Clock Over』

「見つけたぞ、…カブト！」

「ザビー…“この世界”の矢車か、それとも影山か…！」

「矢車？影山？……誰だそれは。私は夜陰シユン…仮面ライダーザビーであり、部隊を指揮している」

カブトの言葉に、マスクの奥で眉間の皺を寄せながらも…そう告げるザビー。

彼はクロックアップでカブトの搜索をしていたところ、偶然ワームと戦う天道総司を発見。

クロックアップ状態のまま、奇襲を仕掛けたのだ。

「いくら貴様でも、今の攻撃をともに食らえば勝ち目はあるまい。  
さあ…ZECTに来てもらおうか」

「くっ…」

——油断した。

——この世界ではカブトが敵、いつZECTが襲い掛かるか分からない状況だ…  
背中に受けたダメージが大きく、カブトは窮地に立たされていた。  
だが…

「——うおおおっ!？」

『Clock Over』

「ッ!？」

カブトにしてはやけに見慣れた、紫のライダーがザビーに激突する。  
…あれは確か、サソード…

そんな事を思いながら、カブトは先程のダメージが残っているのか  
膝をつく。

そしてそのまま変身が解除され、マユは慌てて彼の肩を支えた。

「…大丈夫ですか!？」

「くっ…」

「良かった…。……あの、歩けるだけの体力はありますか？」

「…ああ」

天道総司はそう言いながら、ザビーとサソードを見る。  
ザビーは突然やって来たサソードに対し、憤っている…サソードもこちらを相手にしている余裕などなさそうだ。

「貴様ツ…何をしている!？」

「くつつ…強すぎる……」

「早くどけっ!」

「——今の内に、逃げないと…。うちまで来てください」  
「…致し方ない…」

…逃げるのは道理に反するが、このダメージでは仕方がない…  
そう判断したのか、マユに連れられるがままその場を後にしていた。

そして、ザビーとサソードはようやくこの場からカブトが消えたことを知った。

折角見つけた獲物を逃がし、ザビーは悔しそうに拳を握る…

「くそっ、カブトめ…つくづく運のいいッ!」

「カブト…? ちょっと待て、私も先程カブトと戦闘していたのだが…」  
「…」

「何？」

「ああ。お前達ZECTの依頼通り、『カブトを搜索』…捕まえるために戦闘をしていた。……逆にやられてしまったが」

サソードの言葉に、ザビーは考える。

そして…

思い出したのだ。アラタの言っていたことを。

「——ZECTの追っているカブトとは違うかもしれない、カブト…?」

「??どういうことだ??」

「…どうだっていい。待機させていたゼクトルーパーに至急、命令を出すか…」

ザビーはゆっくりと起き上がりながら、変身を解く。

そして、自分が見たというカブトとサソードの見たカブト…

これについての報告を、三岸に行っていた。

その頃、クロックアップの世界では…

サソードの一撃を肩深くに受けたカブトが、よろよと移動していた。

「——っ…」

ライダーキックで相手のクロックアップを強制的に解いたまでは、よかった。

だが…

相手が現実の時間の流れに戻る間際、額部分のサソードアンテナで右肩を貫かれたのだ。

勿論、クロックアップシステムが暴走しているカブトは…これしきのことでクロックアップは解除されない。

…もはや解除するには、クロックダウンシステムか…カブトゼクターを壊す以外にない。

カブトもそれは分かっているし、後者を試そうと思ったこともあった。

だが、今も尚ワームが蔓延り… ZECTが追いつけている状況下で壊せばどうなるか。

「…マユ、……」

サソードとの戦闘で状況は掴めなかったが、マユがカブト（天道）を支えて逃げた所を見ると…

どうやらカブト（天道）がマユの窮地を救い、その際、敵から不意打ちを食らったのだろつということを理解していた。

——心の中で天道総司に感謝しながらも、カブトは、妹を守れなかった自分を悔いていた。

~~~~~

【天堂屋】。

店の裏は家屋になっており、天道総司はそこにある一室に連れられていた。

マユはすぐさま救急箱から包帯と消毒液、ガーゼにピンセットを取り出し、傷の手当てをする…

傷の痛みに耐えながらも、天道総司は部屋を眺めていた。

——部屋は至って質素で、荷物もそこで過ごすのに不自由のないものしか置かれていない。

例を挙げれば、クローゼットや机、椅子、布団ぐらいか。

また、壁には小さい子供が描いたような絵がかけられている…

その視線に気付いたのか、マユは照れながら天道総司に語っていた。

「それ、私が小さい時に描いたの。お兄ちゃんの絵」

「…兄…そういえば、お前は俺を…カブトを見て、『兄』と呼んだな」

「うん。——今もずっと、クロックアップの世界から戻ってこない」

「……天堂ソウジか」

天道総司から出された名前に、マユは驚く。

包帯を巻く手を止め、彼に訊ねていた。

「…お兄ちゃんに会ったんですか!？」

「ああ…この世界に来て最初に、ワームとの戦闘に巻き込まれた時にな……」

「……お兄ちゃん、何か言っていますでしたか？」

「…いや、何も」

天道総司は嘘をついていない。

確かにマユに関しては、何も言っていなかったのだ…

ただ、『ZECTに今も尚追われている』とだけは呟いていた気がするが、それは話すことでもないと思い、除外していた。

「…心配なのか？」

突然、そんな問いかけが来る。

天道総司の質問に、マユは少し間をあけたが……
コクリ、と小さく頷いていた。

「うん。……お兄ちゃんは、例え世界中の人を敵に回したとしても……それでも、私達家族のために戦っている。だからこそ……心配なんです」

「……」

「どんなに叫んでも声が聞こえることはない、孤独な世界で……どんなにボロボロになっても戦っている。……心配にならないはず、ないですよ」

——でも、誰よりも家族を愛しているお兄ちゃんだからこそ。

——信じて待つことができるんです。私も、おばあちゃんも……
そう言うマユの顔は、暗く俯いているものではない。

……本当に心から、兄を。天堂ソウジを信頼している顔だった。

自身も妹を持つ立場からか、天道総司は考えていた。

そして……

結果的にユヅキの言うことを聞く羽目になることは癪であったが、アレの妹のために……

——カブトのクロックアップの暴走を止めることを、決意していた。

三速目（後書き）

カブトの世界のZECTは何処まで頭が可哀相な人ばかりなんだろうね。

ちなみに、年齢設定としては

ソウジ↓三十代前半（もうライ街辺りでは31で確定）

アラタ↓二十代前半、一応天道総司よりは1〜2歳上

シュン↓二十代後半、ただしユヅキよりは下

ユヅキ↓二十代後半

三岸↓四十後半から五十前半の間

平均年齢をぶち上げているのが三岸とソウジです。

ソウジさんはせめて二重後半にしておくべきだったか…！

でもカズマもショウイチもユウスケも土もシンジもワタルもアスムもナツミカンも役者年齢基準だしなあ↑

海東？考えていません。

タクミ君だけは明らかに高校生設定なので、役者年齢基準にはできませんが…

（ディケブラの場合、リンクが16に対してタクミ17）

年齢設定はともかく、天道総司が動く理由ときっかけが出来ましたね。

…ただし、確実にその理念に関わってくるのが「家族」と「天堂屋のおでんの味」でしょうが。
あとはあれですね。

「天堂ソウジ」に対する読者視点っていうか、作者視点。

ユヅキと天道とアラタは漫才トリオになればいいんだ
↑

四速目

そのまま天道総司は、【天堂屋】で夕飯を食べることになった。

マユが持ってきたのは、お手製の粥だった。

中には栄養がつくようにと、野菜が豊富に入っている。特に大根が。天道総司はサジを手に取りながら、天堂語録を語っていた。

「——おばあちゃんは言っていた。病は飯から、食べるという字は人が良くなると書く」

「そう。…天道さんって…お兄ちゃんと名前の読み方が似ているだけじゃなくって、おばあちゃんの格言まで知ってるんですね」

「当然だ。…俺は天の道を往き、総てを司る男だからな」

そう言いながら、天を指し示すポーズを取る天道総司。

…その指先にあったのは、電灯なわけだが。

そんな事は気にせず、粥（と言っても、もはや雑炊）を一口食べる天道総司…

「これは、……美味しいな」

「昔、お兄ちゃんから教えてもらったんです。…私が風邪を引いた時に、よく作ってくれて」

「兄の料理か」

「はい。他にも、私の誕生日のケーキとか…色々作ってくれて」

そう語るマユの顔は、楽しそうであった。

その他にも…天道総司に、兄との思い出を語るマユ。

そしてそのどれもが、優しい兄との大切な思い出でもあった…

天道総司はマユの話を聞くうちに、ふと、彼女を初めて見たときの
感じを思い出す。

——ひよりに似ている。

最初は、そう思ったこと自体を疑問に感じていた。

マユとひよりの性格は、あまりにも正反対すぎるからだ。

しかし…今は、そう感じた理由が何処となく分かつていた。

(……そうか、…)

ひよりもマユも、どことなく【影】を思わせる何かを抱えていた。

…ひよりの場合に関しては、生まれてくるはずだった妹に擬態した
ワーム…本人にその記憶はなかったものの、今はその記憶を取り戻
し…人間として生きている。

マユに関しては、どんな【影】を抱えているのか分からない。

ひよつとするとひよりと同じか、それとも…兄がカブトであると知
らず疑った過去でもあるのか。

いずれにしても、…天道総司は一層マユを、彼女の兄を救わなけれ
ばという想いが強まっていた。

(……“この世界”に来てから、調子が狂わされることばかりだ。
だが、…おばあちゃんと言っていた……強きは弱きを助けると)

しかし、天道総司としては他に気になっていることがある。
この世界に来てからというものの、窮地に陥ってもハイパーゼクター
がやって来ないのだ。

先程ザビーに不意打ちをされた際も、その場を切り抜けるためにハ
イパーゼクターを呼ぼうとした…

しかしハイパーゼクターは姿を現わず、結果としてカブト（天堂）
との戦いでやられたサソードがザビーにぶつかなければ、逃げる
ことができなかった。

…だが…それは特に気にすることでもないと思い、流していた。

~~~~~

次の日。

【天堂屋】を後にした天道総司は、早速ゼクトルーパーに囲まれて  
いた。

「——随分と用意周到だな」

そしてゼクトルーパーの間を書き分け、やって来る夜陰…

更に彼の後ろからは、白のタキシードに身を包んだ、茶髪の男。

きつとアレが“この世界”の神代剣…サソードなのだと、天道総司

は一発で見抜いていた。

実際それは間違っておらず、この世界の神代剣こと……蠅火ツルギさそりびは、手に持っていたステッキの先を天道総司に向けていた。

「国賊、カブト。この蠅火家18代目当主・蠅火ツルギが……成敗してくれる」

「フツ……悪いが、お前達に付き合っている暇はない」

「そちらになくとも、こちらにはある」

夜陰は、既にザビーに変身する準備を整えている。

一方で蠅火も余裕の顔でステッキを戻し、ゼクトルーパー達も警戒態勢を解かない。

……この囲まれた状況下で、唯一逃げ切る方法はハイパークロックアップ……

だが、ハイパーゼクターがこの世界まで天道総司を連れてきたのを最後に、姿を見せないことを考えると……到底期待はできなかった。

そんな時だった。

……夜陰が、天道総司に訊ねたのは。

「貴様を捕まえるのは容易いが……その前に、いくつか質問がある」

「ほう」

「まず一つ、——お前は本当にカブトなのか。正直に答えろ」

「……そうだ」

天道総司は、夜陰の宣言どおり正直に答える。

夜陰も、彼の態度から嘘偽りないと判断し……次の質問に取り掛かる。

「二つ目。お前はZECTに正式に所属……或いは蠅火同様、契約し

ているのか」

「…していないな」

「三つ目…これで最後だ。——これは俺の前任が消去したファイルを復元し、辛うじて知りえた情報だが…お前の名は天堂ソウジか」

「愚問を。俺は天の道を往き総てを司る男、…天道総司に他ならない」

自信満々に答える天道総司。

夜陰も、彼の反応から嘘ではないと知る…

そして、名字が違うことを一切分らないまま、ザビーゼクターを呼ぶ。

「これで決まった。…貴様は、我々の追っているカブトだ」

「…今の質問で分かるのか」

「ああ。そもそもカブトは、ZECTに所属していないどころか…契約すらしていない。フリーのライダーだ。加えてお前は天堂ソウジと名乗った…対象であることに間違いはない！」

「それだけの情報で判断するとは、…本当に“この世界”のZECTは少々頭が足りないようだな」

余裕綽々に、カブトゼクターを呼び…右手で受け取る天道総司。

それを見た蠍火は、「ん？」と疑問を感じている。

…おかしいのだ。

昨日自分と戦ったカブトは、サソードがクロックオーバーする直前に受けた攻撃で右肩を負傷した筈。

それを思い出した蠍火は、夜陰に話していた。

「…待て。私が見つけたカブトは、右肩を負傷している筈…それが原因でクロックアップから解放されたとしても、痛みは一日やそこからで治るものではないぞ」

「だが奴は、質問に総て正しく答えられた…ZECTの情報が間違っているとは考えられない」

「しかし…」

「下らない討論はZECTに帰ってするんだな。——変身」

天道総司は、相手が口ゲンカしている事も気にせずカブト・マスクドフォームに変身する。

それを見た夜陰と蠍火は、すかさず各々のゼクターを構え、マスクドフォームに変身。

そして…

「『キヤストオフ！』」

『Cast Off : Change Beetle』

『Cast Off : Change Wasp』

『Cast Off : Change Scorpion』

ほぼ同時に、ライダーフォームに変身していた。

彼らが戦闘を始めた頃…

甲ユヅキは、カブトに関しての情報を探していた。

そんな彼女の仕事を、アラタは横から見ているのみ…

そもそも機械を弄るのは得意なほうではなく、破壊されたデータファイルの復元など専門外。むしろ、パソコンのタイピングどころか携帯電話でメールを打つのも遅い方。

「…どうですか？」

「待ってて。……うーん、ZECTには正式所属・契約もしていないそうだけど…あ、あった」

「ええっと…え、ちょ、これ」

「弟切ソウが消したファイルよ。…ああ成程、所属していなかったというより…『所属していた』という証拠を消されていたのね。…ってか、あいつらはちゃんと調べなさすぎるのよ」

そう言いながら、ユヅキは復元したファイルを開く。

…そこにあつたのは、“ZECT隊員名簿”と書かれたもの…

ユヅキはそれをプリントし、現在残っているいくつかの名簿と照らし合わせながら、カブト装着員らしき男を捜していた。

「——あ、見て。……『カブトが世間の敵』と最初に報道された頃の名簿」

「どれどれ…？……あれ、弟切の名前だ」

「弟切ソウの名前がこの地点で初めて上がっていると同時に、…二階級特進したわけでもなく消えている名前があるのよ」

「んー…天堂、ソウジ…？あれ、天堂って確か…」

アラタはふと、【天堂屋】を思い出す。

あそこに行くようになったのは、弟切ソウが死んだ後…つまりはデイクイドが去った後。

知人の勧めで美味しいおでんと可愛い看板娘がいると聞いて、やって来ていた。

そしたら、…待ち構えていたのは頑固な老婆と…弟切ソウがカブトを誘き出すために使った少女。

その後、色々誤解はあったが話しているうちに打ち解け、いつの間にかアラタは【天堂屋】の常連になっていた。

「ああ、思い出した。おでん屋だ」

「知ってるの？」

「一応…でも、お兄さんの話はあまりしてくれなかったな…俺がZ ECT隊員だから簡単に教えられない、って言うのも分かるけど」

「…うん。それで、……これがその天堂ソウジ」

「いつ!？」

ユヅキがパソコンの画面に出した顔写真。

それには、アラタも眉を上げる…

それはそうだ——そこに居たのは、弟切ソウとそっくりの顔だったのだから。

……そりゃそうか…弟切に似ていれば……

そんな事を思いつつも、かつての上司に良く似た顔を見て、アラタは…正直疑っていた。

「…合成写真？」

「違うわよ、馬鹿。弟切ソウはワームだったんでしょう？だったら、あっちが擬態・こっちが本物」

「っていうか、こんな写真どこで…」

「役所の個人情報システムにアクセスして、そこ経由で」

「それ犯罪では！？それにしても……駄目だ、この顔見たらザビーで戦っている印象しかない」

「ZECT隊員として所属はしていたけど、自分がカブトつてのは隠し通していたみたいね。理由は分からないけど……この時から既に『カブトである」と知られてはいけない』理由があつたかもしれない」

そう言いながら、ユヅキは、あることを思い出していた。

「……そういえばカブトゼクターは、日下部一家が最初に作り出したゼクター……って聞いたことがあるわ」

「日下部って、……マスクドライダーシステムの基盤を作ったっていう……あの？」

「そう。あなたの使っているガタツクや他のゼクターは、その時の設計図を参考に作られたそうよ。……私が来る前のことだから、よく知らないんだけど」

「へえ……」

【日下部】という名字は、ZECTの上層部では知らない者はいないぐらい有名だった。

アラタもガタツクの装着員であるが故に、ある程度日下部については理解している。

……ワームの接近を予測し、対抗策としてマスクドライダーシステムを作った元・天文学者……

彼らは“渋谷隕石事件”が起こる数年前に、偶然小さい隕石に付着し地球にやって来たワームを見つけ、それを研究していた。

その後で巨大隕石の接近を知り、更に大量のワームがそれに付着している事実を知った後の対応は迅速だった。ライダーベルト・カブトゼクターを作り出し、ワームへの対策を立てたのだ。

……惜しむらくは、彼らが予測していた日よりも数日早く、“渋谷隕石”が起こってしまったことであつたが……

ユヅキはそれよりも、気になっていることがあった。  
カブトゼクターは確かに最初に作られたゼクター。

だが、それはいくら搜索しても見つからず…仕方なく設計図を元に、  
ザビー・ガタックゼクターを作っていた。

…どうしてカブトゼクターは、存在しなかったのか。

…そもそも、男はこういう経緯でライダーベルトを手にしたのか。

「——そんなゼクターを、そしてベルトをどうして彼が持っているのか。何故ZECTに隠していたのか。気になるわ」

「…そんな事よりも俺は、…この顔写真に眼帯の落書きをしたくなってきた」

「頭の中でしなさい」

「いや、その返しもどうかと思いますが…」

}}}}

カブト・サソード・ザビーの戦いは激しいものだった。

ゼクトルーパーの何名かはその流れ弾に当たったり、被害に遭わないようバラバラに散っていた…

それはそうだ。

そもそも彼らは、所属してそんなに経っていない。

戦闘経験も少ない彼らが、ゼクター資格者同士の戦いに対応できる筈がない。

「…ちっ！」

「くそっ、私の会ったカブトも強かったが…こちらも…強いッ！」  
「当然だ。俺は、お前達とは格が違う…！」

そう言いながら、カブトはカブトクナイガン・クナイモードを構える。

そして、クナイカッターを超高温化させて敵を切り裂く攻撃…

“アバランチスラッシュ”を、ザビーに放っていた。

「…はっ！」

「ぐああああっ！？」

ザビーはそのまま大きく吹き飛ばされ、壁に激突する。

サソードはザビーがやられ、戸惑うが…それが隙に繋がった。

実戦経験が少ないのは、サソードも同じ。

油断した所を普通の蹴りを一発入れ、ザビー同様壁に叩き付ける。

「ぬおっ！？」

「……奴を探しに行くか。クロックアップ」

『Clock Up』

カブトはそのままクロックアップを行い、高速の世界に突入。

そんな彼を追いかけようとするザビーであつたが、ダメージが相当大きかったのか、変身が解除される。

それはサソードも同様で、夜陰・蠍火両名は息を切らせながら…先程までカブトのいた場所を、眺める。

「くっ…化け物か、奴は!？」

「一筋縄では行かないようだな…」

クロックアップ空間で、カブトはもう一人のカブトを探していた。

——【天堂屋】のマユが妹ならば、恐らくは。

そう思い、【天堂屋】の周辺をくまなく探すカブト…

そして、もう一人のカブトはそこから少し離れた桜並木で見つかった。

「…見つけたぞ」

「君は…ああ、天道…総司君か」

のんびりするカブト（天堂）であつたが、カブト（天道）は構わず接近する。

そして…

カブト（天堂）は桜の木を見上げながら、カブト（天道）に語る。

「——見てくれ」

「…桜の木か？」

「ああ。…俺は桜が好きでね、昔住んでいた家も…大きな桜の木があった」

「……」

「この世界にいと、時間の経過がよく分らなくなるが…周りの光景、衣服、その時期に何の花が咲いているかで大まかに分かる。」

——今はまだ、冬か」

コクリ、とカブト（天道）は頷く。

“この世界”も自分のいる世界も、まだ桜の咲く季節ではない。

カブト（天堂）はそれを見て納得しながら、もう一度木を見上げる。

「まだまだ寒い時期はこれから、か。…おでん屋のほうは忙しくなりそうだな」

「……昨日、お前の家のおでんを食べた。ついでに、妹の料理もな」  
「知っている。…どうだった？」

「美味かった。——家族を愛し、その居場所を象徴する素晴らしいおでんと…兄であるお前を想い作られた粥だ」

そうか、とカブト（天堂）は頷く。

「それは良かった」

「ぜひとも、お前の料理も食べてみたいものだな」

「それは無理だ。——何しろ、こんな状態だからな」

「安心しろ。…それも今日で終わる」

カブト（天道）の言葉に、カブト（天堂）は一瞬戸惑う。

そして…

カブト（天道）は何の宣言もなく、突然カブトクナイガン・アックスマードで切りかかってきた。

「…ッ！？おい、一体何を」

「——お前のゼクターを破壊する」

「……ZECTに頼まれた…わけじゃなさそうだな」

「半分は俺の意志、もう半分は…お前の妹のためだ」

そう言いながら、カブト（天堂）を殴りつけようとしたカブト（天道）…

しかし、カブト（天堂）は反射神経がいいのか、ついそれをかわしてしまふ。

「…マユのため？」

「お前が心配だと言っていた」

「…申し訳ない」

「俺にも妹がいる」

「唐突だな」

「おばあちゃんは言っていた。兄は妹を守る立場にあり、と……だから俺は妹を守るために戦っている。お前もそうだろう」

「ああ。マユだけじゃない、おばあちゃんも…俺はもう二度と、大事な家族を失いたくはない。だからこそ戦っている…ワームから家族を守るために」

「……それでお前は救われたことがあるのか」

カブト（天道）の質問に、カブト（天堂）は動きが止まる。

そして、カブトゼクターのスイッチを押しながら、カブト（天道）は接近する…

「お前は家族の幸せのためなら、自分を犠牲にしてもいいと思って

いる。違うか」

「……ああ」

「どうして家族の幸せと一緒に、自分の幸せも望まない」

「…家族がいること。それが俺自身の幸せであり、望みだ。それ以外には何も望まない」

「お前がどう思おうがそれはお前の勝手だ、俺が決めることではない。だが…一つだけ言わせて貰おう」

「何だ？」

「お前の妹の、マユの一番の望み…幸せは…兄であるお前が無事に帰ってくることだ」

そう言いながら、カブト（天道）は自分の蹴りの間合いに入る。そして…

カブト（天堂）のカブトゼクターに狙いを定め、ライダーキックを放とうとしていた。

フォームを倒すための鍛錬を積んだカブト（天道）の技量ならば、ゼクターのみを破壊・クロックアップの世界から弾き出された時の衝撃を最低限緩和させる自信があった。

だが、それを虎視眈々と狙っていた者がいた…

……トンボを模した戦士、仮面ライダードレイクだ。

彼はドレイクゼクターを構え、必殺技“ライダーシューティング”の体勢に入る。

「——カブトが二人、だが…どっちでも関係はないかな」

『Rider Shooting』

ライダーシューティングには、別のタキオン粒子の力によって軌道が変わる特性がある。

その特性を利用し、最初は天道のほうのカブトに狙いを定めた…  
そしてライダーキックを放つため、タキオン粒子を纏っていた足に  
命中…軌道が反れる。

ライダーシューティングが結果的に捉えたのは、——天堂のほう  
のカブトの…カブトゼクターだった。

「ぐうつ…!?」

その一撃で、カブトゼクターは故障。

ベルトもどこか破損したのか、天堂のカブトはクロックアップの世  
界から強制的に現実世界に弾き飛ばされてしまう。

それを見たカブト（天道）は、必殺技を使用した影響が強制的にク  
ロックアップを解除されていたが…それでも彼を助けに行こうとす  
る。

……が、その前にドレイクが邪魔をしてきた。

銃の攻撃をカブトクナイガン・ガンモードで相殺し、カブトはドレ  
イクを睨む。

「貴様…!」

「もう一人のカブト君。念のために君のゼクターも、破壊させても  
らうよ」

「……おばあちゃんは言っていた。人の邪魔ばかりする者は、いつ  
かその身に罰が下ると…」

「生憎俺が君を邪魔したのって、今日が初めてのようないつもするん  
だけだね」

そんな事を言いあいながらも、互いに戦闘を始めるカブトとドレイク…

その一方で、天堂ソウジがゼクター・ベルト共に破壊された状態で川に投げ出されていた。

衝撃は水が緩和してくれ、彼は何とか岸に上がろうとする。  
だが…

「——っ…」

サソードから受けた傷の痛みが癒えていないのか、傷が痛む。  
それだけではない。

ライダーシューティングを受けた衝撃か、川に投げ出された時の影響かは定かではないが…視界がぼやけ、殆ど見えないのだ。

——岸は、どこだ

——俺は今、どこにいる

次第に抵抗する力は失せ、その上クロックアップをずっとしていたが故の負担が今になって効いてきたか、天堂ソウジは気絶。  
そのまま…川の流れに身を任せるかのように流れていった。

天道総司がドレイクをあらかた退け、川を覗き込んだ時には…  
既に、天堂ソウジらしき男はいなかった。

「くっ…」

近くには、カブトゼクターとライダーベルトが転がっている。  
どちらも損傷が激しく、特にカブトゼクターからは完全に火花が散  
っていた…

天道総司はそれを持ち上げつつ、直してくれそうな相手のいる場所  
——ZECT本部へと向かっていた。

〃  
〃  
〃

高鳥町の南にある、立川町。

そこにある一品料理屋【蓮華】を経営している“高宮ユリ”は、明  
日の材料の買い出しの帰りだった。

買い物袋の中に入っているのは、大根・ニンジン・キャベツなど…  
種類も彩りも豊富な野菜。

【今日のオススメメニュー】はタマネギの丸ごと焼きだったから、  
明日は何にしようか…

そんな事を考えていると、彼女はふと、川岸に人がいるのを視認す

る。

…見た目は三十代前半の男だろうか。  
右肩からは血が出ており、酷く衰弱しているようにも見える。

「何、あれ…人？」

——これは流石に、放っておけない。

『救急車を呼ぶ』という考えは存在していなかったのか、…ユリは  
男を助けようと…一心不乱に走り出していた。

## 四速目（後書き）

おのれドレイクウウウウ！（鳴滝風）

ドレイク余計なことかしませんね。

いや、初めて出てきた奴にこんなこと言うのもあれですが…

今回初めて出てきた新キャラ達

・蠍火ツルギ↓蠍<sup>サンリ</sup>＋火。なんか、“さそりび”って響きが格好良かった。

・高宮ユリ↓竹宮弓子＋高山百合子（ゴン）。2人の名前を足して2で割ったら綺麗に合わさった。

Lostでもやっていたんですけど、地名＋店名について。

実は、ちょびつとネタ的な物を入れています。

【Lost memory of the RYUKI】に関しては、秋山（蓮の名字）町とか入江（鎌田の中の人の名字）一丁目とか。

拳句の果てには忠蟹ボル公…

今回に関しては

高鳥町↓高鳥蓮華。ちなみに、彼女の名前のほうはユリの店に使われている。

立川町↓立川大吾。ちなみに彼のリイマジは出ません。

…こんな感じですかね？

Lostゝみたいにもうちちょっと遊べばよかったかな…

こういう小ネタを見つけてみるのも、小説の醍醐味であり、またそんな小ネタを盛り込むのも書き手の醍醐味でもあると思いますね。

…あれ、

……何か話し忘れてるぞ、…何だろう

## 五速目

ZECT本部。

帰ってきた仮面ライダー・ドレイク…瑠璃星ダイスケの話を聞いた夜陰は、耳を疑っていた。

「——カブトゼクターを破壊した…？」

「まあね。……あの様子だと、ベルトもイカれてるだろうけど」

「それで、カブトは」

「さあ…何せ二人もカブトがいた上に、もう一方は未だ健在。……しかもかなり強くて、逆にこっちがやられたわけ」

瑠璃星の話を聞き、「そうか」とだけ返す夜陰。

…ゼクターとベルトが破壊されたということは、それを直すためにもこちらに入り込む必要があるはず…

そう考え、念のために三岸の指示を仰ぐべく…報告に向かう。

そんな夜陰の背中を眺めながら、瑠璃星は蠍火に尋ねる。

「…あんたは、どういった理由で…参加したんだい？カブト討伐に」  
「蠍火家18代目当主として、町を騒がす国賊…カブトは放っておくわけにも行くまい」

「へえ、随分な大義名分だね。——俺は金さえもらえれば、それでいいよ」

「金で動くか。傭兵らしい身の在り方だな」

蠍火の言葉を、瑠璃星は軽く流す。

……彼は見下して言っているわけではない。

世間知らずの坊ちゃんであるが故、口の聞き方を知らないのだ。

それに間違ったことを言っているわけでもないため、瑠璃星はただ、「はいはい」とだけ返していた。

そんな様子を、影から覗いていたのは……  
鑑アラタだ。

サソードゼクターとドレイクゼクターが実戦投入されたことは、Z ECT隊員である彼の耳にも入っている。

だが……それが一般人、しかも投入の理由が【カプト捕獲】と聞いて、アラタは頭を抱えていた。

「うわぁ……どうするんだよ。ライダーが増えてくれたのはありがたいけど……どう考えたって、カプトを捕まえるための奴らじゃないか」

「——確かにな」

「そうそう、確か……につ！？」

アラタの背後に居たのは、……天道総司。

それを見たアラタは驚くが、相手は「静かにしろ」と小声で叱咤する。

「……“この世界”の加賀美。この間連れていた女は何処だ」

「甲さん？…何しに来たんだよ」

「…内密にコイツを直してもらいたい」

そう言つて天道総司が見せたのは、——壊れたカブトゼクターとライダーベルト。

それを見たアラタは、目を見開く…

が、こういう状況下で加賀美のように大声を出さない辺り…彼は『加賀美を少し大人しくした感じ』なのだろう。

ゼクターとベルト、そして天道総司を交互に見ながら…アラタは訊ねる。

「これって…あんたのか？」

「いいや、違う。——“この世界”のカブトのベルトとゼクターだ」

「ってことは、天堂ソウジって人のか…よし分かった。ただ、ZECT内で直すのは少し厳しい…甲さんに連絡して、別の場所で落ち合おう」

「それがいいな。場所は…どうする」

「立川町にある、俺の家はどうだ？…赤い屋根と、大きな金木犀の木が目印だ」

そんな説明で大丈夫だろうか、とアラタは内心不安であつたが…

天道総司は「問題ない」と言うかのように、頷く。

そして二人は一旦別れ、天道総司はベルト一式を持って脱出・アラタはユヅキに相談しに向かつていた。

三岸の部屋。

夜陰から報告を受け、三岸は目を見開く。

「ゼクターを破壊した？それで、カブトはどうなった」

「ドレイク…瑠璃星ダイスケの話では、クロックアップの世界から強制的に追い出され…そのまま川に落ちたとか」

「顔は見えていないのか？」

「それが、まったく…。弟切ソウが消去したデータの修復も急いでいますが、…少し戸惑っているようですね」

苦い顔をしながら、夜陰は報告する。

…実は、天堂ソウジに関するデータを復元したのはユヅキが先。

そして彼女はこの情報を易々と夜陰らに渡すわけには行かないと、データを完全破棄した後ダミーファイルを作り、更にそれを復元するための厳重なパスワードをかけていた。

彼女は基本的に、今のZECTのやり方を好いていない。

カブトを捕まえてどうする気なのか。もしかしたら、それはZECTだけでなく世界単位で関わることはないのか。

——女の直感で察したユヅキは、ZECTを裏切るようなやり方を取ったのだ。

「…まあいい。カブトはもう一人いると言っていたな…それを探し出し、居場所を吐かせろ」

「分かりました」

そう言って、夜陰は部屋から出ていく。

そして…

トランシーバーの電源を点け、配置していたゼクトルーパー達に連

絡を取る。

「…全兵に告ぐ。カブトは高鳥町…或いは立川町に潜伏している可能性がある。それらしき者を見つけ次第、逐一連絡を取れ！」

〃  
〃  
〃

ゼクトルーパーは夜陰の指示通り、高鳥町…そして立川町を搜索していた。

天道総司はこのままZECTが放置する筈がないと予想し、身を隠しながら目的の場所を探す。

そして見つけたのは、…赤い屋根の家に金木犀の木。  
表札にも【鑑】とあり、あれが待ち合わせ場所かと天道総司は思っていた。

その10分後に、アラタもゼクトルーパーから身を隠しながらやって来る。

…そもそも『自分の家に帰るだけ』なのに、隠れて歩く必要があるのか……

天道総司は金木犀の陰に隠れつつそう思い、アラタが鍵を開けたのを見計らってこっそりと中に入る。

更にその5分後に、ユヅキも合流。  
そして…

天道総司は、彼女の前にライダーベルトとカブトゼクターを差し出していた。

「——“この世界”のカブトのゼクターと、ベルトだ」

「あなたがやったの？」

「いや、…俺だったら変身者を川まで吹っ飛ばすようなヘマはしない。……ドレイクだ」

「ドレイク…成程、アレのシステムなら納得行くわ」

うんうん、と頷きながらユヅキはゼクターを見る。

…そして…

「あちゃー」と声を上げながら、天道総司とアラタに言う。

「……クロックアップシステムのミソ、タキオン粒子の動力回路がイカれちゃってるじゃない。これじゃあ、クロックアップが暴走しちゃうわけよ」

「直るのか？」

「直すわ。…ベルトもとなると…それなりに、時間が掛かると思うけど」

そう言いながら、天道総司の持っていたベルトとゼクターを受け取るユヅキ。

「そうか」とだけ言うと、彼は立ち去ろうとしていたが…

そんな彼の作務衣を引っ張りながら、慌ててアラタが引き止める。

「……って、ちょっと待て。お前、どこに帰る気だよ」

「……ふむ、そういえば……俺は“この世界”の人間じゃない。ハイパーゼクターも来ない以上、住む場所は必要か」

「いや、そうじゃなくて……この状況下で」

「というわけで、“この世界”の加賀美。……特別に俺が炊事・洗濯といった家事全般をしてやろう。だから、泊める」

——どこか偉そうな態度はさておき。

家に泊めてもらうつもり満々の天道総司に、アラタは叫んでいた。

「ちょおつ、……いつの間に俺の家に泊まる気で!？」

「違うのか。てつきり、異世界の加賀美とはいえ気が利くと思っていたのだが」

「いいじゃない。自由にあっちこっちフラフラされるよりも、ある程度待っている場所が決まっていた方が緊急時に便利だわ」

「甲さんまでえ……」

がつくり、という擬音が聞こえるほどの勢いで肩を落とすアラタ。

……こうして……

三人の奇妙な同棲生活が、始まったのであった。

「——そうだ、私も暫くこの家使わせてもらうつから」

「はあ!？」

「だって自宅が見張られている危険性だってあるじゃない」

「いや、それって、俺の家も一緒じゃ……」

「加賀美なら大丈夫だろう。そこまで警戒されない」

「そうそう」

「……いや、…あんたらなあ」

俺の家、どうなっていくんだろう。

…一人は尊大で傲慢ちき。

…一人は上司の特権乱用。

そんな彼らと一つ屋根の下で暮らす…という不安で、アラタは胸が張り裂けそうであつた。

くくく

「——きゃあああつ！！」

「ぐあああつ！」

「…いやあつ！」

叫び声が、聞こえる。

目の前に映って居たのは、若い夫婦と…まだ3つだった、妹。

しかし夫婦は、それぞれの前に立っていたワームに擬態された後、殺されてしまう。

残された妹も…また、ワームに擬態される。

だが、そのワームは闘争本能を持たなかったのか…妹を襲うことは

なく、そのまま気絶。

代わりに、母親に擬態したワームが彼女を手につけようとしていた。

その光景を、“彼”は偶然見ていた。

…元々は夫婦と娘三人家族が水入らずで、遊園地に行く予定であった…

その際、祖母の店を手伝うために残ろうとしていた“彼”は

「あんたも行きな。血は繋がっていなくとも、あんたはあの子のお兄ちゃんだからね」

と祖母に言われ、その後を追っていた。

そもそも、“彼”を生んだ両親と妹の両親は違う。

繋がりがあると言えば、母親同士が姉妹であり、祖母の娘であるということ。

ある事情で“彼”の両親は11歳の頃に先立ち、“彼”は唯一の血縁関係であった祖母に引き取られ、姓も【天堂】となった。

“彼”が来て数年経った後に母の妹も結婚し、妹も生まれた。

妹とは直接の血の繋がりはないが、それでも、兄妹のように仲睦まじく…一緒に育っていた。

その矢先の、この事件だ。

目の前で、ワームに妹が殺され…

だが、その近くで横たわっている妹に似た存在。

—…どうということだ

その思考に至ると同時に、“彼”は妹を…そして妹の家族を殺した

存在に、殴りかかっていた。

しかし、人間で太刀打ちできるような相手ではない。

触手のような腕で弾き飛ばされ、“彼”は壁に叩きつけられる。

ワームの狙いも“彼”に定まり、まさに殺されかけようとしていた

……その時だった。

突然空から、カブトムシのような機械がやって来て……ワームを蹴散らす。

そして、それは“彼”の目の前にやってくる。

体中に激しい痛みを感じながらも、“彼”は……それを手に取り、更に肌身離さず持っていた両親の形見

——ライダーベルトを、装着していた。

「……変身ッ！」

『H e n s h i n 』

……そこから後の事は、正直よく覚えていなかった。

ただ、分かっていたのは……

初めて変身し、初めて戦ったにもかかわらず……自然と、『どう闘えばいいのか』が分かる。

己の感覚を頼りに、彼は一心不乱に戦う。

そして……

『1 / 2 / 3 : R i d e r K i c k 』

二体のワームに、タキオン粒子を纏った蹴りを浴びせていた。  
ワームはそのまま爆散…

そして、“彼”——否、カブトは妹に擬態したワームに近付く。  
だが…

「う、うん…」

妹に擬態したワームは、ゆっくり目を開ける。

それを見た“彼”は、変身を解く。

——どうしてそうしたのかは、“彼”にも分からない。  
だが、一つだけ言えたのは……

「……？おにいちゃん、どうしたの？？」

…目の前の妹は、自分がワームである記憶が一切ないようだった。  
この時、“彼”はワームの持つ擬態能力とその特性について…まったく知らなかった。

しかし目の前に居る妹は、確かに自分達との記憶を持った妹だった。

「……おにいちゃん…？」

「——ッ、…マユ…！」

本物はワームに殺され、目の前の妹は自分がワームであることを知らない。

…その事実には、“彼”は妹を抱きしめ…泣いていた。

そして、誓ったのだ。

——何があっても、マユは俺が護る

——ワームだとしても、彼女は俺の妹なんだ

——護りきれなかった家族や…マユの分まで、……この子を護ってみせる

——例えそれが、世界中を敵に回す行為だとしても…！

立川町にある、一品料理屋…【蓮華】。

建物は二階建てで、一階部分が店として開放しており…二階は自宅だ。

その一室で、天堂ソウジは目を覚ましていた。  
だが…

視界が未だにぼやけ、はつきりと見えないでいる。

ゆつくりと起き上がり、そのままぼうつとしていると…

「あ、起きたんですか」

若い女性の声が、聞こえてきた。

…声色からして、二十代前半だろうか。

そんな事を思っていると、女性は微笑みながら——しかし残念ながら、天堂ソウジにはその顔が見えていない——自己紹介を始めた。

「私は、高宮ユリ。……あなた、川岸に流れ着いていたんですよ。覚えていますか」

「……川岸」

それを聞いて、川に落とされた経緯を思い出す天堂ソウジ。

…ちなみに彼は金槌ではない。

しかし、サソードから受けた肩の痛みと…クロックアップの世界に続けた代償による疲労で気絶。そのまま、川の流れに身を任せていたのだ。

苦虫を噛み潰したような顔をしながらも、天堂ソウジはユリに訊ねていた。

「俺は…天堂ソウジ」

「天堂さん…。あの、天堂さんはどうしてあんな場所に？肩も、怪我していたみたいですけど」

「……色々あってな」

「…もしかして通り魔に遭って、肩を刺され…そのまま川に！？」

「あー…ええっと、……否定できないのが逆に怖いぐらいに近い…かもしれない」

はは、と軽く笑いながら誤魔化す天堂ソウジ。

……ほぼ当たっているのが、本当に怖い所なのだが、  
そうしていると、ユリは彼の目の前に、お盆に乗せた作りたての料理を出す。

——大根の煮物のようだ。

「とりあえず、こんな物しかないですけど……宜しかったら」

「あ、ああ……」

天堂ソウジは、悩んでいた。

……最初はどこか頭でも打ったせいで目が見えないのかと思っており、  
いずれ回復するだろうと思っていたが……どうやらそうではないらしい。

目の前に何があるのか、まったく見えないのだ。

……とりあえず手探りで箸のような物を探してみるが、なかなか見当  
違いの方向に行く。

「……もしかして、目が見えないんですか？」

「……ああ」

ユリからの問いに、天堂ソウジは正直に答えていた。  
というより、誤魔化しようがないのだ。

ユリは少し困ったような顔をしながらも、彼の手に箸を持たせていた。

「どうぞ」

「……すまない。……」

そう言つて箸を動かすが、——どうも皿の上の大根ではなく布団の方を刺してしまう。

ユリも、こればかりは自分が悪かったとつくづく反省。

……とりあえず三十代前半の男には屈辱的だな、と思いながらも、提案していた。

「あの、——私が食べさせましょうか」

「……本当にすまない」

ちなみにこの男、…大の男が会つたばかりの女性に食べさせてもらうのは恥とは思つておらず、むしろこの状況下なら「仕方がない」と流していた。

柔軟性だけは、かなり高いのだ……主に祖母の影響で。

ユリの手伝いで、ようやく一口。

…ベースは醤油だろうか

…鰹節の味も利いている、削りたてか

…味がよく染み込んでいるし、何より歯ごたえがいい

言いたいことは色々あったが、生憎と天堂ソウジは評論家ではない。味の感想を、率直に告げていた。

「——美味しいな」

「本当ですか？」

「ああ。…ところで、隠し味は味醂か？」

「はい、そうです」

「俺もよく使う。大根は好物でな、昔はよく作っていた」

「私も大根好きなんですよ。おでんとか、味噌汁とか…必ず入れるなあ」

大根効果か、2人はすぐに打ち解けていた。

そして、互いにおでん屋（の孫）と一品料理屋（の経営者）という立場からか…

自然と料理の話ばかりを、口にしていた。

「——実家がおでん屋さんですか？」

「ああ。高鳥町にあるんだが」

「ごめんなさい、店のほうが忙しくて行ったことがないんです。…

…ああ、でも、小さい時に一回だけ…高鳥町に行ったことは」

「そうなのか？」

「はい。…そういえば、その時…4歳の頃にお母さんとはぐれて迷子になっちゃって、……その時偶然…ある男の子に助けてもらったんですよね」

「ほう。——それで、その後は？」

「その子が一緒になって探してくれて、…見つかった時にはわんわん泣いてました」

「そうか…それ以来、高鳥には一度も？」

「行ってないですね。そもそも、5歳の時に父の都合で引っ越して…20でやつとこっちに帰ってきたので」

「そうなのか。…どうして、また？」

「私、誓ったんです。——もう一回この町に戻ってきて、そして前に助けてくれた男の子に…料理でお礼をするんだって」

「料理で？それはまた、どうして」

「その子…泣いていた私を励まそうと、自分の作ったクッキーをくれたんです。だから、恩返しをするなら料理で……って、もう18

年も昔じゃ…相手も絶対町を離れてますよね」

はは、と笑うユリ。

だが、天堂ソウジは天を指差すポーズを取りながら…  
ユリに語っていた。

「——会えるさ。…所離れど、空一つ」

「え？」

「空はいつの時代、どの場所からもずっと同じところにある…同じ  
空の下にいる限り、また必ず会えるだろうさ」

「……面白い人ですね。天堂さんって」

クス、と笑いながらユリは天堂ソウジを見ていた。

…それと同時に、彼をどこかで見たような…そんな気がしていたが、  
ユリはその事を思い出せずにいた。

〃  
〃  
〃

その夜。

鑑家では、天道総司による料理が披露されていた。

…今日の夕飯は、鯖味噌。

アラタは特有の匂いのためか鯖は苦手であったが、不思議と彼の鯖味噌からは、独特のクセのある臭いはない。

箸でそれを小さく切分け、一口。

…すると、これまでに食べたこともないような味わいが口の中に広がっていた。

「…んっ！……うまいっ！？」

「当然だ」

「本当？……美味しい…ねえ、あなた、どこかで料理人とかしてるの？」

「いいや。……料理の心得はあるが、職に就いたことはない」

——それって、所謂ニートでは？

アラタはそう思っていたが、いくらニートでもこんな尊大なニートは見たことがない。

むしろ部屋に籠っているインドア派に会わせたいぐらいの、破天荒ぶり。

…つかむしろ、ニートの皆さんのほうに失礼な奴かもしれない。

彼の無駄なスペックの高さと尊大な態度が、ZECT所属のアラタでさえ頭痛を感じるというのに。

（…こいつ、スペックの無駄遣いだ…親の顔が見てみたい）

「勿体無いわね。顔立ちもよくて、アラタより頭が良さそうで、料理も美味しいのに」

「——つて、甲さああん!？」

アラタの目の前で失礼な発言をするユヅキ。

しかし、そんな事などお構いなしに、天道総司も天堂ソウジに失礼なことを言っていた。

「俺は今の生き方に満足している。……ところで、天堂ソウジ……“この世界”の俺もそうなのか？」

「……今は所属記録自体完全に消されているけど、ZECTでちゃんと働いてたつての……」

「後、調べて分かったのは……他の隊員に比べて結構早帰りだったそうね。……実家がおでん屋、って聞いているから……その手伝いかしら」

「——フツ」

「いや、何の笑みだよ! おま、『働いたら負け』とか思っていないよな? 言っておくけどお前の方が人として駄目なほうだからな!？」

そう言うアラタであったが、

…天道総司は尚も自身ありげに、天を指差しながら告げていた。

「俺は天の道を行き総てを司る男。…俺の通った後に、道ができる。つまり俺が【駄目】ということは……無い!」

「ワケ分からんツ!? ああ、ちよつ、甲さん…こいつ殴りたい! この就職難に平然としているような馬鹿、ぶん殴りたいツ!?!？」

「……外でやってなさい」

…彼らも彼らの夜を過ぎ、また【カブトの世界】での一日が過ぎ  
ていく…

## 五速目（後書き）

天道＋アラタ＋ユヅキ＝鑑家乗っ取られフラグ。

何だろうこのトリオ漫才ww

Lostにも城戸＋春沢＋顥娃坂のトリオ漫才がありましたけど…  
城戸（バカ）＋春沢（腹黒）＋顥娃坂（まとも）に対して、天道（俺様）＋アラタ（バカ）＋ユヅキ（強引）……あれ何これアラタ超かわいいそう。

今回は一人しかいないのであれですが、一応由来解説。

瑠璃星ディスク↓オオ“ルリ”トンボ＋星。蠍火と似たような感じで、「瑠璃」の後に「星」ってカッコいいんじゃないかっていう！

人の名前は基本的に、ライダーならライダーに変身した時のモチーフです。

ただし春沢美佳と蛭川イツロウは違いますが。

前者に関してはどこかで使いたかった名前でもあり（暁光も同様）、後者に関しては「ヒルカメレオン」という怪人からほぼ来ておりますww

難産のキャラもいることはいますが。

ちよろつと出ました天堂さんの過去。しかし…

…… まだまだ……

序の口なんだぜ……

まあ、七速目ぐらいまでですかね。引っ張るのは。

「所離れど」は教祖の言葉です。

おでーん！

次回は次回で瑠璃星さんマジ外道（？）  
↑

あれ……瑠璃星って本当に、プロットの地点ではこんなキャラじゃなかったのに……

## 六速目

あれから、二日ほど経った。

天道総司・鑑アラタ・甲ユヅキの三人は、共同生活をしつつ互いに助け合っていた。

ユヅキは、ZECTに『有給休暇』を突きつけ休みを貰う…こうすることで、カプトゼクター並びにライダーベルトの修復に時間を割く。

アラタはいつも通りZECTに行って、内部関係を調べることにしていた。

…そして天道総司は…家で料理をするか、ゼクトルーパー並びにマスクドライバー達に見つからないよう天堂ソウジの行方を捜すが…  
…見つからず仕舞いだった。

この日の夕飯（献立は豚汁と十穀米ご飯、ホウレン草の胡麻和え）を食べ終わった後、ユヅキから“現在の状況”を話していた。

「——カプトゼクターは、着々と修理が進んでいるけど…あなた達はどうなの？」

「最近、三岸さんが研究班を集めて何か作っているみたいですけど…流石にそれ以上は、俺は元より夜陰さんすら分からないみたいで」  
「……天堂ソウジらしき男は見つかっていない。“この世界”における俺だとしたら、雰囲気で分かる筈なのだが…」

「おでん屋には帰っていないの？」

「俺、今日の帰りに寄ったんですが…それっぽい人はいませんでした」

「……一体何処にいるんだ、天堂ソウジ…」

状況を聞き合い、はあ、と溜め息をついたのはアラタだ。  
壊れたゼクターとベルトは、何とかなるだろう。

しかし…追われている本人が行方知れずなのは、状況はあまり変わらない…

アラタは頬杖をつきながら、天道総司に尋ねる。

「……だから、甲さんが見つけてくれた顔写真を…他のZECT隊員に見つかからないようプリントするから、それを見て探せばいいって言ってるのに…」

「しかし、お前は別人とはいえ加賀美だからな…何らかのミスで、夜陰とやらの情報が入る恐れがある」

「鑑だから当然ね」

…家主なのに、この扱い。

自分の扱いの不遇さに心で涙しながらも、アラタは声を絞り出す。

「…ちよつ、酷くないか…？」

「情報戦では、“この世界”の岬のお陰でこちらが優位な状況だ…それを崩したくないのも事実だな。それに、この俺に分からないものはない」

(…思えば、似顔絵を描けば手っ取り早いと思うんだけど…鑑も私も絵心皆無だから、逆に絵心の何たるかを叩き込まれそうなのよね)

その頃、ZECT。

未だにどちらのカブトも捕らえられず、夜陰は親指の爪を噛んでいた。

——まだ見つからないというのか…  
苛々しながらも、彼は整列していたゼクトルーパー達に叱咤している。

「…お前達…情けないと思わないのかっ！たかがカブトに、ここまで苦戦しているなど…!!」

「…」

「それに…蠍火、瑠璃星。お前達の方はどうなっている!」

「すまない。昨日は乗馬のレッスン、今日はフェンシングとピアノのレッスンで忙しかったのだ」

「俺だって一応、ヘアメイクの仕事あるんですけどねえ」

優雅に紅茶を飲む蠍火と、ははっと笑う瑠璃星。

…いつもこいつも…

夜陰は頭痛を感じながらも、ふと、思い出す。

——ここ最近のアラタの行動と、突然のユヅキの『有給休暇』だ。

「……待てよ、……まさかあいつら……何かしらの情報を持っているんじゃないのか……？」

アラタに関しては、今まで「カブトを捕まえるのは駄目だ！」と騒がしかったのに……今はむしろ、ZECTの動きを静観しているように思えるほど大人しい。

一方でユヅキも、このタイミングで有給など……ZECTに知られてはならない物を、隠しているからではないのか。

……アラタはカブトの味方、ユヅキは現在のZECTに不満を持っている……

手を組んだとしてもおかしくない。夜陰は、そう判断していた。

「……だとすれば、納得がいく」

「……どういうことだ？」

「鑑アラタ……並びに甲ユヅキが、カブトに内通している可能性が高い。……どちらの、とははっきりと言えないが……とにかく、2人の自宅周辺を徹底的に見張れ！」

瑠璃星の問いに答えながら、夜陰はゼクトルーパー達に命令を出す。ゼクトルーパー達も、ピタリと息のあった動きで敬礼。

そのまま、アラタ・ユヅキの自宅へと向かっていった。

……勿論何名かは、高鳥町・立川町のパトロールに残されたままであったが……

しかし……

その一方で三岸は、研究員達にある物を作らせていた。

… 人一人分は余裕で入るぐらいの、大型装置…

設計図どおりに作られるそれを見て、三岸は口元に笑みを見せている。

「この調子だと…… 明日・明後日には完成しそつだな。 …… フッフ」

「三岸さん。報告します」

白衣を着けた研究員の一人が、やってくる。

三岸は几帳面な男で、【報告は絶対義務】という理念を持っている。故に、些細なことであつたとしても… 逐一報告するように徹底させてあるのだ。

勿論彼を信頼している夜陰も、それを厳守している。

「—— 状況は？」

「このままのペースで行けば、明日の夜か… 遅くても明後日ぐらいには。 …… あの、少し聞いても宜しいでしょうか」

「構わん、続けてくれ」

「では。 …… この装置は、一体… どのような装置なのですか？」

研究員の質問に、三岸はにやりと笑む。

… その表情は、まるで氷のように鋭く… 冷たい。

ぞくりという寒気を感じながらも、研究員は恐怖で足がすくみ、動くことも言葉を発することも出来なかった。

「… ツ」

「これは人類の希望。——この世界に住む人間のために、必要なもののだ」

「まさか、……クロックダウンシステム……？」

「あれは失敗作だ。カブト以外のゼクターも機能を停止してしまえば、意味がない……それよりももっと素晴らしいものだ」

三岸の言葉に、研究員は息を飲む。

……この研究員だけではない。

他の者達も、ゼクトルーパーも、右腕的存在な夜陰ですら。『三岸』という男は読めないのだ。

三岸は目の前の装置を眺めながら、……その笑みを更に深く顔に刻み付けていた。

（そう、そして【あの計画】は——カブトを使うことで初めて完成される）

（……クロックアップの世界に居続けた人間。その人間を供物とし……人類は新たな始まりを迎えるのだ！）

（  
）  
）  
）

次の日。

——朝から、緊迫した空気が続く部屋の中。

特にアラタは、家の周りをつろつくゼクトルーパー達に…困り果てていた。

「……おいおい、マジかよ…」

「鑑…何かミスしたでしょ」

「してませんよ。していませんって!？」

「疑わしいわね。…天道君は今まで上手く相手をかわしていたみたいだし、私もずっとここに居たんだから……あなたしか居ないんだけど」

窓からこつそりと様子を覗きこみながら、アラタとユヅキは話す。  
だが…

そんな無駄な話し合いも、天道総司の料理の前では無意味に終わる。

「おばあちゃんは言っていた。食事の時間には天使が降りてくる、  
そういう神聖な時間だ」

「……つまり、“メシ時は黙って食え”ってことな」

「天使が降りる云々はともかく、冷めないうちに食べましょうか」

三日も付き合わされれば自然と扱いが分かってきたのか、食事の時間は突っ込みを諦めるアラタ。

天道語録も軽く流し、出されたご飯は素直に食べるユヅキ。

…そして彼らは、静かに朝食（手作りの食パンで作ったフレンチトースト、野菜サラダ、自家製オレンジジュース）を食べるのであった。

「……とりあえず、誰がヘマしたかはさておき…俺もユヅキさんも疑われているってことだよな」

食事を終えたアラタが、そう話す。

そのことについては、天道総司も考えていた…

原因が誰であるかを突き止めるよりも、『ZECT側がアラタとユヅキの不審な動きに気付いた』と考えた方がまだいい。

しかし、この状況では身動きが取れない。

アラタはZECTに行かなければ更に怪しまれるだろうが、行けば行っただで…捕まって拷問ということもありえる。

「そうね…でも、あんなに囲まれていたら、天道君だって外に出られないじゃない」

「あ、確かに」

「ならば、方法は一つだな」

天を指し示すポーズをしながら、語る天道総司。

…それを見ていたアラタは、嫌な予感しかなかった…

『——キュイイーン！』

アラタの家から1km離れた場所から、カブトゼクターが飛び回っている。

その情報を受けたアラタ家周辺のゼクトルーパー達は、一斉に現場に向かう…

その隙に天道総司はアラタの家から抜け出し、天堂ソウジ搜索を始めた。

「…やっぱり」

予想通りの解決法に、アラタは頭を抱えていた。

…っていうか、なんであんなものに引つ掛かるんだ…？

…あいつの言う通り、“この世界”って頭弱いのが多いのか…？俺含め

自分で思っていて悲しくなるようなことを心の中で言いながらも、アラタは今日こそ目的の人物が見つかって欲しいと祈っていた。

その頃、【蓮華】では。

「……ユリくん、味はこれでいいか？」

「…はい、オツケーです！むしろ、私のより断然美味しいぐらいです！！」

天堂ソウジが、厨房でユリの手伝いをしていた。

三日ほど前から視力が少しずつ回復し、未だにおぼろげであったが…それでもある程度は見えてきている。

流石に、人の顔を判別することは難しかったが。

…それに元々彼は適応力が高い、慣れさえすれば…多少目にハンデを背負っていても、味付けや皿洗いなどの簡単な手伝いはできる。

むしろ今さっきまで、普通に大根の桂剥きをしていた天堂ソウジ。

本当は見えているんじゃないか、というぐらいの手作業に…ユリは正直、脱帽していた。

「天堂さんって、凄いですね…」

「おぼろげだが…まあ、ある程度見えているからな。それに、料理はいつもしていたから…長年の感覚で分かる」

「それでも、うちの味をすぐに覚えて…しかも、私よりも美味しく作れるって…天堂さんって本当は何処かの有名な料理人<sup>シェフ</sup>では？」

「いや、料理は…手伝いというか、趣味だな」

そんな事を言いながらも、大根の煮物の味付けに使う出汁を確かめる天堂ソウジ。

…もう少し、醤油を入れたほうがいいか…

…今日の気温だと、大匙2杯といったところか…

そうしていると、ガラスと店のドアを開ける客が現れた。

「いらつしゃいませ！」

「いらつしゃい」

「あれ？ユリちゃん、その人…バイト??」

声からして、若い男だ。

ユリは男と親しそうに話す、…どうやら常連であることは確かなようだ。

「あ、はい。一時的にうちで預かっているんですけど…実はこの人、あまり目が見えていないんですよ」

「……これでも、順調に回復しているほうだけだね」

「へえ…そいつはお気の毒になあ」

…そう言つて、テーブル席に座つたのは…

——天堂ソウジを今の状態にした張本人、瑠璃星ダイスケだった。

~~~~~

「——おゝつ、美味そうだねえ！」

目の前に出された、本日のオススメメニュー…“大根の煮物”を見る瑠璃星。

それは箸で軽く抑えただけで、すつと簡単に切る事ができた。

出汁がよく染み込み、だが形が崩れることなく綺麗なそれを一口…

…すると、大根独特の瑞々しさと出汁の旨味が合わさつて、絶妙な味わいを醸し出していた。

「こいつは…美味しいな。…でも、ユリちゃんの味とは違う…」

「今日は俺が作ったんだ。口に合えば、いいのだが」

「いやいや、ユリちゃんのも美味しいけど…あんたのもかなりイケるよ。何かしてたのか？」

「おでん屋……ぐらいしか、したことがないな」

天堂ソウジの言葉に、驚く瑠璃星……
それはそうだ。

確かにイメージとしてはおでん屋の屋台の親父が似合いそうだが、
……腕前は一介のおでん屋にしておくには勿体無いほど。
ユリは苦笑しながら、天堂に言う。

「本当に、おでん屋さんとは思えないですよ。天堂さんは」

「はは。まあ、ここ何年かは満足にできていないがな」

「——？」

ユリから聞いた名字に、瑠璃星は反応する。

……待てよ、この男、どこかで……

自分の中に渦巻く疑問を解消したい。そう思った瑠璃星は、天堂ソウジに訊ねていた。

「……あんた、目が見えないって言っていたよな？ どうして……そうなの？」

「うう……ん。恥ずかしくて、人に言えた話ではないんだが」

「天堂さんは、数日前に川岸に流れ着いていた所を……私が助けたんです。その時から、川に落ちたショックなのは知らないけど……目が見えないみたいです」

天堂ソウジは本当に言いたくないのか黙っていたかったようだが、
ユリがすんなりと喋ってしまう。

……それを聞いた瑠璃星は、確信していた。

——コイツが、カブトだ——

彼はズボンのポケットに入れたあつた携帯を取り出し、隠れてメー
ルを打っていた。

「ユリくん…あまりそう言うことは、言わないでくれ」

「あ、ごめんなさい。天堂さん」

「…。…。お二人共、すっかり仲が良いねえ。もしかして、デキて
たりする？」

「……。？」

「そ、そんな事はないですよ。会ってそんなに、日も経ってないの
に」

瑠璃星の言葉に、小首を傾げる天堂ソウジ。

しかしユリのほうはすっかり動揺しており、瑠璃星は意地の悪い悪
戯っ子のような笑みを見せながら…

ユリに、言い放っていた。

「ところでユリちゃん、知ってる？」

「？どうしたんですか、瑠璃星さん」

「——その男、…ユリちゃんに大きな嘘をついているんだよねえ」

その時だった。

店に押し入るようにして、武装したゼクトルーパー達がやって来た
のは。

それを見た客は一斉に店の奥に避難…

ユリも天堂ソウジの後ろに隠れたが、瑠璃星は笑みをそのままに…
…ユリに告げる。

「本当に知らないんだなあ…ユリちゃん」

「な、何が…？」

「……その男は、この世界を揺るがす極悪人…仮面ライダーカブトだ」

「ッ!？」

後から店に入ってきた夜陰の口から出た言葉…

その言葉にユリは肩を弾ませながら、自分の前の男を見る。

「…天堂さんが、カブト…!？——嘘です、だって、…」

ユリは思い出していた。

——右肩に受けた傷。アレはどう考えても、鋭い針のようなもので刺された傷…

——そして普通、川に落ちて立川町まで流れ着くような状況などあるものだろうか…

夜陰は動揺する彼女に追い討ちをかけるように、言い放つ。

「この男は嘘をついていた。…善良な市民を誑かし、身を隠そうとしていた」

「違う！俺は嘘をついたことは一度もない、……出鱈目ばかりを並べているのはお前達のほうだ」

「違うないな。なら、どうしてカブトであることを黙っていた？…カブトであることを知られば、都合が悪いからだろう!」

「——ッ、」

その言葉に、天堂ソウジは言葉を詰まらせた。

——『聞かれていないから』という答えを言うことはできた。

だがそれは単なる言い訳であって、…自分がカブトであることを明かすタイミングはいつでもあった筈…

言い返せなかった彼に、ユリは「嘘」と呟きながら後退する。

客の何人かも、天堂ソウジがカブトであると知った瞬間から……ゼクトルーパー達が押し入った時よりも、動揺し、畏怖していた。

「…そんつ、……な。…嘘…」

「ユリく…」

「——来ないでッ!？」

恐怖に震える、ユリの叫び。

…無理もない。天堂ソウジは、そう悟っていた。

“クロックアップの世界に潜むカブト”は、ワームよりも驚異……何故なら人は目の前に見えているものよりも、見えないものに恐怖するからだ。

例えそれが、人知れず孤独と戦う一人の仮面ライダーだとしても。

「…すまない」

ただそれだけ言うと、天堂ソウジはカウンターから出る。

そして…

彼は両手を広げながら、夜陰らZECTに投降した。

「……目的は俺なんだろう。連れて行け」

「嫌に素直だな。またクロックアップの世界に逃げるかと……ああ、ゼクターは壊されたのか。…それにしても、弟切ソウと同じ顔とは思わなかった」

「あんたも相当嫌われてるなあ、…話した感じだと、普通にいい人

っぱかったんだけど」

「無理もないさ。——いいから早く連れて行け、これ以上ここに留まって何の意味がある」

そう告げる天堂ソウジの顔は、…少し寂しさを帯びていた。

それを見たユリは、心臓がズキ…と痛むのを感じる。

しかし夜陰は拳を握り締め、目の前の男の鳩尾に重い一撃を与えていた。

「…それもそうだ……なっ！」

「ぐっ…！」

「あ…」

『やめて』

そう言おうとしたユリであったが、…声に出すことが出来ない。

気絶した天堂ソウジはゼクトルーパーが二名がかりで運び、夜陰と瑠璃星は彼らの後を追うように店内から去っていった。

…嵐が過ぎ去り…

ユリはペタン、と力なく座り込んでしまう。

周囲に居た人間達は『カブトに騙されていた』『可哀相に』と彼女を同情していた…

しかし。

彼女がショックを受けたのは、自分自身に対してだ。

(…私、…何を言ったの)

自分でも分からなかった。

咄嗟に出た言葉、…あれが胸につつかえて…

今更ながらに、後悔が押し寄せていた。

『来ないで』

それがどんなに残酷な一言だったか。

そんな残酷なことを言ったのに、これ以上迷惑を掛けまいと彼は自分から捕まりにいった。

——その事実、ユリを激しく絶望させていた。

高鳥町。

天道総司は、突然いたる所に居たゼクトルーパー達が退避したことに違和感を覚えていた。

まさか……

そう思っていると、息を切らせながら走っていくマユの姿が見えた。天道総司は「おい」と、彼女に声をかける。

「——マユ、だったか。一体どうした」

「天道さん！……お兄ちゃんが、」

「兄？……天堂ソウジがどうした」

天道総司の問いに、マユは涙を浮かべる。

それだけで、彼は彼女の言いたいことを悟っていた。

……そしてマユは、震えるような声で……天道総司に、告げた。

「さっき、テレビのニュースで……速報が入って、」

「—— Z E C Tの人達が、お兄ちゃんを……カブトを捕まえた
って」

〃
〃
〃

天道総司は、マユと共に【蓮華】に来ていた。
勿論、あんな騒ぎの後だ…客は全員帰っている。

だが、店主のユリ以外に若い男女の影。
どうやらカブトを捕獲した後は、見張る必要がないと判断されたよ
うだ…
アラタとユヅキも、2人と合流する。

「…天道！それに、マユちゃん」
「お前達も来ていたのか。……その女は」
「高宮ユリさん、…この店の店主で、天堂ソウジを保護していたみ
たいけど……」
「——お兄ちゃんを？」

マユの言葉に、ユヅキはピクリと反応する。

そして、目の前の少女を見て…

彼女の漂わせる雰囲気、天堂ソウジを思い出していた。

「…あなたが、あの人の妹…マユさん」

「知っているんですか？」

「貴女のこと、聞いていたから…。彼、保護した次の日に家に帰ろうとしていたけど…。目が見えない内は危ないから、視力が回復するまではって…私が引き止めて…。」

「それで、…相手がカブトだと知って引き渡したのか？」

アラタの言葉に、ユリは一切否定できなかった。

引き渡したというよりは、天堂ソウジが自分からZECTに捕まりにいったのだが…

それでも彼女は、結果的に『自分が彼を売った』と思っていた。

その一方で、天道総司は暫く黙っていた後…突然アラタに言う。

「“この世界”の加賀美。…行くぞ」

「行くつて、もしかして…ZECTに？」

「そこ以外にマユの兄はいない」

「お兄ちゃんを…助けに行くんですか？」

「……お前のおばあちゃんのおでん。あれは、あの三つの具でなければ成り立たない…素晴らしい味だった」

何故おでん、とアラタは首を傾げる。

だが、【天堂屋】のおでんの意味を知るマユは…驚いて、天道総司を見ていた。

「あのおでんは、一つでも欠けたら意味がなくなる。…俺が“この世界”で初めて食べ、感動したおでんの味を壊すわけには行かない」
「——ああ、そういうことか。……マユちゃん、君のお兄さんは必ず連れて帰ってくるから」

天道総司と、アラタがZECTに向けて走り出す。
そんな彼らの背を、ユヅキとマユ、そしてユリは見送っていた…

六速目（後書き）

おのれ…おのれドレイクウウウウ↑

あれーなんで本当に瑠璃星こんな人になったんだろう…
ちよつと設定考え直したい。

そついえば今日はバレンタインですね。

…ふふふ世の中は甘つたるいリア充が支配する地だというのに、何だソウジさんの不幸ぶりは。
不幸というか、もう、悪運というか。

次回は次回で重いしな！
多分五速目が軽く感じられるぐらいには。

この人本当に幸せになれるのかそもそも不安すぎる。
ディケブラだって…なあ…
予定ではフィリップに直させる予定だったのに、続編で突発的にシスが直しちまって…

今、東方ヴォーカルの「ヒヤツカ」聞いてます。
妖々夢の、特にゆゆ様関係は切ない曲が多くて、……なんかもう合せて聞くとソウジさんあああああ↑
オススメは、八速目辺りで「ヒヤツカ」か「蒼空に舞え、黒染の桜」

を聞きながら見ることですかね。

本当に、大根探だけの話が何でこんな事に？（本末転倒）

七速目

その日。

——渋谷に巨大な隕石が、振ってきた。

隕石の衝突により、渋谷は壊滅状態…

建物は崩れ、地面は隕石の影響で大きく抉れ、場所によっては火事になっている場所もあった。

高いビルがただの瓦礫となり、信号は壊れ赤青黄赤黄赤青とリズムを乱した状態で小さく点灯している。

そして…

一つの家族もまた、この事件に巻き込まれていた。

突然爆発に近い音が響いたかと思えば、自分の周囲すべてが一瞬で崩れ去った。

ビルも。

車も。

信号も。

すべてが跡形もなく破壊され、ガラスの破片が太陽の光を浴びて反射し、そこだけがキラキラと輝いていた。

そして、少年の目の前には…

ビルの下敷きになり、力なく腕を垂らしている父親の姿と…

電光掲示板の液晶画面の破片の一部が突き刺さり、血を流している母親の姿があった。

「とう、さん」

少年は、先程まで動いていた父親の手に触れる。

だが…

それは既に冷たく、脈もなく、当然ではあるが硬直したまま動かない。

次に、少年は母親に近寄る。

突然の出来事に全身の力が抜け、上手く立てずにいるのか…地面に這った状態で、足を引き摺りながら移動していた。

「かあ…さん」

少年はやつとの思いで、母親に近寄る。

だが…

その体の中にある血はすべて流れ出ており、肌の色は蒼白としていた。

そして、彼の手にピチャリと何か生暖かいものが触れた。

……それは、母親の血だった。

この瞬間、彼は実感した。

——自分の周りに起こった、惨劇を。

——そして…両親の死を。

「う…うわあああッ!？」

くくく

ZECTの最下層にあるその場所は、例えるなら監獄だった。

夜陰の命令により…それは体全体を拘束され、自由を奪われ、まるで人の目に触れてはいけないものであるかのような鉄仮面をつけられていた。

その部屋の廊下を歩く、三岸。

そして部屋の前で止まると…中の存在に、声をかけていた。

「——手荒な真似をして申し訳ない。…私のことは、知っているだろうか？」

『…』

「おっと失礼、確か一時的に視力を失っているんだっただか」

『いや、…問題ない。ここに連れてこられた時から、人の顔が判別できるぐらいには回復している』

「ほっ」

『…三岸…マサト、だな？』

自分の名を当てられ、三岸は拍手する。

称賛しているのだろうが、…顔の胡散臭さが相まって喜べない。

「驚いたな。あれだけ長い時を過ごしながら、私の事を覚えていてくれたとは」

『…人の名前はすぐに覚える、…おばあちゃんの言葉の意味を考えるよりは…難しくない』

「私は興味のないことにはサッパリだね。…まさか君が、かつてZECTに所属していたとは知らなかったよ」

そう言う三岸であったが、…その顔は念願の玩具を手に入れた子供のような顔…

拘束された男…天堂ソウジは、声色一つ変えずに告げた。

『…人類の驚異であるカブトを捕まえられて満足か？』

「人類の驚異、か。——生憎と私は、君をこの世界に住む人間達の進化のための…功労者となる人物だと思っているのだが」

『……何？』

「しかし、本当に驚いた。調べれば調べるほど、興味が湧いてくる……なあカブト、いや、——日下部ソウジ」

告げられた苗字に、天堂ソウジが反応する。

…確かに、それは彼の旧姓だ。

三岸は相手の反応を知ってか知らずか、話を続ける。

「私も独自にカブトの正体について捜していた。……そして、ある結論に至った」

「……」

「カブトがZECTに所属していた人間か」、「弟切ソウの消去したデータファイルにヒントがあるのでは」というものではなく……

……「そもそもカブトを作ったのは誰か」

「……カブトを作った……？」

「カブトゼクター、並びにそれを行使するライダーベルトは日下部夫妻が作り上げていた。そして、……2人には子供がいた。それが君だ」

それだけ言うと、三岸は看守らしき男と暫く話をする……

看守は三岸の申し出に非難の声を上げたが、暫くすると、カツカツと足音が遠ざかる音が聞こえてきた。

そして、ガチャリと重い扉が開けられる……

部屋の中に入ってきた三岸は、天堂ソウジの拘束を解きながら告げた。

「……不思議だったよ。どうして設計図はあつて、実物はなかったのか。……あの災害を運よく生き残った子供が持っていたなど、普通は誰も思わない」

「——俺が両親から受け取ったのは、ベルトだけだった。……ゼ

クターの存在も知らなかったし、そもそも貰ったベルトの意味も分からなかった」

「……見え透いた嘘を。ならば何故、カブトであることを隠していた。日下部の生き残りだと知られると不都合があったからだろう」

「それは、ZECTで開発されたベルトに近い形状のものが一般隊員の手持ちにあるとなったら、色々騒動になると思っただけだ。……それに両親がある時期から忙しいことは知っていたが、……それ以外は何も知らない」

そう告げる天堂ソウジの目を見る、三岸。

……どうやら嘘ではない。

……本当に、何も知らないようだ。

——それが三岸にとっては、大変滑稽に思っていた。

「……くくつ、そうか」

「それよりも……【この世界の人間の進化】とか言っていたな。……何をやる気なんだ、それに俺がどう関わる」

「そうだな……貴様だけには特別に教えてやろう。——【人類進化計画】を」

「……人類、進化計画……？」

「場所を移そう」

そう言つて、三岸はパチンと指を鳴らす。

……すると……

いつの間にか三人のゼクトルーパーが部屋に入り、取り囲む。相手を逃げられないようにする措置。

……そして三岸は、カッカツと歩き出す。

天堂ソウジはゼクトルーパー兵の隙を覗うが、なかなか隙を見せそうにもない。

仕方なく、ここは三岸の案内に従っていた。

監獄から少し上の階層に上がる三岸ら。

そして、連れて来られたのは…

人一人入れるぐらいの、まるで空港にある金属チェック機のような形の大型装置であつた。

何だこれは、と奇異な目でそれを見る天堂ソウジに、三岸は説明していた。

「君は思ったことがないかな？——どうして長時間のクロックアップは、禁じられているのかを」

「……使用者の肉体負担が強いから、じゃないのか」

「それもある。が、…そもそもタキオン粒子は人間が易々と使える代物ではないのだよ。……“ゼクター”や“ベルト”を介さなければ、クロックアップすら不可能」

「…」

「しかし、何らかの原因でクロックアップシステムが暴走…クロックアップが止まらない事態が起これば、どうなると思う」

三岸のその問いかけは、まさに天堂ソウジの身に起こった事態だ。

——誰の目にも見えず、誰の声も聞こえない世界に閉じ込められる…

精神的高みにある者でなければ、その苦痛には、到底耐えられない。そもそもクロックアップ自体が、人の身で扱えないもの。肉体的限界が、先に来るであろう。

「多くの者はクロックアップに耐え切れず、死ぬだろう。……だが、君は現に生きている」

「……」

「クロックアップをずっと行って平気なのは、ワームだけだ。しかし君はワームではなく人間、…では何故その人間が耐えきれたのか？」

「…何が言いたい」

「それはゼクターとベルトがタキオン粒子を制御できず、人体に微量ではあったが流し込まれ…そのお陰で、クロックアップに対する抗体が付いていたからだ」

三岸は、装置の横に取り付けられたレバーを引く。

すると…

ゲート部分に位置する場所から、バチバチと青い閃光が奔^{はし}り出した。

「…これは！」

「一応完成はしたが、これはまだ第一段階と言ったところ。……完成品は、クロックダウンシステムのようにタワー型の電波発生装置となる予定だ」

「まさか、お前は…」

「そのまさかだ。——タキオン粒子を含んだ特殊な電波を世界中に発信し、人間をワームに…いや！ワーム以上の存在にさせる！！それが私の、【人類進化計画】なのだ！！」

それを聞いた瞬間、天堂ソウジは三岸に素早く足払いを掛ける。
だが…

三岸は伊達に長い間、ZECTに居たわけではない。
戦闘経験のある彼のローキックを食らっても、蚊に刺されたような

反応しかなかった。

「無駄な抵抗はよせ、カブト。……私はそもそも、ワームの生体に興味があつてね。彼らの力は素晴らしい」

「ッ！」

「ZECTとしてワームを倒し、調べる一方で私は……人間をより良いものに作りかえるべく、研究・試行を重ねていた。そして、君のお陰でそれが実現を迎えようとしているのだ！ マスクドライダーの基盤を作った日下部夫妻の子として、光栄だとは思わないかね？」

目に狂気を宿す三岸。

そんな彼に寒気を感じ、天堂ソウジは何とか声を絞り出す。

「——おばあちゃんは言っていたな、自分に溺れる者はいずれ闇に落ちると。……だがお前は……狂っている。後戻りができないほど歪に……！」

「人間達の進化への第一歩に、協力してもらおう……何しろ君は、人やワームを超越した【存在】に一番近い。私の仮説を確かなものにするのは、……君以外にいないのだよ」

「くっ！？」

バツと構えを取る天堂ソウジ。

……三岸の狂気に、防衛本能が働いたのだろう。

儚い抵抗だと思いつつも、三岸はゆっくりと構える……

武力で捻じ伏せ、屈服させる気だ。

「……抵抗するのは構わないが、痛い思いをするのは自分だけだぞ？」

「三岸……ッ！」

そして…

〃
〃
〃

【天堂屋】。

ここでは、自責に囚われ落ち込むユリを…マユが連れて来ていた。
ちなみにユヅキは、ゼクターとベルトを修理するために一旦アラタ
の家に戻っていった。
いつもは今の時間帯だとある程度の客は入っているのだが、今はが
らんと空いている。

「お帰り、マユ」

「ただいま。…おばあちゃん、お客さんは？」

「追い返したよ。テレビの情報に踊らされて、静かに食べる気配もなかったもんさ」

ユリは、高鳥町に来た時から…昔の事を思い出していた。

——母親とはぐれ、迷子になったあの時。

偶然出会った男の子が、慰め、一緒に探してくれた記憶を。彼女の顔を見たマユの祖母は、目を見開きながら訊ねている。

「おや、あんた…もしかして、…ユリって子かい？」

「知っているんですか…？」

「…知っているも何も、昔、店の前で大泣きしていたんじゃないか」

その言葉に、ユリは「そうだ」と呟く。

——そういえば、自分は…大根のいい匂いがする場所で、泣き喚いていた。

その時、店の中からあの男の子が出てきて…

『…君、大丈夫か？』

『ひつぐ…おかあさん………』

『…ちよつと待ってる。いいもの持ってくるから』

そう言つて店に戻った彼が持ってきたのは、クッキーの入った袋だった。

形も焼き加減も綺麗で、まるで宝石のように思ったものだ。

男の子はまるで太陽のような笑顔で、クッキーを頼張る自分に訊ねていた。

『…おいしいか？』

『うん、すごく…』

『そうか。よかった』

その時の彼の笑顔は、不安だった自分の心を…いつの間にか安心させていた。

「——そうだ、確かその後…『おいしい物を食べると、心が豊かになる。不安だったり、悲しかったりする気持ちも…すべて吹き飛ばしてくれるから』って」
「え？」

ユリの言葉に、マユは反応していた。
そして…

祖母はおでんの仕込みを続けながら、ユリに言った。

「それはあたしの言葉だよ。…美味しい飯は心を豊かにする、ってね」
「おばあさん、の…？」

「あんたは小さかったから、顔も覚えていないだろうけどね。——
あんたを助けたのは、うちの孫だよ」

「…天堂、さんが…！？」

それを聞いたユリは、酷くショックを受ける。

——そして皮肉にも、祖母から真実を告げられた瞬間…おぼろげだった少年の顔を、思い出していた。

更に少年の顔には、…天堂ソウジの面影があった。

「…そんな…私、…ッ！」
「ユリさん！？」

マユの制止を振り切り、ユリは走り出していった。

店の中には、静寂が戻り…
祖母は汁の味を確かめた後、マユに昔話をする。

「マユ。あんたによく言うだろう、『本当に美味しい料理は食べた者の人生まで変える』って」

「うん…でもそれが、どうしたの？」

「——あんたにはまだ、話してなかったね。昔のあの子を」

くくく

そもそもあの子は、20年前の“渋谷隕石”で…両親を失ってるんだ。

その日は丁度、あの子の誕生日だね。

父親は早いうちにあの子にプレゼントを渡して、その後でどこかの店でケーキを買おうとしていた。
ただ、それだけだったんだ。

ただ何気なく歩いていただけだったのに。

…一瞬で、すべてが壊された。

人も街も何もかもね。

あの災害で生き残った人間はごく僅かで、ソウジはその一人だった。身寄りがあたしの所しかなくて、引き取って“天堂”の子として育てることにしたのさ。

しかし、両親を失ったショックが相当大きかったのか…

押入れに閉じこもって、生前両親が誕生日プレゼントにと渡していたベルトみたいな物を抱きしめながら、毎日泣いていたもんさ。

しかも何を出しても口にしようとはしない。

たまに私の娘…マユの母親が「外に出て遊ばないか」と提案したりもしたけど、あの子は一步も出ようとはしなかった。

「…お母さん」

「サトミ。…またなのかい」

「はい。——前はあんなに穏やかで、姉さん達が仕事でも文句一つ言わないで…家事を進んでやるような優しい子だったのに」

あの子は親からもサトミからも、そして周りの大人達からも『聞き分けのいい子』として育ってきた。

我が儘も言わず、仕事が忙しい親の代わりに家の仕事をする、いい子供だったってね。

…だけど、本当のあの子は…ただ痩せ我慢していただけなんだ。本当は普通の子のように、我が儘も言いたいし…遊びたい時だってあった。

それでも両親に迷惑をかけないようにと、自分を抑えてきていたのさ。

マユミもマユミの父親も、よくこう漏らしていたもんだよ。

『本当に聞き分けのいい子で、いつも一緒にいられないのに…泣き言一つ言わないで、待っていてくれる』

『だけどそれだけに、本当に自分がどうしたいか…自分の意思を抑えているようにも見えて、不安な部分もある』

…親だからこそ、分かるんだろうね。
ソウジ自身の、無理をさ。

だけど、その負担が今になって返って来たんだろう…

心に大きな傷を抱え、生きる希望も意味も無くし、無意識の内に両親の後を追おうとしているように見えたんだ。

マユミの忘れ形見であるあの子を救うにはどうしたらいいのか。

…サトミはいつも、そう言っていたねえ。

そんなある日だった。

珍しくあの子が、押入れから顔を出してきたんだ。

…食事も口クに取らないから、痩せ細っていたが…

あの子は、おでんを作っていたあたしとサトミのところにやって来て……こう言ってきた。

「…おばあちゃん、叔母さん、——何か、手伝うよ」

口だけ笑ったような顔でね。無理しているのは見え見えだった。

…あの子も、心のどこかでは分かっていたんだろうさ。

『このままではいけない』と。

だが、何をしたいのか分からない…何を目的に生きればいいか分からない。

自分を保つために、両親がいた頃のように、迷惑をかけることのない『いい子』を演じようとしていたんだよ。

——勿論あたしは、断ったけどね。

「……今のあんたがすることは何も無いよ」

「……でも、」

「栄養を摂って、体力をつける。それが今、あんたに一番必要なことだよ……あたしらの手伝いじゃない」

「……ごめん、なさい」

それだけ言うと、あの子は俯きがちに出て行つてね。

「言い過ぎじゃないのか」ってサトミは言っていたが、…必要以上に甘やかすことこそ…あの子を駄目にする。

…悲しみを完全に乗り越えるには、自分自身で悩んで、考えることが大事なんだ。

しかし今のあの子では、きっかけが無ければ気付くことは一生できない。

そう思ったあたしは、考えたんだよ。どうすれば、“きっかけ”が作れるか……

その日もあの子はまったく手をつけなかった。

サトミもどうしたら良いのか、悩んでいたよ…

——付け合わせで置いていた大根卸しだけは、綺麗に食べていたんだ。

「これは…」

「どうしたの、お母さん」

「見なよ、これ」

「これって…大根卸しを入れてた、小鉢…？」

マユも知っているとおり、ソウジは大根が好きでね。

卸してあったから、食べやすかったこともあったんだろう…
それを見た時から、「これしかない」と思ったねえ。

その次の日。

この日も朝早くから、顔を出してきた。

丁度、【それ】も出来上がっていたことから…あたしは器に入れて、
渡したんだ。

「丁度いい時に来たね。食べな」

「…おでん…？」

器に入れたのは、大根とがんもどきと卵。

……そう、この店のおでんさ。

渡された当初、ソウジは戸惑っていた。

だけど、見ただけであたしの考えていたことを、あの子は理解してくれたよ。

「……これ、」

「そうだよ。あんたの好きな大根と、あんたの母親の好きだった卵。
そして父親が好きだったのは……がんもどき」

「…母さん、父さん…」

マユは知らないだろうけど、昔の【天堂屋】は…今ある3つ以外にも具を扱っていたんだよ。

おでんってのは、種の種類が豊富さが自慢だからねえ。

…だけど、マユミ達一家は具の好みが綺麗に三つに分かれていてね。

——そして、【家族がいつも一緒にいる】という意味を込めて…三つの具を使ったおでんを作ったんだ。

「ッ！……ごめんなさい、…ごめんなさいっ……！！」

“例え魂だけになつたとしても、ずっと家族は傍にいる”

それがやっと、分かったんだろう。

……今まで溜まっていたもの全部出すように、激しく泣き叫んでいたよ。

「おば、あちゃ…ッ、……うああああっ……」

「……いいから、熱いうちに食べな。料理ってのは、出てきた瞬間が一番美味しいんだ」

「ひぐっ、…うええっ…」

それに気付いてからは、あの子は少しずつ料理に口をつけるようになって…元気になっていった。

そして、心配させないために『いい子』を演じるんじゃなく…

“自分のやりたいこと”の一つとして、店の手伝いを始めたんだ。

たまに昔の記憶を思い出すこともあったが、それでもあの子は乗り越えていった。

目の前で家族を失った、大きな傷を。

その数年後に、本当の家族のように扱ってくれたマユの両親を失っ

ても、それでもあの子は、悲しみを乗り越えて強くなった。

…だから、今のソウジがあるんだよ。

〃
〃
〃

「今もその意味は変わっちゃいない。……あたしの好きながんもどきと、マユの好きな卵、そしてソウジの好きな大根。…家族の証としてね」

初めて兄の過去を、そして今のおでんが作られた経緯を知ったマユは…

ぐつぐつと煮込まれた鍋を見ながら、訊ねていた。

「お兄ちゃん、きっと戻ってくるよね」

「ああそうさ。例え姿が見えなくても、それでもずっと一緒に居たんだ。——ここに帰ってこない筈がないさ」

「……うん」

——今はまだ、胸に不安が残っていたが…

マユはこれまで通り、兄の帰りを信じて待つことにしていた。

そういえば、

…マユはふと、兄の言葉を思い出していた。

『マユ、お前はまた戻る…』

…戻る、とはどういう意味なのだろうか。

人間として生きる、という意味であるのは確かであったが…

——マユはどうしても、それ以外にも何かあるのでは…と気になっていた。

七速目（後書き）

天道とアラタは次回出番があります

なんていうか、

……自分はどうして後ろ向きな事しか考えないんだろう！

次回も次回で危ないですがね。

その際、PCなりi - podなりで東方ヴォーカルの「ヒヤツカ」か「蒼空に舞え、黒染の桜」を聞いていただければ……とか言ってみる。

別にそっちじゃなくても、桜関係の歌って悲しい歌が多いので……

そうですね。

シンジの中の人PVで出た「桜雨」とか↑

最後辺りのセリフって若干うる覚え。

……うーん、調べるには勇気がいる。

そもそもキャラ崩壊が物凄いものばかり書いてますから、ねえww

よし、ティッシュの準備だ！↑

八速目

ZECTに正面切って向かっていく、天道総司とアラタ。

警備をしていたゼクトルーパー、並びにブライトルーパーが慌てて銃を構える…

しかし2人はゼクターを手に取り、走りながら変身を行った。

「変身！」

『Henshin』

銃弾が当たるが、そもそもマスクドフォームに威嚇程度のものなど効果はない。

カブト・マスクドフォームはそのまま、カブトクナイガン・ガンモードでゼクトルーパーを攻撃…

ガタック・マスクドフォームもまた、両肩にあるガタックバルカンでブライトルーパー達を蹴散らして行く。

本来なら侵入するなりして安全に行きたかったのだが、天堂ソウジの身柄も危ない事もある上に、ZECT隊員であるがカブトを支持するアラタがすんなり中に入れるはずもない。

そう思い、“強行突破”に出たのだ。

——それに、うまく隠れたとしても、結局戦うことに変わりはない

い。

「…そういえば、お前はここの隊員じゃなかったのか？」

「今更かよっ！？……どうせ組織にとつては俺の方が裏切り者だし、俺は自分が『するべき事』を考えて…今戦っている！」

「フツ、やはり加賀美はどこまで行っても加賀美か」

「……“お前の世界”の俺に、同情すら感じるよ」

頭を抱えつつも、ガタツク・マスクドフォームは入口を守っていたゼクトルーパーを派手に吹き飛ばす。

だが、尚も抵抗しようとゼクトルーパー・ブライトルーパーが襲い掛かる…

しかしカブト・マスクドフォームとガタツク・マスクドフォームは、同時に二段変身スイッチを操作。

……キャストオフを行っていた。

「——キャストオフ！」

『Cast Off : Change Beetle』

『Cast Off : Change Stag Beetle』

周囲にゼクトルーパー達。

その中心部に、マスクドライダー。

このような状況下でキャストオフをすれば、どうなるか。

…それは、キャストオフによって飛散したアーマーが周囲に飛び散り…取り囲んでいたゼクトルーパー達を、一斉に弾き飛ばす光景だった。

「……ぐああああっ！？」「」

「…行くぞ、“この世界”の加賀美」

「ああ！」

『R i d e r S h o o t i n g』

次の瞬間、建物の上から何者かが狙撃して来た。

タキオン粒子を使った、光弾…

辛うじて二人共回避するが、それを見たカブトは上を見る。

「この攻撃…ドレイクか！」

「ドレイク…って、最近作られたあのライダーシステムか！？」

「……ご名答」

建物の上に居たドレイクは、ひらりと飛び降りる。

…更に、Z E C Tの正面入口からはサソードも登場…

2人のライダーの登場に、カブトはカブトクナイガン・クナイモ―ドを構えながら言い放つ。

「――邪魔をするな」

「って言われても、金がらみの契約だからねえ。…運がなかったと思つて、諦めなよ」

「国賊カブト…奴の罪は重い。その裁きの邪魔をするのならば、無関係のカブトでも容赦はしないぞ」

「いいだろう。だが、……俺に勝てると思うな」

「俺もやるぞ。……お前は2人に勝てる自信があるだろうけど、まだ中にもいることを考えると…ある程度の体力は残しておきたいだろ」

カブト・ドレイク・サソードの三つ巴に、ガタツクも割って入る。これで、2VS2…
カブトはドレイクと、ガタツクはサソードと向き合い、武器を構えた。

「おばあちゃんは言っていた。……金は時として人を狂わす、生きる以上の金を求める者は…いずれ溺れる」

「やれやれ。——面倒臭い奴」

「行くぞ！」

「フツ…面白い。蠍火家18代目当主である私の力を、見せてやろう」

~~~~~

ZECTに派手に侵入してきた、二人のマスクライダー。

彼らの存在は、夜陰も知っていた…

とりあえずドレイクとサソードで時間を稼ぎ、その間に三岸に報告し、指示を仰ぐ。

そう思い、彼は三岸を探していた。

しかしいつもいる部屋にはおらず、夜陰は足踏みをしながら考える。

「…一体、どこに…？」

——そういえば。

最近、あの人は地下の研究室で何かを作っていると聞いた。  
もしかして、地下にいるのか？

あそこにはカブトを閉じ込めた監獄もある、間違いはないだろう。  
そう思った夜陰は、地下に向かっていった…

その頃。

三岸は“それ”の誕生に、目を輝かせていた。

…猛々しいほど大きな一本角。

力強さも感じさせながら、だが、どこかこれまで見たワームより美しい造形。

そして“それ”は、まるで大地を揺るがすような雄叫びを上げていた。

『——オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！』

——素晴らしい。

——これが、【人類進化計画】の第一歩…

三岸は目の前の存在に感動し、そして、両手を広げて喜んでいた。

「…ふはは…ようやく、ようやく完成したッ！——後は、大型の装置を作り上げ…電波を流す。そうすればこの世界にいる全ての人間は！人とワームを超えた存在へと進化するッ！！」

…その瞬間、その部屋の扉が開く。  
扉の奥から顔を見せたのは、……夜陰シュン…  
彼は三岸の計画を知り、そして目の前の“それ”を見て…呆然としていた。

「……三岸、さん…？一体どういうことですか、——人をワーム以上の存在にするとはッ！？」

「そうか、君はまだ知らなかったな。【人類進化計画】を」

「…それに、そのワームは……。まさかつ！？」

「そうだ。この簡易装置では、システムを維持するためにも計画に必要な量のタキオン粒子を流せない。——そのための…カブトだ」

いや、と三岸は目の前の“それ”を見ながら言い放つ。

「今はもう、……ヘラクレスワームと名付けるべきだろうか？」

「そんな…それでは、あなたがカブトを欲していたのは…世界から脅威を取り除くためではなく、——実験台にするため…！？」

「そうだ。…しかし、実験台という言い方は良くない。そうだな、あえて言うのであれば、最初に生まれた進化人類…アダムなのだよ」

狂気の笑みを見せる、三岸。

…この男の計画の為に、今まで…！

ふつつつと込み上げる怒りを感じ、夜陰はザビーに変身しようとする。

すると…

『——アアアアアアアアアアッ！』

ヘラクレスワームが、頭の角から音波のような物を発信する。耳にはつきりと聞こえる不快音に、夜陰は耳を押さえた…だが。

次に見た光景は、彼の想像を遥かに超えていた。

「ギョルルル…」

「ギイイイツ…」

「『ギユリイイイツ！』『』『』」

「な、何だ、これは…！？」

恐らく、ZECTに忍び込んでいたであろうワームすべてが、その部屋にやって来る。

しかし、それだけではない…壁が壊されるような音がしたかと思うと、そこから更に別のワームがやって来る。

——サナギや成虫、様々な種が入り乱れているのを見ると…外に居たワームまで引き寄せたようだ。

それを見た三岸は、「素晴らしい」と叫ぶ。

「…テレパシーでこの世界にいるワーム全てと通じ合い、引き寄せたのか！これぞ、究極の存在たる証…！」

「全てのワーム、だと…！？」

確かに、やって来るワームの数は桁違い。

まるで世界の終焉…

夜陰はそう思っていた。だが、あることに気付いた。

呼ばれたワームは全て、ヘラクレスワームのところまで移動した後…  
その場で、制止していたのだ。

一体どういうことだ…

そう思ったのは三岸も同様で、ヘラクレスワームに叫ぶ。

「——何故だ、何故ワーム達は止まっている！……まさか、」  
『……オオオオオッ！』

その刹那、

……三岸の体を、ヘラクレスワームの右腕が貫いた。

三岸は目を見開き、そのまま絶命する…

それを見た夜陰は恐怖を覚え、その場から逃げ出した。

しかしその部屋の外には、まだワームが存在している上に…

覚醒したばかりで上手くテレパシーが伝わらないためか、ヘラクレスワームの完全な統制下に置かれていないワームは、夜陰に襲い掛かって来た。

「……ギヤアアッ！」「」  
「なっ……！？」

…ガチャン、

皿を洗っていたマユが、突然頭痛のような物を感じ…持っていた皿

を落とす。

しかし頭痛はすぐに治まり、慌てて皿を拾おうとした。  
だが…

どこか窓が開いていたのか、窓の中からマユの元に、ひらりと桜の  
花弁が舞うようにして飛んできていた。

「桜？……まだ、咲く時期じゃないのに」

マユは桜の花弁を、両手で掬うように受け止める。  
その瞬間、マユの頭の中に声が聞こえてくる。

『——お前は人として生きていけ、マユ』  
『その為なら俺は、…どんな手を使ってでも…守ってやるから』

流れ込んできたのは、兄の声。

マユは周囲を見るが、姿は何処にも見えない。

…クロックアップの世界にいるのなら当然だが、ゼクターは壊れ、  
現実時間に戻ってきているはずなのに…

祖母はというと、マユの異変を知っているにもかかわらず、——た  
だ黙っておでんの仕込みを続けていた。

くくく

カブトとドレイク、ガタツクとサソードの戦いは熾烈を極めていた。

ドレイクが得意の遠距離戦をすれば、カブトもクナイガンで対応し、サソードがサソードヤイバーによる華麗な剣技ならば、ガタツクはガタツクダブルカリバーを使った激しい剣技を披露。しかし、彼らの戦いは突然終止符を打たれる。

「『ギイイイイイツ！』」  
「何っ……」

「これは……ちよっ、」

「ワームだど！？」

「っていうか、——数多すぎだろおお！？」

大量のワームが、ZECTに押し寄せてきたのだ。

これだけの数、……もしかすれば“この世界”に潜んでいたワームというワーム全てかもしれない。

そう思いながらも、カブトはふと、疑問に思っていた。

——大量のワームを目の前にしても……自分の意思を保っているのだ。

(……?)

彼と彼の世界にいるガタツクには、“暴走スイッチ”という……ワームを本人の意思に関わらず、完全撃滅するための機能が備え付けられている。

しかし、それが発動しない……

——そもそも“この世界”は、天道総司のいる世界と似ているよう

でどこか違う。

時空間の異常か、“この世界”自体に暴走スイッチが存在しないからか。

とにかく何らかの事象により、カブトのシステムに仕込まれた暴走スイッチが発動することはなかったのだ。

それを知ってかしらずか——もしかしたら天の道を往く彼には分かっている可能性もあるが——、カブトはガタツクに言う。

「…丁度いい。この混乱に乗じて、中に入るぞ」

「あ、ああ…」

「時間がない。クロックアップで突入する」

「よしっ！クロックアップ！」

『Clock Up』

カブトとガタツクは、ほぼ同時にクロックアップを発動。

サソードとドレイクは「待て」と叫ぶが…

目の前に溢れ返るワームに邪魔され、クロックアップをする隙すら与えてくれなかった。

「うおっ！？」

「くっ、ワームごときがッ！」

追ってくる気配のない、サソードとドレイク。

律儀にワームでも倒しているのか？とガタツクは思っていたが…

カブトは別の視点から、物事を見ていた。

「——あのワーム、俺達の邪魔はせず…奴らの邪魔だけをした」  
「それって、…俺達を先に通してくれたってことか？一体どうして！」

「それは俺だつて知りたい。……だが、今考えることはワームの大量発生ではない…天堂ソウジのことだ！」

「…それもそうか！」

ある程度進むと、ゼクターが自動的にクロックオーバーする。

ZECTの内部にもワームは溢れていたが、カブトとガタツクを攻撃する気配はない。

そして…

「——！おい、あれ」

ガタツクが、何かを見つけた。

それは、随分ボロボロにされていたが…夜陰だ。  
怪我を負った夜陰に、ガタツクは駆け寄る。

「夜陰さん！一体何があつたんだ」

「…鑑、……三岸…奴は、とんでもない禁忌を…犯した……。人を、ワームに…いや…ワーム以上の存在にしようとするなど……！」

「——ワーム以上の…？」

その言葉に、カブトは「まさか」と思い…

夜陰をガタツクに任せ、先に進む。

一方でガタツクは、夜陰の言葉の意味を尋ねていた。

「人間をワーム以上の存在にする！？…どうということなんだ！」

「……奴はずっと、クロックアップの世界に居たカブトを狙っていただろう。…きっとそれは、自分の仮説を証明するために…必要だったんだ……」

「なん、だって…?」

「タキオン粒子を含んだ電波を人体に流すことで、ワーム以上の存在に変化させる。だが、…あの人は慎重な人だ…手始めにテスト用の簡易装置を作り……その人体実験には、ある程度…タキオン粒子を体を含んでいる人間が、必要だった」

以前ガタツク…アラタは、ユヅキから聞いていたことがあった。丁度その頃、天道総司は夕飯を作っていたため、聞きそびれていたが…

『…少なからず、人体にタキオン粒子が流れた可能性もある?』

『ええ。……タキオン粒子は、基本的に人が簡単に制御できないだけで、有害じゃない物質だから心配は要らないんだけど……』

『でも、ただのクロックアップの暴走でしょう?それが、どうしてそんな』

『前に話したでしょう?——クロックアップのミソであるタキオン粒子の動力回路がイカれていたって。……その動力回路から、漏れ出たのよ』

動力回路から流れ出たタキオン粒子は、微量ではあったが人体にも流し込まれ…

結果として、長時間のクロックアップにも耐えられる肉体変異を起こした。

だからこそ今の今まで弟切ソウの作り出したクロックダウンシステム以外で、クロックアップが止まらなかった。

クロックアップを続けた状態であるにもかかわらず、使用者が生

きていたのは……

——半分ワームに近い存在になっていったからだということ。

話を聞いた当初のガタツクでは、見当もつかなかった。

だが……三岸の計画を聞いた今、悟ってしまったのだ。

——手遅れだった、と。

「そんな……ッ、じゃあ………天堂さんは!？」

くくく

カブトはワームを掻き分け、ようやく……

ヘラクレスワームのいる場所に、辿り着いていた。

周囲に他のワームがいたが、——攻撃してくる様子はない。

「……お前は……」

『——会ったのは、これで……三度目になるな』

「……やはり、そうか」

ある程度暴走は収まったのか、ヘラクレスワームは流暢に話す。

……その声に、天道総司は聞き覚えがあった。

そして、彼もガタツク同様…手遅れだったと知ることになる。

「…天堂ソウジ」

『……生憎と、今は…人でもワームでもない。見た目はワームだが』

はは、と笑うヘラクレスワーム。

…どうやら、今の自分の状況をすんなりと受け入れたようだ。

いや、——むしろ受け入れなければ…やろうとしている事は、できない。

「このワームは、お前が呼び寄せたのか」

『ああ。…“この世界”のワームすべてに呼びかけ、ここに集めた。ZECT周辺にいるワームは全て、俺と意識が繋がっている』

「成程、……そして…サードとドレイクに関して攻撃を仕掛けたのは、俺と“この世界”の加賀美をここに呼ぶため」

『ああ。…ザビーに関しては、申し訳ないと思っている』

夜陰の件は、ヘラクレスワーム自身が力を制御できず、結果としてワーム達が襲い掛かってしまった。

それ以前にも、夜陰がワームを刺激した可能性があるかもしれないが…

やっと制御する頃には、ザビーは変身が解けるほど深い傷を負ってしまったのだ。

『——君は全て、分かっているだろう。俺が何を思っこうしたのか、そして、何をしようとしているのか』

「……当然だ。だが…」

『いいんだ。それに、俺はこんな姿になって諦めているんじゃない…むしろこの姿だからこそ、できることだ』

「妹のためか？」

カブトの問いに、ヘラクレスワームはただ、頷いた。

『ああ。——マユは、弟切が死んだ後も度々ワームに狙われていた。…マユ自身がワームであることが関係しているのかは、分からないが』

「お前の妹も、ワームなのか？…だから…俺は、ひよりと重ねて…」

『この場には、マユ以外の…全てのワームを集結させた。そして俺と意識を繋がっている状態である今、…俺を倒せば同時に繋がっているワーム達も全て倒される』

——やはり、自分を身代わりに世界を、いや、マユを救う気が—

それを知ったカブトは、ヘラクレスワームに問いかけた。  
…家族の事を。

しかしヘラクレスワームは、揺るぐことなく言い放つ。

「……残された家族はどうなる」

『俺達は例えどんな時でも、繋がっている。魂だけとなっても、傍にいます。…それを象徴するのが、うちのおでんだ』

「おばあちゃんが言っていた、絆とは決して断ち切るこのできない…深い繋がり。例え…」

『——例え離れていても、心と心が繋がっている』

「む、」

『…これでも君よりは10年長く生きているからね、総司君』

格言を先に言われ、カブトは少しだけ不機嫌になっていたが…

——この男は“この世界”の俺、それは当然のことと流していた。  
そして…

カブトは静かに、スイッチ・フルスロットルを押していた。

異世界の自分だと分かるからこそ、その意志は決して揺らぐことが  
ない…

そう悟った上での、行動だった。

『1』

「……そうか」

『2』

『手加減はするな。…一撃で倒せなければ、……意味がない』

『3』

「——分かっている。……ライダー…キック」

『R i d e r   K i c k』

そして、カブトの右足には波動化したタキオン粒子が流れ…  
鋭い回し蹴りを、ヘラクレスワームに浴びせていた。

〃  
〃  
〃

周囲に居たワームが、突然…一斉に爆散した。  
それも、寸分の狂いなく同時に。  
…どうなっているんだ？  
ガタツクがそう思っていると、本来ZECTにいるはずのない人間  
が…顔を見せた。

「――あんたは…」

カブトは、地に倒れ伏す天堂ソウジを見ていた。  
――だが、口からは血を流しており…  
来る前から相当三岸に痛めつけられたのか、服はボロボロだった。  
彼は天井を見上げながら話していた。

「……これでいい、…すまない」

「…俺は前に、言ったな。『それでお前は救われるのか』と」

「ああ、…言っていたな」

「――だが、結局俺はお前を助けることはできなかった…救う事  
は、できなかった」

天堂ソウジを見ながら、そう言うカブト。  
だが…

むしろ天堂ソウジは、笑っていた。

「…救われたさ」

「何…？」

「君はマユの為に、俺のために、戦ってくれた。…そして俺の、最初で最後の我が儘を聞いてくれた…充分すぎるくらいだ」

「……天堂ソウジ、」

「ただ、——君に重荷を背負わせたこと…すまな…く、………  
思…」

それだけ言うと、天堂ソウジはゆっくりと目を閉じていく。  
そして、

……静かにその息を、引き取っていた。

部屋の中に、変身を解いたアラタがやってくる。

そして、彼と一緒にやって来たのは

——高宮ユリだった。

「天道！……ッ」

「…天堂さん！」

「“この世界”の加賀美、…それにお前は…」

カブトが訊ねるが、その前にユリは天堂ソウジの元に駆け寄る。

そして、息をしていないことを知り…

彼女は激しく、泣いていた。

「——っ…！天堂、さん…」

「…」

「ごめん、なさい。……私…あなたに、酷いことをした。……あな

たが優しい人だって分かっていたのに、信じようとしなかった…！」

ユリは、泣きながら目の前の相手に謝罪する。

…しかし、彼から言葉が帰ってくることはないだろう…

その事実が一層ユリの胸を締め付け、そして、自分のしてしまった罪の大きさを改めて知る。

「——それに、…小さい時に…助けられたのに、…：…そんなことも…忘れていた！…私…ッ、あなたにまだ…あの時のお礼もしていない、のにい…っ…！」

彼女の涙が頬を伝い、そして…

涙は零れ落ち、天堂ソウジの顔の上に落ちた。  
すると…

『キユイイイン！』

スラスタースリットからタキオン粒子を放出し、飛来してくるもの。  
今ようやく、時空を超え…ハイパーゼクターがやってきた。

## 八速目（後書き）

ウワアアアアア（みんなのダディ風）

本当に鬱展開が大好きみたいです自分。  
でも大丈夫！

こんな時のための、ハイp（ry

ヘラクレスワームの設定としては、

- ・カブトムシの姿と特性を持つ。
- ・事実上時を止める「フリーズ」を使用可能
- ・タキオン粒子を人体に直接注がれ、人間からワーム（っていうかネイティブ的なもの？）に変化してしまった
- ・他のワームとテレパシーを行うことが可能で、“この世界”に潜んでいた全てのワームを呼び出し、天道カブトに自分もろとも全滅させようとしていた
- ・テレパシー能力を利用し、全ワームとの意識を統合・自身と繋げることにより、倒された瞬間他のワームも爆散させた

…ですかね？

三岸の目的は叶いはしましたが、それで簡単に制御できるような相手じゃないということです。

そもそも、フリーズ使える時点で…！

最初の頃は力に飲まれかけたようですが、精神力の高さで自分の力の暴走を抑え込み、天道と会う頃には完全に制御しています。

ただ、制御が利かなかった時に襲われた夜陰さんは、本当に不憫としか言いようがないですが…

実はこの展開は、ラストに使う予定でした。

- ・三岸の実験によってヘラクレスワームに
- ・目的を知った夜陰Ⅱザビーが三岸と戦おうとするが、三岸には敵わず

- ・遅れてやってきたカブト&ガタツクと、三岸との戦い
- ・力を制御し、総てのワームを呼び寄せたヘラクレスワームがカブトに倒される

- ・天堂屋に何故か桜の花びら↓それを見たマユが不意に「お兄ちゃん？」と眩き涙を流す

…って具合に。

三岸を何のライダーにするかは決めていませんでしたが、とにかく、本当はこれをラストにする気満々でした。

俺…どれだけソウジさんを不幸にしたら気が済むんだろう。

あと(どの作品でも言えたことですが)シヨウイチさんもね！

ソウジさんはどうしても東方Projectのキャラで例えるなら、西行寺幽々子になってしまう。

蒼空に舞うは、反魂蝶、♪

今回は、名前だけですがとんでもないゲストが出ます。

## 九速目

時空の壁を越え、ようやくハイパーゼクターが飛来する。

「これは…！」

——そもそも天道総司の世界と天堂ソウジの世界は、次元の壁が強い…

今回偶然渡れたのも、現在9つの世界間で起こっている“危機”のために、時空を隔てる【壁】が弱まっていたため。

天道総司が降り立って暫くは、その【壁】も強くなりハイパーゼクターは来ることができなかった。

だが、今このタイミングでハイパーゼクターがようやく来た。

……カブトはそれを受け取り、ハイパーゼクターを左腰に取り付ける。

「おい、天道…それは」

「——おばあちゃんは言っていた。俺は世界の中心だと」

「へ？」

「そしてそれは、異世界の俺も同様。この男が“この世界”の中心ならば、……俺が救ってやる！」

『Hyper Cast Off』

そして、ゼクターホーンを一回倒し…ハイパーキャストオフを行う。全身のアーマーが内部にタキオンプレートを収納し、以前の二倍近くの強度を持つカプテクター。

更にそのカプテクターを展開させ、背中からは波動化したタキオン粒子がまるで羽のように広がる…

“仮面ライダーカブト ハイパーフォーム”が、君臨していた。

「“この世界”の加賀美、…そういうわけだ。後は任せた」

「お、おい、……天道ッ!？」

「——ハイパークロックアップ!」

『Hyper Clock Up』

ただそれだけ言い残すと、カブトハイパーフォームはハイパークロックアップを発動。

…突然見たこともない姿に変身し、突然去っていったカブト…

アラタとユリはただ呆然と、彼のいた場所を眺めることしかできなかった。

〃  
〃  
〃

三岸は、装置の横に取り付けられたレバーを引く。  
すると…

ゲート部分に位置する場所から、バチバチと青い閃光が奔<sup>はし</sup>り出した。

「…これは！」

「一応完成はしたが、これはまだ第一段階と言ったところ。………完成品は、クロックダウンシステムのようにタワー型の電波発生装置となる予定だ」

「まさか、お前は…」

「そのまさかだ。——タキオン粒子を含んだ特殊な電波を世界中に発信し、人間をワームに…いや！ワーム以上の存在にさせる…！それが私の、『人類進化計画』なのだ…！」

それを聞いた瞬間、天堂ソウジは三岸に素早く足払いを掛ける。  
だが…

三岸は伊達に長い間、ZECTに居たわけではない。

戦闘経験のある彼のローキックを食らっても、蚊に刺されたような反応しかなかった。

「無駄な抵抗はよせ、カブト。……私はそもそも、ワームの生体に興味があつてね。彼らの力は素晴らしい」

「ッ！」

「ZECTとしてワームを倒し、調べる一方で私は……人間をより良いものに作りがえるべく、研究・試行を重ねていた。そして、君のお陰でそれが実現を迎えようとしているのだ！ マスクドライダーの基盤を作った日下部夫妻の子として、光荣だとは思わないかね？」

目に狂気を宿す三岸。

そんな彼に寒気を感じ、天堂ソウジは何とか声を絞り出す。

「——おばあちゃんは言っていたな、自分に溺れる者はいずれ闇に落ちると。……だがお前は……狂っている。後戻りができないほど、歪に……！」

「人間達の進化への第一歩に、協力してもらおう……何しろ君は、人やワームを超越した【存在】に一番近い。私の仮説を確かなものにするのは、……君以外にいないのだよ」

「くっ！？」

バツと構えを取る天堂ソウジ。

……三岸の狂気に、防衛本能が働いたのだろう。

儚い抵抗だと思いつつも、三岸はゆっくりと構える……

武力で捻じ伏せ、屈服させる気だ。

「……抵抗するのは構わないが、痛い思いをするのは自分だけだぞ？」

「三岸……ッ！」

そして…

——そんな二人の間に、割って入って来る存在がいた。

見た目は、カブトに近いが…  
天堂ソウジは目の前のカブトの姿に、見覚えが無かった。  
三岸も同様に、目の前の存在に叫ぶ。

「…なんだ、貴様は!？」

「俺は、天の道を往き…総てを司る男。——天道総司だ」

「総司君?…しかし、その姿は」

「どうやら、まだ大丈夫のようだな。天堂ソウジ」

フツ、と仮面の奥で微笑む天道総司…カブトハイパーフォーム。  
しかし三岸は、突然現れた新たなカブトに疑問を感じながらも…  
彼が報告にあった「もう一人」だと知り、笑みを漏らす。

「君が、もう一人のカブト。——成程、その姿も一種の進化した形だ。……だが、私の計画に…マスクドライバーは要らないのだよ!」

「おばあちゃんが言っていた、俺の進化は光よりも速い。全宇宙の何者も俺の進化にはついて来れない」

そう言つて、天を指し示すポーズを取るカブトハイパーフォーム。だが、彼はすぐ…近くに居た天堂ソウジの背中を、軽く叩く。少し驚いたようではあったが、——こちらもまた、蚊に刺された程度の反応しかなかった。

「ん、」

「……ただ一人、“この世界”の俺を除いてな」

「総司君、…そうだな…そんな装置を使わずとも、人間は日々進化していく。この世に人類の基盤となったモノが生まれ、知恵を得、力を得、心を得たように」

「そうだ。——お前のしていることは、人間として生きる者…ワームとして生きる者総てに対する、冒涇でしかない」

天堂ソウジと、カブトハイパーフォームに言われ…

三岸は、ギリ…と齒軋りをする。

「冒涇？私のしていることが？——ふざけるな。私は人類の進化のためにと、この研究を続けてきた！むしろ感謝されるべきだ」

「そうだ…三岸とやら。俺の知る未来のお前の末路を、教えてやろうか」

「何だと？」

「……お前は野望を叶えることなく、命尽きる。そしてワーム自体も、ある一人の男によつて…自分もろとも根絶やしになる」

「だが、」

カブトハイパーフォームはそう言いながら、三岸に言い放つ。

「——俺は“この世界”に来て初めて食べたのは、【天堂屋】のおでんだ。そのおでんの味は、大根・がんもどき・卵…この三つが揃って初めて意味のある、素晴らしい味だった」

「そういえば、君…確かに食べていたな。……うちのおでん」

「あのおでんの素晴らしい味を壊さないためにも、この男を…天堂ソウジを救うためにも、——“この世界”が辿る未来の筋書きを変えてやる」

そう言い放つと、彼は何処からとも無くパーフェクトゼクターを取り出す。

そして、カブトパワー単体で放つ“ハイパーキャノン”を放った。それは三岸を狙うかに思われたが、三岸はギリギリの所で回避する…だが。

——回避したことにより、背後にあった装置に…攻撃が直撃していたのだ。

「なっ…!？」

「おいおい、…未来って事は…君はもしかして、未来から来たということになるのか？」

「流石俺、理解が早いな」

「…未来から来た人間が、過去を変えて大丈夫なのか？」

「俺の知る未来は【変えなくてはいけない未来】だ、問題はない」

顔を青くさせる三岸をよそに、マイペースに会話をする天堂ソウジとカブトハイパーフォーム。

そして…

カブトハイパーフォームの乱入により、この瞬間には既に作られて

いたはずのヘラクレスワームは誕生しなかった。  
その事によって、ワームの大量発生ということもなくなったのだろ  
う。

……キチンとサソードとドレイクを片付けてやってきた、過去の力  
ブトがやって来た。  
ガタツクはいなかったが、恐らくは、今頃ザビーと戦闘にでもなっ  
ているのだろう…

「あ」

「何ッ？」

「フッ、」

そして、

——2人のカブトは…鎌田然り、その後の門矢士と辰巳シンジ然  
りの、【融合】を行っていた。  
融合したカブトではあったが、意識や肉体はすべてカブトハイパー  
フォームの中に収納された…  
つまり『未来から来た天道総司』が、勝った。

「——おばあちゃんが言っていた。俺が望みさえすれば、運命は  
絶えず俺に味方する」

「いや、それ、ここで使う言葉じゃないんだが……まあいつか」

目の前でカブトがハイパーカブトの中に融合されていったというの  
に、した本人と天堂ソウジは…軽く流していた。

……これ、『本来辿るべきの未来』はどうなったんだろうか…

天堂ソウジはふと考えたが、——考えることは放棄した。

自分の野望の足掛かりであった装置を壊された、三岸に動きがあっ

たからだ。

「…よくも、私のつ…私の大事なツ！……あああああつー！」

三岸は想定外の事態に取り乱し、装置の元に走り出す。

だが、装置は既に火花を散らしており…いつ爆発してもおかしくない。

「待て」と天堂ソウジが叫ぶが、

——三岸が近付いた瞬間…装置は、大爆発を起こしていた。

「…！」

「これが、…人を超えようとした愚か者の末路か。過去も未来も、…それ相応だな」

「——天道！天堂さんは無事なのかっ！？」

「三岸さんッ！」

部屋の中に、互いにボロボロでありながら…アラタと夜陰がやって来た。

“変えられた過去”の記憶は、融合した時に共有したのだろう。

カブトハイパーフォームは、「ふむ」と納得しながら、アラタに言った。

「——成程、変えられた過去のお前は…俺を先に行かせるため、夜陰のザビーと戦ったのか」

「は？今更何を……って弟切！？じゃない、天堂さん！！？」

「……くうだらあん」

「げっ弟切!？」

「冗談だ」

「……」

弟切ソウと間違えられ、天堂ソウジはその弟切の真似をする。

すると、アラタはビクツと肩を弾ませたが……

その後真顔で放たれた天堂ソウジの一言に、弟切をよく知る夜陰とアラタは「冗談に思えない」と心で呟き……カブトハイパーフォームは、自分だけ取り残された疎外感で黙る。  
だが……そんな時間も、長くは続かない。

炎上する機械の奥から、……それはゆつくりと起き上がる。

蜂を模した怪物で、右腕には針の噴出口のようなものがついている……

“ホーネットワーム”

そう呼ぶに相応しい存在は、両手を広げ……高らかに笑い出していた。

『ふ、ははは……はははははっ!』

「その声は……三岸!？」

「何だって!？」

ホーネットワームの声を聞いたアラタと、夜陰が反応する。

その一方で、ハイパーカブトは何故三岸が……と考える。

……だが、先に結論に至ったのは……三岸の【計画】を逸早く知っていた、天堂ソウジだった。

「——そうか、あの装置は……確か大量のタキオン粒子を含んでいる。奴の仮説が本当ならば、爆発と同時に中のタキオン粒子が奴の中に吸収され……」

「……結果として、目的の『人間もワームも超えた存在』が出来上がったということか……！」

『そうだ！……ふふ……しかし、不幸中の幸いとはいえ……新たな発見だ。——徐々にタキオン粒子を流し適応させなくとも、一気に解放すれば……人類は進化すると……！』

ホーネットワームは、そう言い放った後……高らかに笑い出す。

そして、三岸の変わり果てた姿に……夜陰は絶望し、その場に座り込む。

当然といえば当然だ。

信頼していた上司が、ワームに変化し……更に人類すべてを自分と同じようにしようとしていたのだから。

新たな力を得、高揚したホーネットワームは、力を試そうと右腕の噴出口を構える。

だが……

その場に偶然、高宮ユリと甲ユヅキがやってきていた。

そして、近くには修復されたカブトゼクター。

——どうやら“変えられた過去”のユリはZECTの場所が分からず、ユヅキを頼ったのだろう。

本来あるべきの未来に関しては、……ヘラクレスワームがZECT一点にワームを集めたのだ。それを手掛かりにしたのだろう。

「あれは……！？」

「ちよつと、何なの！あのワームは……！」

『丁度いい。——この力を試させてもらおう！』

狙いを2人に変えたホーネットワームは、噴出口から猛毒性のある針を噴出していた。

ハイパーカブトはハイパークロックアップをしようとしたが、…その彼よりも早く、動き出した者がいた。

——たった一瞬だった。

天堂ソウジが今いる場所から、数100mも離れた場所に居たユリ達のところに駆けつけ…

彼女達を毒針から守るべく、ユヅキの持っていたベルトと修復されたカブトゼクターを使い変身。

高い防御力を誇るマスクドフォームで、守っていたのは。

人間とは思えない速さに、——カブトハイパーフォームは…カブトマスクドフォームに告げた。

「まさか、…お前」

「……俺は元々、半分人じゃなくなっている。…人でもなくワームでもない、半端な存在だ」

その理由を知っているアラタやユヅキは、ゴクリと息を飲む。

夜陰も、…困惑していたが…大体のことは、理解できたのであろう。そしてカブトマスクドフォームは、腰を抜き、座り込んでいたユリに手を差し伸べる。

「——大丈夫か？」

「え、…はい…」

「……？…待てよ、どこかで…会ったことが…ないか？」

思えば、カブトマスクドフォーム…天堂ソウジは、初めてユリの顔を見たことになる。

ユリはそんな彼の手を握り、ゆっくり立ち上がる。

彼女の手の感触を感じたカブトマスクドフォームは、——やっと理解していた。

「…もしかして、……18年前に…【天堂屋】の前で、泣いていた…」

「——その…ユリよ。……ごめんなさい、私…！」

ぎゅ、と強く手を握るユリ。

そんな彼女の気持ちを受け止めながらも、カブトマスクドフォームは避難するように告げた。

「……ユリくん、…そのことはもういい。アラタ達と一緒に、隠れているんだ」

「…天堂さん、いえ、……ソウジさん」

「ん？」

「……私、もう、あなたのこと疑わない。カブトだって、何だっていい…あなたを、信じますから。だってあなたは……三回も私を助けてくれた、…優しい人だから」

それだけ言うと、ユリはアラタやユヅキ、夜陰と一緒に避難する。

彼女達が安全な場所まで行ったのを見届けると、カブトマスクドフォームは…

ホーネットワームに視線を向けていた。

『くそう…カブトツ！どこまで、私の思い通りにならない…何処まで余計なことばかりする…！』

「お前の思う通りになるはずがない。——俺には守るべきものがある、守るべき居場所、大切な人々が…」

『馬鹿な。世界中はカブトを敵だと認識している、どこにそのような場所が!』

「……お前は、『仮面ライダー』という存在について少しでも考えたことはあるか?」

カブトマスクドフォームの言葉に、ホーネットワームは眉間に皺を寄せる。

そして…

【仮面ライダー】の存在の意味を、カブトマスクドフォームは語った。

「——俺は士と会った後、仮面ライダーについて考えていたよ。幸い、時間は人よりあったからな」

「仮面ライダーは、傍から見れば正義の味方かもしれない。だが、……実際はワームや…それ以外の怪人と何ら変わらない。普通に生きる人にとっては、『異端』なんだ」

「戦う力のない人達は、自分達を脅かす存在と対等に戦える存在を尊敬するどころか…それと同じ、もしくはそれ以上に恐れる」

「——基本的にライダーは、孤独で、誰にも理解されない存在なのだろう。どんなに大義を持っていたとしても、人々に理解してもらえなければ、意味はない」

「だが、…それでも仮面ライダーが戦うのは…自分の事を理解し、肯定しようとしてくれるほんの一握りの人間を守りたい。その人の居る場所を守りたい」

「個人的なことかと思うかもしれないが、——それが…ライダーにとっての唯一無二の支えなんだ」

「だからこそ、仮面ライダーは仮面ライダーとして戦える。……大事な人達の笑顔、未来、居場所、…それらを…命ある限り戦い、守るために！」

「そして俺にも…おばあちゃんやマユが、信じて待っていてくれる。……ユリくんも…俺の事を理解してくれた、信じると言ってくれた」

「——俺は俺を信じて待っていてくれる人達のために、戦っている。…大事なものが何一つないお前に、負ける理由<sup>わけ</sup>はない！」

そう言い放ちながら、キャストオフを行う…  
そしてこの場には、カブトとカブトハイパーフォームが揃い踏みする。

カブトハイパーフォームとカブトは、それぞれ右手と左手で天を指すポーズを取りながら、ホーネットワームに言い放つ。

「おばあちゃんが言っていた、…不味い飯屋と悪が栄えた試しはないと」

「総てを見通す天道の光には、如何なる罪も抗えない…三岸。お前のその罪を…太陽の下に曝せ！」

『ふざけたことを…言うなああつ！』

カブトとカブトハイパーフォームは、ホーネットワームの針をかわす。

二つのカブトは、相手を挟む形で距離を詰め…

カブトクナイガン・クナイモードで針を全部弾き落としながら、スィッチ・フルスロットルを押し、ゼクターホーンを倒す。

『1 / 2 / 3 : Rider Kick』

そして、カブトハイパーフォームはハイパークロックアップを発動。ハイパーゼクターホーンを倒し、音声が聞こえたかと思えば、ハイパーゼクターからカブトゼクターにエネルギーが送り込まれる。

そのままカブテクターを展開し、ジャンプするカブトハイパーフォーム。

『Maximum Rider Power : 1 / 2 / 3 : Rider Kick』

挟み込む形で放たれた、二つのライダーキック。

現実時間とハイパークロックアップでは、大きな速さの壁があるが…

先にカブトがライダーキックを放ち、それより大きく遅れてハイパークロックアップでライダーキックを放つ。

すると…

まるで互いの動きを読んでいたかのように、ホーネットワームを同時に攻撃していた。

『そん、な……！？進化した力を手にした、私が……負ける……！！？』

ホーネットワームは、空中で大きな爆発を起こす。

ハイパークロックオーバーにより、現実世界に戻ってきたカブトハイパーフォーム。

それはカブトと背中合わせになるように立っており、——そして2人は変身を解除していた。

「……決まったな」

「ああ。……しかし、驚いたな。あの姿のクロックアップ、……相当速い」

「当然だ。——俺の掴み取った未来だからな」

「ははっ、確かに」

天道総司の言葉に、天堂ソウジは笑っていた。

そして……

そんな彼の肩を叩きながら、天道総司は告げていた。

「——そしてそれは、“この世界”での俺であるお前もまた、同じだ」

「ん？」

「お前もようやく、掴み取ったんだ。……望んでいた、未来を」

「……そうかもしれないな」

「…おい、天道！天堂さん…！」

「天道くん、生きてるー？」

「…ソウジさん…！」

すべてが終わったと知ったのか…隠れていたアラタにユヅキ、ユリが現れる。

そしてユリは、泣きながら天堂ソウジに抱きつく。

…突然のことに多少戸惑いながらも、天堂ソウジは、彼女の頭を撫でていた。

「よかつ、…ぐすつ…」

「……本当によく泣くな」

「だつ、て…」

「おいおい、ユリくん…」

なかなかいい雰囲気の2人に、…アラタとユヅキはどうしていいのか分からない。

だが、ただ一人…

天道総司だけは、説教をするような辛辣な口調で、天堂ソウジに告げた。

「おばあちゃんが言っていた。男がやってはいけないことが2つある、女の子を泣かせること…」

「——食べ物を粗末にすること、と言いたいんだろう？分かってる…分かってるさ…、…分かってるけど泣き止まないんだ」「ぐすつ…ひつく、…ぐす」

「っていうか、天道おまつ…そこは割って入るなよ!？」

「…流石よねえ」

ユリと天道総司の板挟みに遭い、流石に余裕がなくなってきた天堂ソウジ。

未だに泣き続けるユリ。

他人の恋路（？）を堂々と邪魔する天道総司に怒鳴るアラタ。

ただただそれだけしか言えなかった、ユヅキ。

そして彼らは…

【天堂屋】で帰りを待っているマユのため、ZECTを後にしていた。

## 九速目（後書き）

クライマックスはもうすぐです。

さて、今回で大部分が終わりましたが。

次回投稿予定の話は、後日談的なものになります。

…そもそもこれだけで終わったら、何の為に天道が来たのか分からなくなりますからね！

本日出たワームの設定は←

ホーネットワーム

- ・スズメバチの姿と特性を持つ。
- ・タキオン粒子を人体に直接、それも大量に流したことで作られた
- ・圧倒的な破壊力、右腕から出される猛毒針は1秒間に100発発射可能

・ヘラクレスワームが誕生する前にハイパーカブトが駆けつけたことでヘラクレスワームが作られず、三岸が自分で直接実験の対象となったがために生まれた

…っえー、前回の奴に比べると弱いです。

そもそもフリーズ使える奴と対等になれるのは、天道だけです。後ソウジさん。

前回言っていたゲストとは、「門矢士」と「辰巳シンジ」。

本当に名前だけの登場です。

まあ、Lostも直接的な内容ではありませんが、「剣立カズマ」を示唆するセリフもありましたし。

士はセリフありゲストでしたが。

そういえば、弟切は名前だけなら結構出ている気がする…

当然と言えば当然かと思われませんが、なんだろう、何だかんだで好きなんだな弟切……ライ街の↑

仮面ライダーは孤高の戦士、のイメージが強いんですね。

コア大戦でも言っていた気がしますが、DCCDでそういう描写が強いのがカブト編。

後はソウジさんの言った言葉「作者の持論になります…」

コア大戦を話題に出しましたが、ディケブラを知っている方なら…

ソウジさんが自己犠牲以上？に犯した罪を分かってくれるはず。

まあ、その際…没になったセリフもちゃんと使ってはいますが。

それに流用されても大して気にしない勇者なので。あれは。

あくまで本作品は【仮面ライダーディケイド】スマブラの世界】と一切関係ありません

## Last speed (前書き)

一歩

また一歩

懐かしい道を歩いていく。

… ゆったりとした時間。

… 自分と同じ速度で動く、人や動物。

総てが懐かしい。

まるで、10年も帰ってきていないような感覚だ。

昔話にある【浦島太郎】も、きっとこんな感じだったのではないだろうか。

自分と、自分の周囲の年月が違いすぎるような感覚…  
それには未だに慣れない。

隣にいる彼は、「ゆっくり慣れていけばいい」と言ってくれた。

すぐには適応できないだろうが…

それよりも、今は……

目の前の開き戸を、開けることにしていた。

「——ただいま」

ああ、

…懐かしい匂い。

帰ってきたんだ、俺は。

## L a s t   s p e e d

あの戦いから、五日経った。

ZECTは指導者だった三岸を失い、混乱を極めていた。

そんな中で、ザビーである夜陰にZECTの次の指導者を求める声  
が上がる…

しかし、夜陰は今回の件で三岸の陰謀に気付けなかったことを理由  
に、それを辞退。

そして…

カンカン、と立て直される音。

天道総司は何食わぬ顔で歩き、周囲を見る…

あの後、またハイパーゼクターが【壁】に阻まれて来れなくなり、  
立ち往生。

…しかしいつものようにアラタの家で料理を作ったり、時折こうや  
ってZECTに顔を出している。

そして…

黒いスーツを着た男を見、フツと笑う。

「——馬子にも衣装とはこのことか、“この世界”の加賀美」

「そりゃあ、お前の前で黒いスーツは着てなかったからな…」

そう言い返すのは、アラタ。

…実は夜陰自らの推薦で、彼がZECTの指導者となった。

彼ならば実力は勿論、カブトの誤解を解くために第一線で動いてくれる上、……三岸のような過ちはしない。

夜陰だけでなく、2人の『てんどうそうじ』の賛同もあり、アラタは流されるがままに指導者にされていた。

だが、彼の中にある情熱はZECTをいい方向に変えていくだろう…

「それにしても、問題はこれからかあ…天堂さんはZECTに戻る気はないって言うし、サードとドレイクの資格者はゼクター返しちゃうし」

「まあそう言うな、“この世界”の加賀美…いや、鑑」

「仕方ないといえば、仕方ないんだろうけどさ。天堂さんに関しては、俺も納得してるんだ」

天堂ソウジは、アラタに『ZECTに戻ってきて欲しい』と頼まれはしたが…

彼はその申し出を、一言

「断る」

…で返していた。

ZECTのした事を考えれば仕方ないとも思われるが、天堂ソウジはZECTを逆恨みしていない。

だが、暫くは【天堂屋】で傍にいてもすることのできなかった親孝行：ならぬおばあちゃん孝行をしたり、マユと過ごしたいという旨を聞き、アラタはそれ以上引き止めることはなかった。

それに、ZECTには戻る気は無いと言ったが：カブトとして戦うことは辞めるわけではないとのことで、『この世界の仮面ライダー』として戦っていくそうだ。

「——でもな！？サソードとドレイクは、何なんだよ！『あんな思いはもう嫌だ』とか、『金は貰うだけもらったし、もういいかな』とか！！」

「：ふむ、“この世界”の神代と風間は：情けないな。俺の世界の神代と風間の爪の垢を、飲ませられるものなら飲ませてやりたい」

蠍火ツルギは、“天道が変えてしまった過去”では、ガタツクに相当やられたようで。

元々瑠璃星のように個人的な理由があったわけでもなく、天堂のよう  
に強い思いがあったわけでもない彼は：すっかり怯え、サソード  
ゼクターを返してしまった。

瑠璃星ダイスケも、元々金目的だったことから今後のZECTに見  
切りをつけ：

同じように、ドレイクゼクターを返していたのだ。

：流石に夜陰は依頼退職せず、かつての上司の不始末をきちんとつ  
け、尚且つザビーとしてこれからも世界のために戦うとのこと。

彼は本来、純粹に“この世界”の事を思って、世界のためにと三岸  
に従ってきていた。

更に――夜陰はこれまでの謝罪のためか天堂ソウジに「殴れ」と言  
ったようだ、…本人は夜陰が世界のためにしてきたことを知って  
おり、殴ることはなかった。

むしろ、その純粹さを人々の為に活かしてほしい。

…そう言って、彼を許していた。

「――はい、鑑。天道君。お揃いね」

ユヅキが、資料運びながら声をかけてくる。

…かなり重そう。フラフラと、足取りが覚束ない。

流石に誰かとぶつかったりしたら危ないと考えたのか、アラタはそ  
の資料を半分持つ。

「甲さん、危ないですよ！？…ほら」

「あら、ありがとう」

「…一体何なんだ？その資料は」

天道総司はユヅキの持ってきた資料に、眉を寄せていた。

…見たところ、機密文書のようなが…

ユヅキは「ああ」と声を上げながら、説明していた。

「三岸の研究資料。――すっごいわよ、これ、…流石ZECT創立  
からただけあるわ。半端ない資料の数！」

「これ…一体何に使うんですか？」

「奴の資料、ということ…。…人間をワーム以上の存在にする  
という、【人類進化計画】か」

「やあねえ。人をあんなのと一緒にしないで頂戴」

それだけ言うと、ユヅキは天道総司にも荷物を持たせる。

…相変わらず強引な彼女に、天道総司は眉間の皺を深くしていた…  
手がやっと空いたユヅキは、けのびをしながら、質問に答える。

「…天堂さんよ。人体に流れ込んだタキオン粒子を、どうにか取り除けないかって」

「…」

「完全にワームにされる前に止めたとはいえ、…元々…微量に流れ込んだタキオン粒子によって、少なからず半分ワームに近い体になっているのよ」

【人類進化計画】以前に、弟切ソウ…もといフィロキセラワームとの戦いの後、タキオン粒子を制御する動力回路が損傷し、クロックアップの暴走を引き起こしたカブト…:

動力回路から僅かに流れ出たタキオン粒子は確実に人体に吸収され、結果として、三岸の目指していた“人間もワームも超える存在”の一手手前の状態になっていた。

…ホーネットワームとの戦いの際、一瞬でユリとユヅキのところに移動してきたあれは…

間違いなく、クロックアップ。

「でも、体の中に含まれたタキオン粒子を取り除くことなんてできるんですか？」

「その場合は…逆に考えて、半分人間・半分ワームの状態から完全人間に戻す方法を探すか…まあそれよりも今は、クロックアップの制御装置みたいな物を作るわ」

「…やった本人も、自分の状態は分かっているけど…どうやってクロックアップをしたか分かっているのがなあ。……こりゃ、そのうちまたクロックアップの暴走を引き起こすんじゃない…」

「そうしないための制御装置よ、馬鹿ね」

軽く脇を小突かれ、アラタはよろめく。  
時間は掛かるだろうが…

それでもユヅキならきつと、可能だろう。

——天道総司はアラタの資料の上に自分の物を置くと、去っていく。

いきなり重さが倍になり、アラタは大きくふらつく…  
そして怒鳴るようにして、訊ねていた。

「おいっ、天道！…何処に行く気だーッ！？」

「決まっている。——“この世界”の俺のところだ」

そう言っつて、颯爽と去っていく天道総司…  
そして。

「——あーッッッ！？」

「こらっ、鑑！何してるのよ！？」

恐らく荷物も重みに耐え切れなかったであろうアラタの絶叫と…  
そんな彼を叱り飛ばすユヅキの声が、聞こえていた。

くくく

ZECTから『カブトは敵ではない』という報道がされても、今も尚“この世界”の住人達はカブトに不信感を持っている…

いきなりのもので、戸惑っていることもあるのだろう。

だが、すぐにそれを受け入れた者もいる。

……高宮ユリ。彼女も、その一人だ。

彼女は、いつも通り【蓮華】で料理を作っている。

そして…

【蓮華】に入ってくる、一人の男がいた。

それは、——天道総司だった。

「あ、確か、…天道君？」

「ここに天堂ソウジはいないのか」

「はい…さっきまでは、一緒に仕込みをしてくれたんですけど」

「そうか」

【蓮華】の経営に戻る事になったユリであつたが、…天堂ソウジがいない店の中は、どこか狭く感じられていた。

——また戻ってきてくれないかしら…

——でも、あの人のことだからきつと、実家の方が…

そう思っていたユリであつたが、……あの戦いから二日ほど経った

日。

『よっ、』

気のいい笑みを見せながら、…天堂ソウジがやって来ていた。一体何故、

ユリは突然の事に思考が止まっていたが、天堂ソウジはカウンター席に座りながら、ユリに言った。

『そ、ソウジさん…？』

『大根の煮物。君の味でいい、作ってくれないか』

『え…っ』

『——料理で御礼をしたいんだろう？暫く世話になっていた時ののは、互いに知らなかったからな。ノーカウントで』

…もしかして、そのためだけに来てくれたのか。

それがユリにとっては嬉しくて、涙が出たが、…涙を手で拭う。

そして彼女は、笑顔で返事していたそうだ。

『——はい！腕によりをかけて、作らせていただきますっ』

『はは。それは、楽しみだ』

それからというものの、時々【蓮華】の方に顔を出しているそうだ。…いきなりカブトがやってきて、店に居た客達は驚くことがしばしばであったが…

「ところで、…そこに置いてある鍋は？」

「あ、これですか。ソウジさんが作ってくれた、大根の煮物なんで

す。——やっぱり美味しいですよねえ……」

「ちよつと貰っていいだろうか」

「はい。いいですよ」

ユリはおたまで大根を掬い、天道総司に出す。

煮崩れはしておらず、味もよく染み込んでいるのが見て分かる。

更に食べる人の事を考え、小分けにされている……

彼は箸を持ち、そのまま一口……

——食べた瞬間、天道総司の目の色が変わった。

「……！……これは、……何を隠し味にしているんだ……！？」

「私もそれを探しているんですけど、……なかなか見つからなくて」

「おばあちゃんが言っていた……誰にも分からないように隠し味をつけるのは楽しい。だが、それを見つけるのはもつと楽しい」

「——そうですね。私も、絶対に隠し味の秘密を解きたい！……って  
……ワクワクしています」

その後、天道総司とユリは互いに目の前の大根の煮物についての謎を  
考えていた。

だが……

ふと、ユリが「そういえば」と、彼に訊ねる。

「……天道君って、そもそも……何の用事でソウジさんに？」

「……そうだった。……味の秘密は、歩きながら考えるとするか……」  
「頑張ってくださいねー」

宣言通り、歩きながら考え……店を出る天道総司。

そんな彼を見送った後、ユリもまた、隠し味の秘密について考えて  
いた。

「…醤油が違っのかな…うつん、……味噌…？」

〵〵〵

【天堂屋】。

天道総司は店の引き戸を開ける。  
彼を出迎えたのは、マユだった。

「いらっしやいませ！——あれ、天道さん？」

「天堂ソウジはいるのか？」

「お兄ちゃんだったら、大根の買い出しに行っただけですけど…何か用ですか？」

「いや、いないのなら別にいいんだ。…」

天道総司は、マユを見る。

——こいつも、ひよりと同じ…ワーム

——そして、“この世界”の俺が守るべき…妹  
じっと見つめる視線に気付いたマユは、戸惑いながら訊ねる。

「て、天道さん？私の顔に、何か付いているんですか？」

「…いや、何も。……マユ、」

「はい？」

「——お前は強く生きる」

いきなり、何を言っているのだろうか？

マユは戸惑っているが、別の客がやって来たのを見ると……いそいそと接客に行く。

そして、

……天道総司は……マユの祖母と、目が合っていた。

彼女はすぐに視線をおでんの方に戻すと、天道総司に告げた。

「……うちのソウジならきつと、【渋谷平和記念公園】だよ」

「……渋谷平和……成程、あそこか。……しかし、何故？」

「さあねえ」

そう言うと、祖母はそれっきり何も言わなかった。

しかし、何か事情があるのだと悟った天道総司は……

それが何なのか訊ねることはせず、【渋谷平和記念公園】に向かっていた。

（（（

【渋谷平和記念公園】

そこに…天堂ソウジは、黙祷していた。

その墓の前には、【日下部】と書かれた墓標…

——そして彼は、近付いてくる天道総司の存在に気付き、黙祷を終える。

「……俺の両親は、渋谷隕石で死んだ。…俺の目の前で」

「…」

「小さい頃は、もしも過去に渡れるのなら…この手で両親を救いたい。そんな事を考えていた時もあった」

「——今は、どうなんだ？」

天道総司が、問う。

その言葉に天堂ソウジはフツと笑いながら、左手で天を指し示す。

「……俺は、“今”を大事にすることにしたよ。…勿論、君が救ってくれた“今”もな」

「…そうか」

「そういえば君は、未来から来た総司君ということになるんだよね。…どうして、過去…今のこの世界に？」

「俺は、お前を救いに来ただけだ」

それを聞いた天堂ソウジは、考えていた。

…本来辿るべき未来を変えた、あのカブトの力…

だが、それはそう易々と使っていないものではないだろう。  
自らが人からもワームからも孤立する存在となってしまった天堂ソ  
ウジには、自然と分かっていた。  
しかし…

……力をどう使うかは、その人間自身。

……人が辿る【可能性】の道は、人の数ほどある。

……彼はその内の、【俺もこの世界も救う道】を選び取った。

そう考え、彼はこのことについては何も言わないでいた。  
勿論、天道総司がどうして“あの力”を得たのかも。

「…そうか」

「しかし……天堂ソウジ、お前に聞きたいことがある」

「ん？」

「——この世界で珍しい大根は、あるか？」

本来の目的、それは、『異世界の大根を探すこと』

…あんな騒動に巻き込まれておきながらも、律儀に加賀美との約束  
を覚えていたらしい…

それを聞いた天堂ソウジは、

「……ぷっ、」

——軽く噴出していた。

恐らくそれは、クロックアップの世界から解放され…初めての、大  
笑いだろう。

腹を抱え、苦しそうに笑っていた。

自分としてはおかしいことを言っただけでもない、天道総司は眉を上げていたが。

「……くくく、……本当に面白いな君は」

「真剣だぞ」

「あはは……はあ、はあ。……珍しい大根なあ、……くく……じゃあ、これなんてどうだ」

そう言つて、天堂ソウジが差し出したのは……

——店の買い出しに頼まれていた、大根だった。

見たところ、普通の大根と変わりのないそれに……天道総司は、首を傾げていた。

「……それが珍しい大根か？」

「ああ。君の所とは違う世界の、大根だ」

「……普通の大根のように見えるが」

「いや？もしかしたら、甘みとかが違うかもしれないな……あはは」

未だに笑いながら、言う天堂ソウジ。

天道総司はそれを受け取りながらも、何か……最後にしてやられたような気がしてならない。

すると……

【壁】を越え、再びハイパーゼクターが飛来してくる。

それを見た天道総司は、フツと笑みを漏らす。

「……そうだな。そろそろ俺は、俺の世界に帰るとするか」

「また会えるといいな、総司君」

「ああ。——そうだ天堂ソウジ、【蓮華】にあったお前の大根の

煮物…食べさせてもらった」

「ん？そうか。……それで？」

天堂ソウジはカブト…そしてそのまま、カブトハイパーフォームに変身する、天道総司に尋ねる。

そして、カブトハイパーフォームは右手で天を指差しながら、告げる。

「……必ず隠し味の秘密を暴いてやる。そして、答えを聞かせに…また来てやらないでもない」

「ははっ、それなら…今度来た時は、君の料理を食べさせてもらいたいものだ」

『Hyper Clock Up』

それだけ告げると、カブトハイパーフォームは自分の世界へと飛び立っていく…

そんな彼の姿を見送りながら、天堂ソウジは、両親の墓に言葉を残していた。

「——そういうわけだ。…まだ当分、そっちには行けそうにもない。……じゃあ、また」

そう言い残し、天堂ソウジもまた、帰っていく。

…自分の帰るべき、場所に。

）  
）  
）

洋食店【B i s t r o l a S a l l e】  
：

その扉を開けた、天道総司。

それに反応したのは、…一週間以上も待たされた加賀美であった。

「て、ん、ど、う、……お前なあゝ！？本当に、大根一本買いに行くのにどれぐらい掛かっているんだよ！？」

「お前が『異世界の大根を買ってこい』と言ったからだ」

「……確かに、あれは加賀美が悪い」

憤る加賀美を、軽くかわす天道総司とひより。

「がつくりと肩を落としながらも、「それより！」と天道総司に訊ねていた。

「ちゃんと買ってきたんだろっな！？異世界の大根！」

「ああ。——これだ」

「……へ？」

「……天道、これは、」

目の前に出された大根に、目を丸くさせる加賀美とひより。

それもそのはず……

天道総司が出したのは、一見、普通の大根。

「異世界、と聞いて魑魅魍魎を思い浮かべていた加賀美やひよりにとっては……あまりにも普通すぎて、逆に驚きだった。

「……これが、異世界の大根……？」

「なんていうか、……普通の大根だ」

「それは、異世界の俺が選んだ一品だ。……きっと最高のおでんが出来る」

「……何だろう、俺、……どう反応している？」

「ボクは知らないよ。……それにしても、……普通でよかったと言っべきか」

戸惑う加賀美と、諦めたひより。

とにかくひよりは、おでんの準備をしようとしていた……その時だった。

天道総司が、待ったをかけたのは。

「おでんといえば…そうだ、ひより。お前が好きな具は何だ？」

「ボク？…そうだな、…卵」

「加賀美は…牛筋肉だな」

「勝手に決めるなよ！いや、そうなんだけどさ…」

「そして俺は大根。折角異世界の俺から貰った一品を、無駄にはできないからな。——この三つの具だけで、おでんを作るか」

三つの具だけで、おでん？

…それを聞いた加賀美とひよりは、目を丸くする。  
だが、天道総司は既にやる気満々だ。

「さて、ひより。作るか」

「……ああ」

「…いや、おでんなのに具が三つって…おい！天道ッ！？」

加賀美の叫び声を背に受けながらも、天道総司は大根の桂剥きの準備をする。

そして…

異世界の自分の事を思い出しながら、調理を始めていた。

（——お前達家族のおでんが【絆の証明】なら、俺達のおでんは…  
【これからも共にあることの願い】）

（今度会う時は、俺達のおでんの味を堪能させてやろう……天堂ソウジ！）

〃  
〃  
〃

「——きゃああっ！」

桜並木の前で、サナギ型ワームが出現。

買い物の帰り道だった母親と子供が、今まさに襲われようとしていた…

その時だった。

…偶然通りがかった“彼”が、サナギ型ワームを蹴り飛ばす。

「あ、あなたは…」

「——子供を連れて下がるんだ！」

そう言うと、空から飛来してくるカブトゼクターを手に取り…  
変身、そのままキャストオフを行う存在。

…仮面ライダーカブト…

未だにカブトを恐怖の対象として見ていたのか、母親は子供の手を  
引き、逃げ出してしまう。

「…か、カブト…きゃああああっ!？」

「ギョルルル！」

「……はっ！」

向かってくるサナギ型ワームに、カブトクナイガン・クナイモード  
で斬り付けるカブト。

そして…

フルスロットル・スイッチを順番に素早く押し、必殺技の体勢に入  
った。

『1、2、3…Rider Kick』

「——ライダーキック！」

「ギョリッ!？」

波動化したタキオン粒子を、右足に纏わせ…

そのまま素早く回し蹴りを放つ、カブト。

その威力の前に、サナギ型ワームは爆散し……カブトは変身を解い  
ていた。

「…まったく、まだまだ安心できたものじゃないな」

カブトに変身していた男…天堂ソウジは、ワームのいた場所を眺めながら呟く。

そろそろ帰るか…

そう思っていると、彼の元に、先程逃げた子供がやって来ていた。頭の両側で2つ括りにされており、髪留めには、桜の飾りがついていた。

母親は青ざめた顔で子供の名を叫ぶ、「——さくら」と。

だが、子供はその辺で積んできたタンポポを…天堂ソウジに差し出す。

「ん？」

「——おじちゃん、たすけてくれて…ありがとう！」

おじちゃんと言われたことに、…正直…天堂ソウジは…内心軽くダメージを受けていた。

だが、自分の歳では言われても仕方ないことに納得し、その事は記憶の片隅に追いやる。

そして…

さくらと呼ばれた少女の【お礼】を受け取りながら、訊ねる。

「…俺が怖くないのかい？」

「ううん。ママもパパもみんな…『カブトはこわい』っていうけど、

…さくらは、おじちゃん…こわくないよ！」

「そうか？」

「うん！おじちゃんもカブトも、ママとさくらをたすけてくれたんだもん…かっこいいよ！！」

そう言って、さくらは母親の元に戻っていく…

そんな彼女の姿を見送りながら、天堂ソウジは桜並木を見上げる。  
——いくつかは蕾が膨らんでおり、中には、もうじき咲こうとしているものもあった…

「——もう、蕾になったのか。…現実の時間は、流れるのが早く感じるな」

それだけ言うと、天堂ソウジは買いなおした大根の入った袋と…【お礼】を手に持ち、帰っていく。  
ようやく帰ることができた、自分の居場所に。

——ただいま、マユ、おばあちゃん

——お帰り、…お兄ちゃん！

## Last speed（後書き）

以上を持ちまして、【Heaven's road of the KABUTO】が終了します。

元々、更新をするなら『せめて春のうちには終わらせたい』という目標がありました。

そして…

投稿日時で分かった方もいるでしょうが、本日はソウジさんの中の人の誕生日です。

この日に最終話を投稿することを、目標としておりました。

本編では決してハッピーエンド、とは行かなかったカブトの世界。これをどうハッピーエンドに近づけるか。

そして天道さんが混じっても違和感のないようにするには、どうしたらいいか。

…考えたその結果がこれだよ！

ソウジさんは一時的に失明する上に囚われの身になり、更には命を落としたり…

まるで生きる不幸です。

それでも、最終回ではそれなりに納得のいく幸せを得られたのでは、と思います。

あ、

天道さんに殴らせ忘れた。ソウジさんを↑

まあ…ソウジさんを殴れたのは、どの次元においても芦河さんだけだってことですかそうですか。

今回の作品は、龍騎のように総てを視聴したことがないせいで、wikiに頼るしかなかったのが最大の失敗点。  
そのため、天道や加賀美の性格が怪しいです。後ひより。

…時間があつたら見たいな…！  
それから、どうせならそのまんま目下部ではなく、“草壁”にするなりしたらよかつたんじゃないかなあ…とも。

その一方で、弟切の名前って意外と挙がっていたなあ…↑  
まあ、ソウジさんを語る分には弟切は欠かせないってことですな。すげえ。

最後に。

…ソウジさんのこれからは、皆様の想像にお任せします↑  
それでは！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0621q/>

---

Heaven's road of the KABUTO

2011年7月9日17時30分発行